田原本町埋蔵文化財調査報告書　第４集

阪手東遺跡発掘調査報告

－第２次調査－

２０２４

田原本町教育委員会

序

奈良盆地の中央に位置する田原本町は、条里制区画の水田が広がる豊かな穀倉地です。町の北部には国史跡「唐古・鍵遺跡」があり、弥生時代でも最大級の集落遺跡として栄えていたことが知られます。

田原本町の生涯教育施設として、「田原本青垣生涯学習センター」が平成 16 年にオープンしましたが、この施設は「阪手東遺跡」の一角に位置します。建築に先立つ発掘調査では、弥生時代の墓域が拡がっていたことが判明いたしました。北側 1.2 ｋｍに位置する唐古・鍵遺跡との関係が考えられる重要な成果です。その成果を調査報告としてまとめました。ご高覧いただき、ご指導願えれば幸いに存じます。

令和６年３月

田原本町教育委員会
教育長　山田　忠志

例　　言

１．本書は田原本町教育委員会が実施した奈良県磯城郡田原本町大字阪手所在の阪手東遺跡第２次調査の発掘調査報告である。

２．調査は、「田原本青垣生涯学習センター」の建築に先立つ事前調査として田原本町教育委員会が実施した。

３．調査は、平成 13 年 10 月 18 日から　14 年２月 19 日までの期間で実施した。
現地調査は文化財保存課技師　清水琢哉・豆谷和之、臨時職員　藤田慎一があたり、係長藤田三郎の指導と支援を受けた。

４．発掘調査の作業及び補助には以下の者があたった。

［現地調査］

作業員　吉村弘、吉川順博、谷昭男、桝井亀吉、前田佐喜造、長谷正巳、田守晃、植本義延、服部悦治、上田修作、西田武男、坂本久蔵、中森康段、森田登、木村卯三郎、山澤節子、山本由美子、森川俊司、森本英伸
株式会社島田組

補助員　望月達矢、佐々木健太郎、小栗典子、奥谷知日郎、石川ゆずは

５．整理作業は、遺物の実測を清水琢哉・江浦至希子がおこない、遺構・遺物のトレース等を清水・藤田慎一がおこなった。また、一部の遺物接合・復原はスタジオ 33 に委託した。

６．主要な遺物の写真は、地域文化財研究所・アートフォト右文に委託した。

７．本報告書の執筆･編集は清水があたった。校正作業等で柴田将幹･西岡加奈子の支援を得た。

８．調査では旧測地系（日本測地系）の座標値に基づき作図・遺物取り上げを行ったため、本書では旧座標系の数値のまま図示する。世界測地系との関係は別途図示する。

目　　次

本文目次

Ⅰ．はじめに

１．位置と環境・・1

２．田原本町周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

３．阪手東遺跡周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ．調査の成果

１．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

２．基本層序・・・8

３．検出した遺構

（１）北側調査区（第１・３・５トレンチ）の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

（２）南側調査区（本調査区、第２・４・６・７トレンチ）の遺構・・・・・・・・・・・・・・12

Ⅲ．まとめ・・・57

附　阪手東遺跡第２次調査　花粉分析の成果について

（一般社団法人文化財科学研究センター）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

挿図目次

第１図　阪手東遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２図　周辺の遺跡（S=1/20,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第３図　調査地の位置（S=1/2,500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第４図　調査区の設定と新旧座標系の対応（S=1/800）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第５図　基本層序（S=1/800）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第６図　北半調査区の遺構（S=1/500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第７図　ＳＫ-1001 東壁層序（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第８図　南半調査区（本調査区）の遺構（弥生時代中期）（S=1/500）・・・・・・・・・・・12

第９図　ＳＴ-101（１号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）・・・・・・・・・・14

第 10 図　ＳＴ-101（１号墓）東周溝内土坑　遺物出土状況（S=1/30）・・・・・・・・・・15

第 11 図　ＳＴ-101（１号墓）出土遺物（S=1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第 12 図　ＳＴ-102（２号墓）遺構平面図（S=/150）及び層序（S=1/50）・・・・・・・・・・16

第 13 図　ＳＴ-102（２号墓）東周溝　遺物出土状況（S=1/30）及び出土遺物（S=1/4）・・・・・・16

第 14 図　ＳＫ-103 層序（S=1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

第 15 図　ＳＴ-103（３号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）・・・・・・・・・・17

第 16 図　ＳＴ-104（４号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）・・・・・・・・・・18

第 17 図　ＳＴ -104（４号墓）東周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第 18 図　ＳＴ -104（４号墓）南周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第 19 図　ＳＴ -104（４号墓）出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第 20 図　ＳＴ -105（５号墓）遺構平面図 (S=1/150) 及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・20
第 21 図　ＳＴ -106（６号墓）遺構平面図 (S=1/150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第 22 図　ＳＴ -106（６号墓）層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第 23 図　ＳＴ -107（７号墓）遺構平面図 (S=1/150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第 24 図　ＳＴ -107（７号墓）層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第 25 図　ＳＴ -107（７号墓）東周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第 26 図　ＳＴ -107（７号墓）出土遺物（１）(S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 27 図　ＳＴ -107（７号墓）出土遺物（２）(S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第 28 図　ＳＴ -107（７号墓）東周溝内小土坑（ＳＫ -101）遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・28
第 29 図　ＳＫ -101 出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第 30 図　ＳＴ -108（８号墓）遺構平面図 (S=1/150) 及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・29
第 31 図　ＳＴ -109（９号墓）遺構平面図 (S=1/150) 及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・30
第 32 図　ＳＴ -109（９号墓）南周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第 33 図　ＳＴ -110（10 号墓）遺構平面図 (S=1/150) 及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・31
第 34 図　ＳＴ -110（10 号墓）北東角　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 35 図　ＳＴ -110（10 号墓）北周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第 36 図　ＳＴ -110（10 号墓）南周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 37 図　ＳＴ -110（10 号墓）出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第 38 図　ＳＴ -111（11 号墓）遺構平面図 (S=1/150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第 39 図　ＳＴ -111（11 号墓）層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第 40 図　ＳＴ -111（11 号墓）東周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第 41 図　ＳＴ -111（11 号墓）出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第 42 図　ＳＴ -112（12 号墓）遺構平面図 (S=1/150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 43 図　ＳＴ -113（13 号墓）遺構平面図 (S=1/150) 及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・37
第 44 図　ＳＴ -113（13 号墓）出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第 45 図　ＳＴ -113（13 号墓）東周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第 46 図　ＳＴ -114（14 号墓）遺構平面図 (S=1/150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第 47 図　ＳＴ -114（14 号墓）ほか層序（１）(S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第 48 図　ＳＴ -114（14 号墓）層序（２）(S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第 49 図　ＳＴ -114（14 号墓）南周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第 50 図　ＳＴ -114（14 号墓）西周溝　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第 51 図　ＳＴ -114（14 号墓）西周溝北端　遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・44

第 52 図　ＳＴ -114（14 号墓）出土遺物 (S=1/4・1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第 53 図　ＳＴ -116（16 号墓）遺構平面図 (S=1/150)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第 54 図　ＳＤ -118（18 号墓？）遺構平面図 (S=1/150) 及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・46
第 55 図　ＳＤ -118 遺物出土状況 (S=1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第 56 図　ＳＤ -118 出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第 57 図　ＳＫ -102 遺構平面図及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第 58 図　ＳＤ -152 遺構平面図 (S=1/200)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第 59 図　ＳＤ -152 層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第 60 図　弥生時代後期の遺構 (S=1/500)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第 61 図　ＳＤ -151 層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第 62 図　ＳＫ -151 とその周辺 (S=1/80)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第 63 図　ＳＫ -151 遺構平面図及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第 64 図　ＳＫ -152 遺構平面図及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第 65 図　ＳＫ -151 出土木製品 (S=1/6)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
第 66 図　弥生時代末～中世遺構　出土遺物 (S=1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第 67 図　ＳＫ -6051・6101 遺構平面図及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第 68 図　ＳＫ -4051 遺構平面図及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第 69 図　ＳＫ -4001 遺構平面図及び層序 (S=1/50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第 70 図　南半調査区の遺構（中世以降）(S=1/500)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

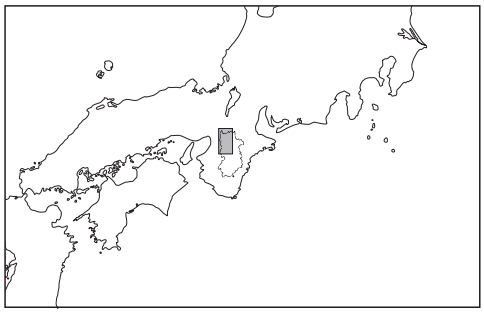
Ⅰ．はじめに

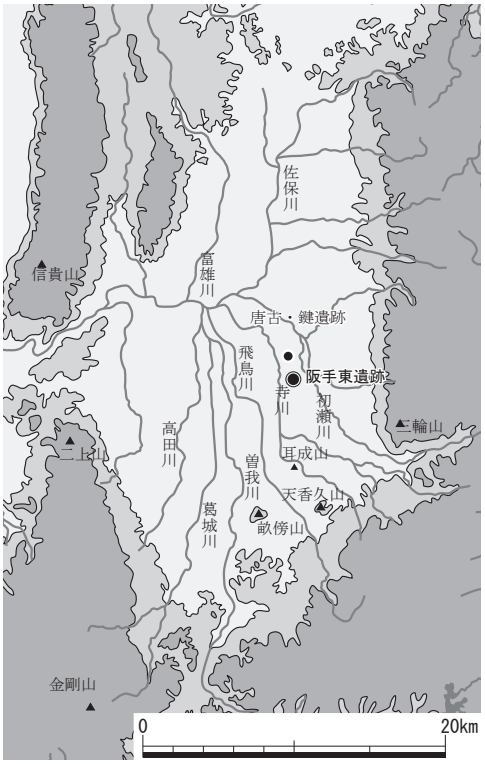
１．位置と環境

奈良県北西部に拡がる奈良盆地は、西側の生駒山及び金剛・葛城山系、東側の龍王山系、北側の平城山丘陵、南側の吉野山系によって画された南北約 25 ㎞、東西約 20 ㎞の南北に長い盆地である。

盆地北半では佐保川・富雄川等が南流し、盆地南半では初瀬川・寺川・飛鳥川・曽我川・葛城川・高田川が北流する。これらの河川は盆地中央付近で合流して大和川となり、生駒山系と葛城山系の間にある亀の瀬という渓谷部を通って河内平野へと西流する。盆地内の地形は主にこれらの河川によって形成された沖積平野から成るが、一部矢田丘陵・馬見丘陵等の低丘陵を含む。

田原本町は、奈良盆地中央やや南寄りに位置する。町内を初瀬川・寺川・飛鳥川・曽我川が北流し、これによって形成された沖積平野が町全体に拡がる。本町北部の大字唐古および大字鍵に拡がる唐古・鍵遺跡は、弥生時代でも有数の規模を誇る集落遺跡である。この遺跡では、弥生時代が稲作農耕を生業としていたことを実証した学史的にも有名な遺跡で、その中心部は国史跡に指定されている。また、膨大な出土品のうち優品約 2,000 点が重要文化財に指定された。



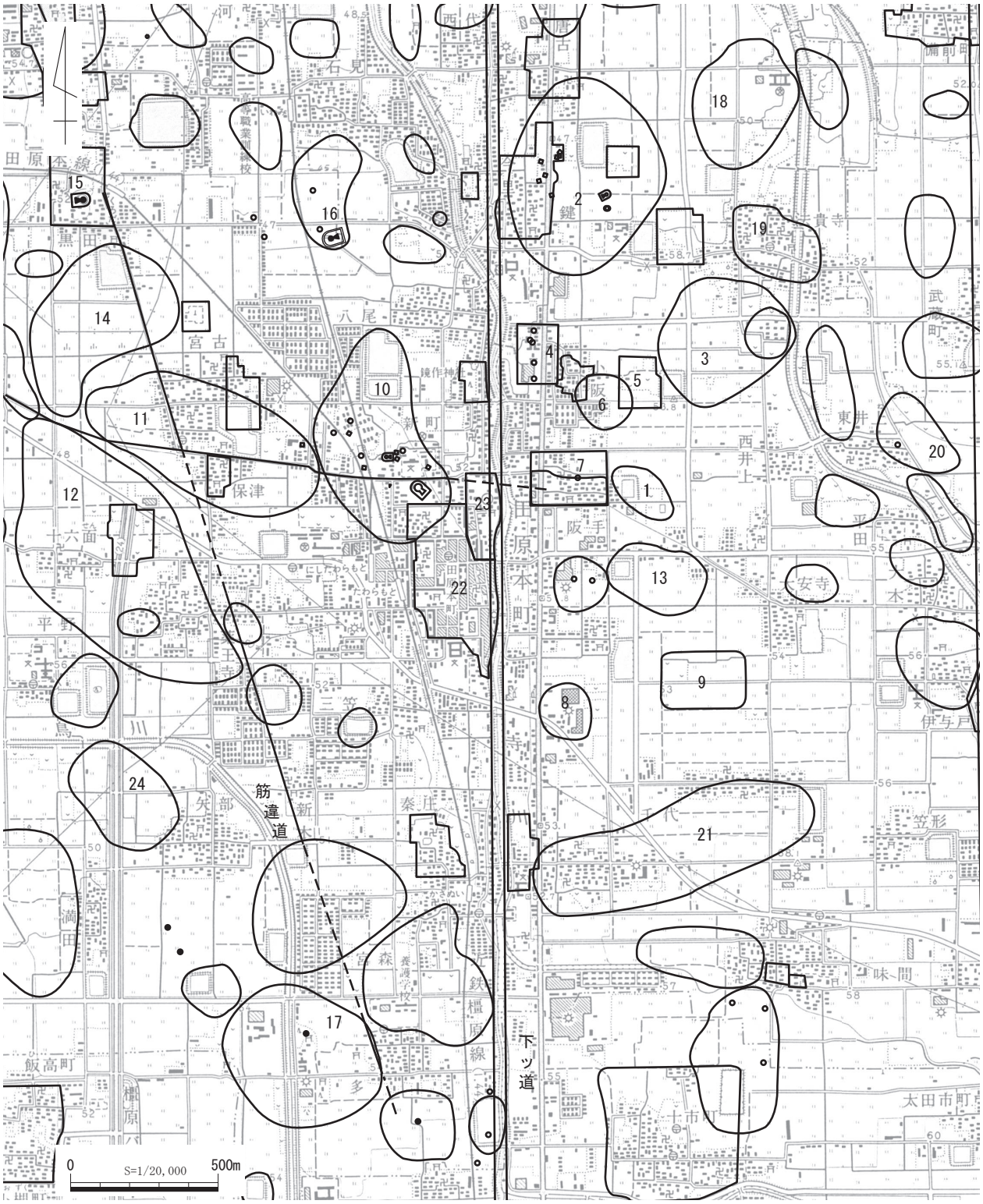


第１図　阪手東遺跡の位置

阪手東遺跡は、東側に初瀬川、西側に寺川がそれぞれ北流する標高 47 ｍ前後の沖積平野に立地する。遺跡の北側 1.2 ｋｍに位置する唐古・鍵遺跡とは同じ水系に属することとなる。本報告の調査原因となった町の文化施設が建設されるまでは遺跡全体に水田が広がっていた。

２．田原本町周辺の遺跡

阪手東遺跡の立地する奈良盆地中央の低地部は、縄文時代後期頃に遺構がみられるようになるが、本格的な定住は弥生時代前期になってからと考えられる。唐古･鍵遺跡、保津･宮古遺跡、多遺跡などで比較的古い弥生土器が出土している。弥生時代中期になると、唐古・鍵遺跡や多遺跡などが地域の中核的な遺跡として発展し、また新たに羽子田遺跡、清水風遺跡などで集落がみられるようになる。これらの唐古・鍵遺跡から１～２ｋｍ程度の距離に新たに出現する小規模な集落は、「衛星集落」という解釈も提示されている。弥生



	遺跡名	時代		遺跡名	時代		遺跡名	時代
1	阪手東遺跡	弥生・古墳	9	柿ノ森遺跡	弥生・中世	17	多遺跡	弥生～中世
2	唐古・鍵遺跡	弥生～中世	10	羽子田遺跡	弥生～近世	18	法貴寺北遺跡	弥生・中世
3	法貴寺斎宮前遺跡	弥生～中世	11	保津・宮古遺跡	弥生・古墳	19	法貴寺遺跡	弥生～近世
4	小阪里中遺跡	弥生～近世	12	十六面・薬王寺遺跡	弥生～中世	20	東井上遺跡	弥生～中世
5	小阪榎木遺跡	古墳～中世	13	阪手ホウズミ遺跡	古墳・中世	21	千代遺跡	古墳～中世
6	小阪細長遺跡	弥生～中世	14	宮古北遺跡	弥生～古代	22	寺内町遺跡	中世・近世
7	阪手北遺跡	古代・中世	15	黒田大塚古墳	古墳	23	平野氏陣屋跡	中世・近世
8	阪手遺跡	弥生	16	笹鉾山１号墳	古墳	24	矢部遺跡	弥生～近世

第２図　周辺の遺跡（S＝1/20,000）

時代後期になると、さらに多くの小規模な集落がみられるようになる。

古墳時代前期になると、それまでの拠点的な大規模集落が規模を縮小し、一方で保津・宮古遺跡や羽子田遺跡、十六面・薬王寺遺跡などで比較的多くの搬入土器を持つ集落がみられるようになる。古墳時代中期～後期には、町北西部から三宅町・川西町にかけて中小の前方後円墳が連なる「三宅古墳群」が形成され、町内の黒田大塚古墳・笹鉾山１号墳などはこの古墳群の南端に位置付けられる。同時期の町南部には蛇行状鉄器等が出土した団栗山古墳があり、付近の在地豪族「多氏」との関連が考えられる。

古代の本町内は平城京と藤原京の中間に立地する関係から目立った遺跡は少ないものの、町内を縦断する中ツ道・下ツ道、斑鳩と飛鳥を直線で結ぶ「筋違道」といった古代交通路が通るほか、近年の調査で西北西－東南東方向の斜行道路跡を確認し、「保津･阪手道」と仮称している。筋違道と保津・阪手道が交差する付近では古代の官衙的な遺跡が拡がっていた可能性があり、また保津・阪手道と下ツ道が交わる地点付近の阪手北遺跡では後述するとおり墨書土器等が出土している。

古代から中世にかけての奈良盆地では、興福寺雑役免荘の耕地が拡がり、一部で在地有力者層が城館を構え始めたとみられる。特に、田原本町周辺は、盆地北部の筒井氏、盆地西部の箸尾氏、盆地南東部の十市氏、盆地南部の越智氏の４氏の勢力が拮抗して抗争を繰り広げた。町内では、法貴寺遺跡で中世城館跡が確認されているほか、唐古南氏居館跡推定地、保津氏居館推定地、「蔵堂城」、「秦楽寺城」、「金剛寺城」などが町内在地有力者層の城館として争乱を繰り広げた。

江戸時代の田原本は、大半が賤ケ岳で戦功のあった平野権平長泰が知行することとなった。平野氏は当初浄土真宗教行寺を誘致して寺内町をつくらせて町場の振興を図ったが、２代長勝の代になって直接領地運営を図り陣屋を造営し、その結果支配権をめぐって教行寺と平野氏の間に争論が生じ、最終的に教行寺は箸尾に退去、寺内町は平野氏の陣屋町として引き継がれた。

３．阪手東遺跡周辺の遺跡

阪手東遺跡の調査は、遺跡西端での道路拡幅工事に伴う第１次調査で弥生時代後期頃に埋没したとみられる河跡を確認しているのみで、本報告の第２次調査により弥生時代中期の方形周溝墓群を確認するまで特筆される成果は挙がっていない。

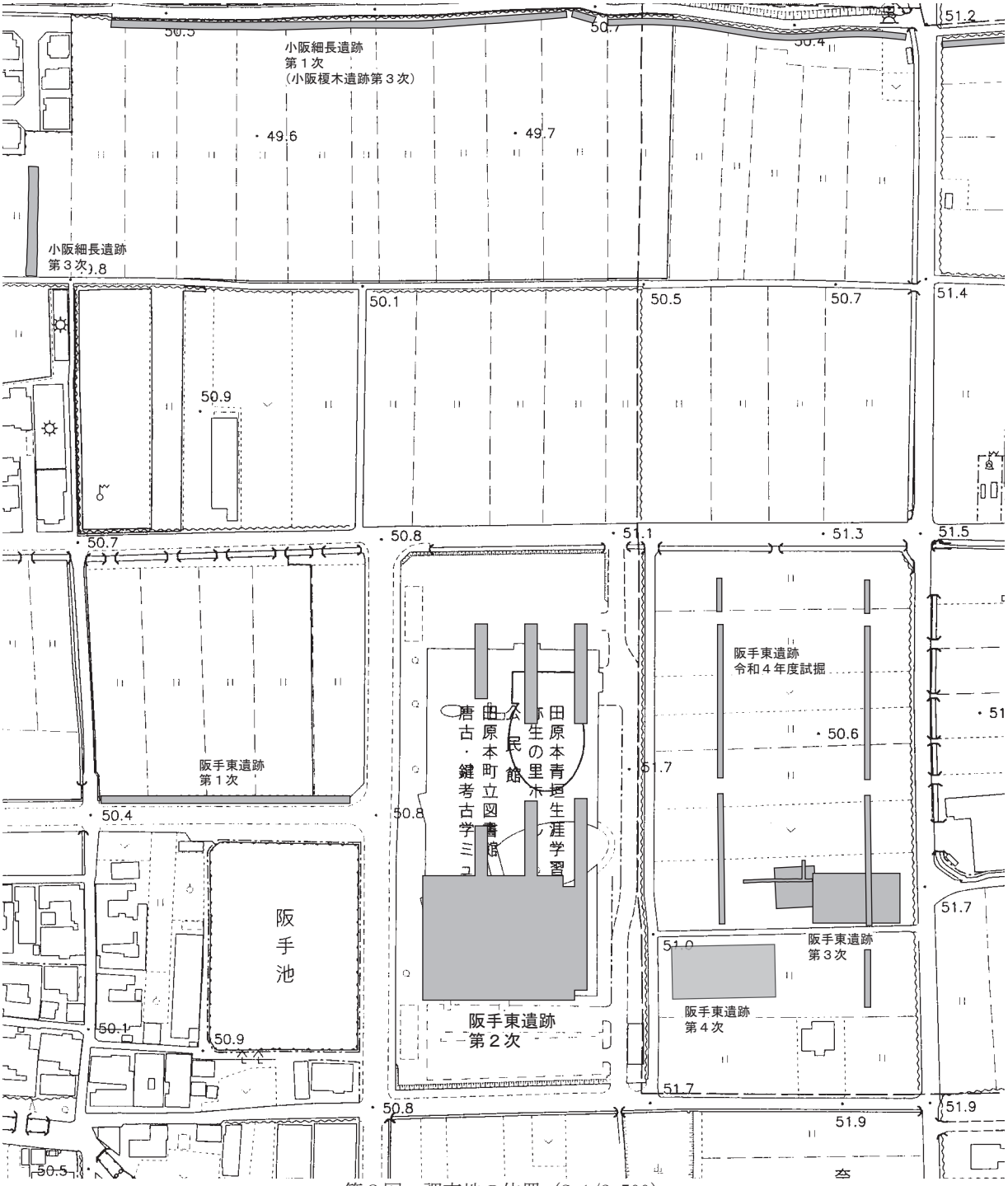
阪手東遺跡の北側には、小阪里中遺跡、小阪安田前遺跡、小阪榎木遺跡、法貴寺斎宮前遺跡がある。これらの遺跡では、弥生時代中期頃の遺構が散在するが、法貴寺斎宮前遺跡では比較的まとまった集落遺構と絵画土器を含む多数の遺物が出土しており、唐古・鍵遺跡の衛星集落の一つと考えることができる。

阪手東遺跡の南側に位置する柿ノ森遺跡と阪手遺跡では、弥生時代後期頃と古墳時代前期末の灌漑用とみられる堰を伴う水路を確認している。遺物量は僅少であるため、集落から離れた平野部に耕地が拡がっていた可能性が考えられる。

阪手東遺跡の東側に隣接する阪手北遺跡では、古代の遺構･遺物を確認している。特に、墨書土器や巡方といった官衙的な遺物が出土しており、下ツ道と保津・阪手道の交差点に

近接する交通の要衝に設けられた公的な施設である可能性も考えられる。特に、隋の使節が滞在したという阿斗河辺館がこの阪手付近にあったという伝承もあり、古代の遺跡が僅少な本町域にあって極めて重要な地区となっている。

中世になると、阪手周辺は興福寺雑役免庄が拡がる地域として耕地開発が進んだとみられる。また、先述の阪手北遺跡では、中世集落が現北阪手集落に重複する形で拡がるとみられる。なお、中世の史料「大乗院寺社雑事記」によると、阪手には檜物を販売する「サカテ座」があり（箸尾氏に属す）、檜物を生産する田原本座（十市氏に属す）と争論となったという。北阪手集落は、近世以降も周囲に濠を巡らせた集落として現在まで続く。



第３図　調査地の位置（S=1/2,500）

Ⅱ．調査の成果

１．調査に至る経緯

平成 16 年の開館を目指して、田原本町大字阪手地内にホール・図書館・公民館から成る社会教育複合施設の建築が計画された。この施設内には平成 11 年に史跡指定を受けた唐古・鍵遺跡出土品を展示するための博物館機能も設けられる予定となっていた。

開発計画地である田原本町大字阪手東部には、弥生時代頃の遺物散布地である阪手東遺跡が遺跡地図上記載されていたが、平成 10 年に道路拡幅工事に伴って実施した第１次調査では弥生時代後期の河跡を確認した程度で遺跡としては比較的希薄であることが想定されていた。

工事に先立ち、南北 200 m、東西 100 mの敷地内に７箇所の試掘トレンチを設け、遺構の有無を確認して必要に応じ面的に拡張するという形で平成 13 年 10 月から発掘調査に着手することとなった。試掘調査の結果、敷地南半で弥生時代中期の遺構が複数確認されたことから、面的な調査に切り替えて遺構検出をおこなうこととなった。その結果、弥生時代中期の方形周溝墓群が拡がることが明らかとなった。

調査日誌抄録

2001 年

10 月 15 日　プレハブ・トイレ設置

10 月 16 日　調査員：清水・藤田慎
トランシットによる調査区設定作業、バックホー搬入

10 月 17 日　調査開始予定日であったが、雨天中止

10 月 18 日　調査員：清水・藤田慎　作業員 7、重機 2
草刈り作業、調査区設定作業、第 1・3 トレンチ表土掘削開始

10 月 19 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 9、重機 2
第 1・3 トレンチ表土掘削完了、第 2・5 トレンチの表土掘削開始、第 5 トレンチ表土掘削完了

10 月 22 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 12 × 0.5 日
重機は中止、掘削済み分のシートかけ、土のうづくり、排水溝掘削、昼までで中止。

10 月 23 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 9.5、重機 1
第 2 トレンチ表土掘削（続き）、第３・５トレンチの遺構面清掃

10 月 24 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 12、重機 1
第 2 トレンチ表土掘削完了、第 4 トレンチ表土掘削開始、第１・3 トレンチ遺構面清掃

10 月 25 日　調査員：清水・藤田慎、補助員 0.5、作業員 12、重機 2
第 4 トレンチ表土掘削完了、第 6 トレンチ表土掘削開始、第 7 トレンチ設定、第 5 トレンチ遺構検出･写真。

10 月 26 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 8、重機 1
第 6 トレンチ表土掘削完了、第 7 トレンチ表土掘削

10 月 29 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 10.5、重機 1
第 7 トレンチ表土掘削完了、第 3 トレンチ遺構検出、第 1 トレンチの清掃開始

10 月 30 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、作業員 15
第 3 トレンチ遺構検出･写真、第 1 トレンチ遺構検出･写真、2 トレ遺構検出

10 月 31 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、作業員 15
第 2 トレンチ遺構検出･写真。第 4 トレンチ遺構検出。

11 月 2 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、作業員 16
第 4 トレンチ近世遺構掘削開始、第６・７トレンチの肩清掃

11 月 5 日　調査員:豆谷･清水･藤田慎、作業員 19 × 0.5
第 6 トレンチ遺構検出・写真、シートかけ、昼過ぎ中止決定

11 月 6 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、作業員 19
第 4 トレンチ近世遺構掘り下げ、第 7 トレンチ周辺清掃・遺構検出

11 月 7 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、作業員 16.5
第 7 トレンチ遺構検出全景写真、第 4 トレンチ中世～近世遺構掘り下げ、第 1 トレンチ再消掃

11 月 8 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 0.5、作業員 14
第 1・第４トレンチ近世遺構等掘り下げ

11 月 9 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、作業員 19
第 4 トレンチ中・近世遺構完掘、全景写真、第 1 トレンチ掘り下げ（続き）､業務委託による杭打ち開始（第１・２トレンチから）

11 月 10 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 6.5
第 1 トレンチ中・近世遺構掘り下げ。　杭打ちの続き→終了

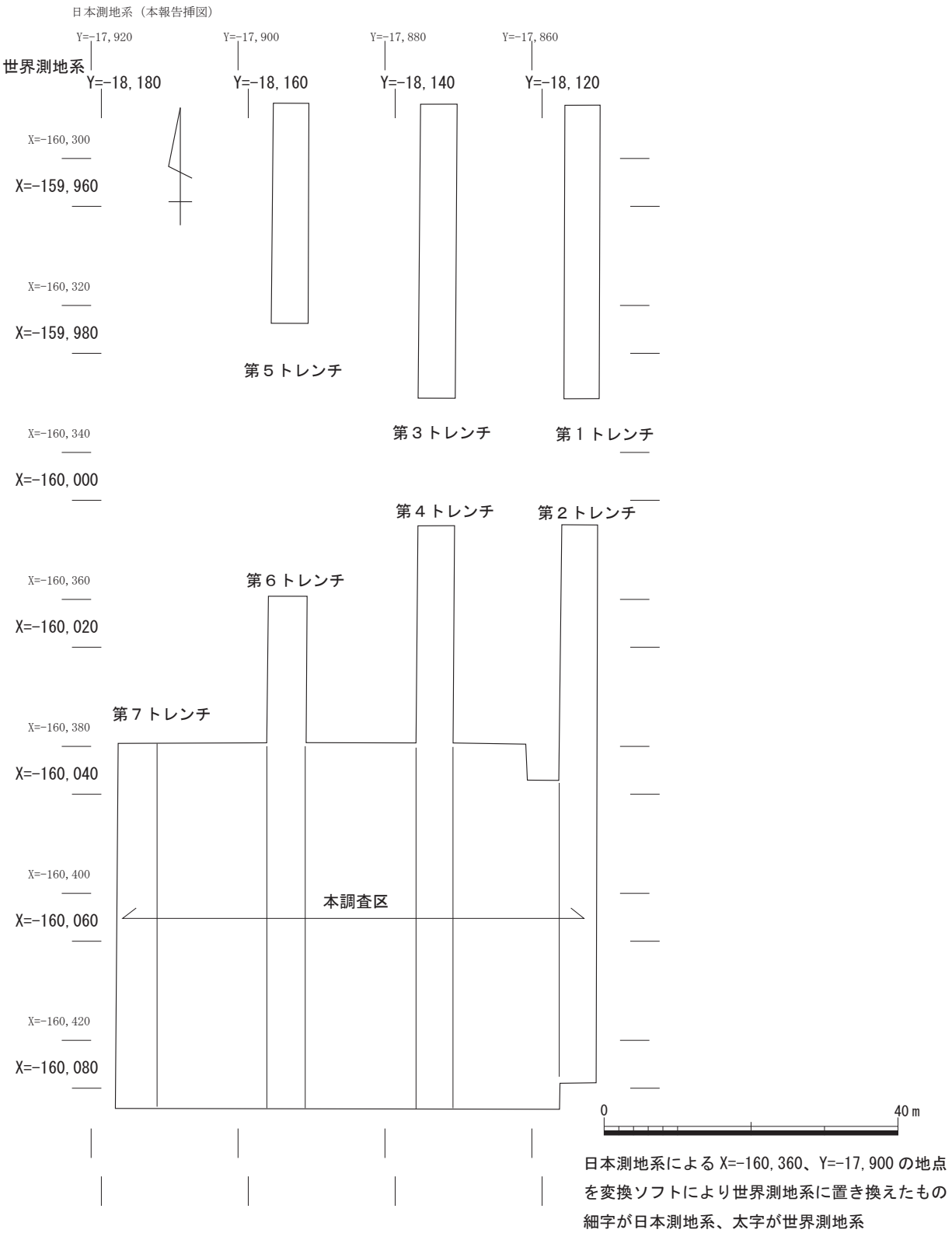
11 月 12 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 0.5、作業員 16.5
第 1 トレンチ完掘・全景写真、第 2 トレンチ中・近世遺構掘り下げ

11 月 13 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 0.5
図化作業
11 月 14 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1
図化作業
11 月 15 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 2、作業員 18
第 2 トレンチ中・近世遺構掘り下げ、第 1 トレンチ東壁清掃、図化作業
11 月 16 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1 、作業員 18
第 2 トレンチ中・近世遺構掘り下げ、ほぼ完掘、第 1 トレンチ東壁写真、図化作業、第 4 トレンチ南端の弥生時代後期包含層掘り下げ、畦畔の可能性あり
11 月 17 日　調査員：豆谷・清水、補助員 1.5
図化作業
11 月 19 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1.5、作業員 16.5
第 2 トレンチ中・近世完掘の全景写真。 第３・５トレンチ中・近世遺構一部掘り下げ
11 月 20 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1、作業員 16.5
第 2 トレンチ東壁沿いに深掘り、清掃。第 2 トレンチ弥生時代遺構掘り下げ、第３・５トレンチ中・近世遺構完掘と弥生時代遺構検出の全景写真
11 月 21 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1、作業員 15
第 2 トレンチ東壁沿いの深掘り（続き）と Sec. 写真、第３・5 トレンチ弥生時代遺構掘り下げ、第 7 トレンチ中・近世遺構掘り下げ。
11 月 22 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 2.5、作業員 19
第 7 トレンチ中・近世遺構掘り下げ、第 2 トレンチ東壁沿いの深掘り（続き）、第３・５トレンチの弥生時代遺構完掘・全景写真。
11 月 26 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1.5、作業員 13
第 7 トレンチ完掘・全景写真。第 5 トレンチ西壁沿いの深掘り。
11 月 27 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 2、作業員 16
第 5 トレンチ西壁 Sec. 写真、第 7 トレンチ西壁沿いの深掘り。
11 月 28 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1、作業員 18
第 7 トレンチ西墜 Sec. 写真、図化。 第 7 トレンチ中央の弥生時代遺物包含層掘り下げ、周溝墓か？ 1・3・5 トレンチを埋め戻すための重機搬入
11 月 29 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 2.5、作業員 17、重機 1
第 7 トレンチの溝状遺構の出土状況の写真・図面、第 7 トレンチ南端で重機を用いて下層遺構検出。第 5 トレンチ・第 3 トレンチ埋戻し。15 時過ぎに降雨中止
11 月 30 日　調査員：豆谷・清水・藤田慎、補助員 1、作業員 17、重機 1
第 1 トレンチで重機による深掘り、河川跡の層序確認。第 1 トレンチ埋め戻し。第 6 トレンチ西壁の精査、第 4 トレンチの弥生時代とみられる溝一部掘り下げ、拡張について課内で打ち合わせ
12 月 1 日　調査員：清水、重機 1
第 1 トレンチ埋め戻しの続き、第 7 トレンチ排土の移動。 拡張作業に備え、重機の入れ替え (0. 45 ㎥ → 0.7 ㎥)。夕方、重機 2 台目搬入。
12 月 3 日　調査員：清水・藤田慎、補助員 0.5、作業員 6.5、重機 2
別現場開始により、調査員と作業員減員。 第６・第７トレンチ間の表土掘削（北より）、遺構面清掃。中・近世素堀溝が多く遺構不明瞭。
12 月 4 日　調査員：清水・藤田慎、補助員 1、作業員 7、重機 2
第６・第７トレンチ間の表土掘削（続き）、遺構面清掃。
12 月 5 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 7.5、重機 2
第 10 トレンチ表土掘削完了、南半に方形周溝墓が重複して存在する模様。第 6 トレンチ北側の中・近世素掘小溝掘り下げ
12 月 7 日 調査員：清水・藤田慎、作業員 7.5、重機 2
第 6 トレンチ北側の素掘小溝完掘写真、SK-6051 掘り下げ。第４・６トレンチ南半の遺構面を重機により 1 段下げる。第４・６トレンチ間の表土掘削開始。
12 月 10 日 調査員：消水・藤田慎、作業員 5.5、重機 2
第４・６トレンチ間の掘削（続き）。 中央付近で方形周溝墓のコ ーナーとみられる部分検出。SK-6051 完掘、SK-6101 掘り下げ。
12 月 11 日　調査員：清水、作業員 6、島田組 6、重機 2
本日より外注作業員参加。第４・６トレンチ重機掘削、遺構精査、白線引き。
12 月 12 日　調査員：清水、作業員 4、島田組 6、重機 2
本調査区の精査、白線引き、第４・６トレンチ間の表土掘削完了、第２・4 トレンチ間の表土掘削開始。
12 月 14 日　調査員：清水、作業員 4、島田組 6、重機 2
第２・４トレンチ間の表土掘削（続き）、前日の雨の水抜き作業、15 日に重機撤収
12 月 17 日　調査員：清水、作業員 11、島田組 6
本調査区東半の遺構精査、白線引き
12 月 18 日　調査員：清水、作業員 9、島田組 6
本調査区西半の遺構面精査、白線引き。第 7 トレンチ遺構面一段下げ、遺構検出
12 月 19 日　調査員：清水、作業員９、島田組 6
本調査区西端の遺構面精査・白線引き。朝の霜により清掃やり直し。
12 月 20 日　調査員　藤田三・清水、作業員 9、島田組 6
遺構検出の全景写真、午後より土のうづくり、壁面シート掛け、一部弥生時代後期包含層掘り下げ開始、略図作成・方形周溝墓群として 1 号～ 15 号墓の仮称設定
12 月 21 日　調査員：清水、作業員９× 0.5、島田組６× 0.5
シートかけ、土のうづくり、ロ ー プ張り、降雨の中の作業で 、午前中に終了

2002 年

１月７日　調査員：清水・藤田慎、補助員 0.5 人、作業 16 人、島田組 6 人
8 号墓、11 号墓を覆う明褐色土（弥生時代後期頃の包含層）を除去する作業。８号墓南半の検出。
１月８日　調査員：清水・藤田慎、補助員 0.5 人、作業員 7 人、島田組 6 人

11 号墓の西溝掘り下げ、SD-153・ SD-151 掘り下げ、3 号墓・8 号墓の再検出、写真
1 月 9 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 7.5 人、島田組 6 人
S D-154 完掘の清掃･写真、ペルトコンベアー搬人･設置。11 号墓の西溝、北溝掘り下げ、2 号墓に重複する中世小溝掘り下げ。SK-151 掘り下げ。8 号墓北溝から掘り下げ開始
1 月 10 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 7 人、島田組 6 人
3 号墓掘り下げ、11 号墓掘り下げ、6 号墓に重複する中世小溝掘り下げ。
1 月 11 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 7.5 人、島田組 6 人
11 号墓掘り下げ、SD-111 E 遺物出土状況写真、7 号墓掘削開始。
1 月 12 日　調査員：清水・藤田慎
図化作業
1 月 15 日　調査員：清水・藤田慎、作業員 4 人× 0.5、島田組 6 人× 0.5 日
7 号墓掘り下げ、土器検出作業、昼前に降雨中止
1 月 16 日　調査員：清水・藤田慎
早刺の降雨で中止としたが、図化作業のみ行う。
1 月 17 日　調査員：清水、作業員 5 人、島田組 6 人
11 号墓の南で 16 号墓検出、ほぼ完掘、7 号墓の掘り下げと土器群検出、SD -151 下の 8 号墓西溝掘り下げ。
1 月 18 日　調査員：清水、作業員 5 人、島田組 6 人
7 号墓完掘、出土状況写真撮影、14 号墓掘削開始
1 月 19 日　調査員：清水、藤田慎
図化作業
1 月 22 日　調査員：清水、作業員：3.5 人、島田組 6 人
14 号墓北溝、東溝掘削、ほぼ完掘
1 月 23 日　調査員：清水、作業員 5 人、島田組 6 人
14 号墓西溝掘り下げ、南溝掘り下げ
1 月 24 日　調査員：清水、作業員 5 人、島田組 6 人
14 号墓完掘､13 号墓掘り下げ､完掘｡6 号墓掘り下げ開始。
1 月 24 日　調査員：清水、補助員 1 人、作業員 5. 5 人、島田組 6 人
6 号墓完掘、10 号墓完掘。
1 月 28 日　調査員：清水、補助員 1 人、作業員 8 人、島田組 6 人
1 号墓掘り下げ開始､ほぼ終了。SD-151 掘り下げ（北半)、9 号墓・SD -152 再検出（中世小溝掘り下げ）、10 号墓の出土状況写真・図面
1 月 29 日　調査員：清水、補助員 1 人、作業員 7.5 人、島田組 6 人
S D-152 掘り下げ、4 号墓・9 号墓・12 号墓掘り下げ。
1 月 30 日　調査員：清水、補助員 2 人、作業員 9 人、島田組 6 人
シート片づけ、土のう運び、遺構面清掃
1 月 31 日　調査員：清水、補助員 3 人、作業員 8 人、島田組 6 人
全景空撮用の清掃
２月１日　調査員：清水、補助員 0.5 人、作業員 8 人、島田組 6 人
全景と空撮（午後 1 時)、部分写真
2 月 2 日　調査員：藤田三・清水、作業員 4 人、島田組 6 人
完掘の全景写真、写真終了後、アゼなどにシートをかける作業、土のう解体
島田組は本日で終了
2 月 4 日　調査員：清水・藤田慎、補助員 2 人、作業員 4.5 人
SD-118 掘り下げ、出土状況作成、各墓の土器取り上げ、７号墓土器出土状況・断ち割り図作製
2 月 5 日　調査員：清水・藤田慎、補助員 2 人、作業員 5 人
11 号墓、7 号墓の土器取り上げ、未完掘の SD-152 一部掘り下げ、柱穴検出、S K-151 アゼ外し、底面で杭 5 本検出
2 月 6 日　調査員：清水・藤田慎、補助員３人、作業員 4 人
土のう解体､シート等の資材搬出、撤収作業。南壁清掃、Sec. 作図
2 月 7 日　調査員：清水・藤田慎、補助員：３人、作業員 5 人
撤収作業、図化作業
2 月 8 日　調査員：清水・藤田慎、補助員 I. 5 人
S K-151 の杭掘り出し、断ち割り図等作成、7 号墓東アゼ掘り下げ、土器出
土状況写真の撮影、図化作業
２月 12 日　調査員：清水・藤田慎
7 号墓東アゼの土器取り上げ、第 2 トレンチ北側の遺構の有無確認。重機 2 台搬入
2 月 13 日　調査員：清水・藤田慎・重機 2 台
埋め戻し開始、14 号墓南アゼ掘り下げ、土器出土状況写真の撮影、図化作業、プレハブ撤去
２月 14 日　調査員：清水・藤田慎、重機 2 台
埋め戻し作業、道具洗浄等の片づけ作業、トイレ撤去
2 月 15 日　調査員：清水 重機 2 台
埋め戻し作業
2 月 18 日　調査員：清水、重機 2 台
埋め戻し作業。
2 月 19 日 調査員：清水、重機 2 台
埋め戻し作業一完了
2 月 20 日
重機撤収

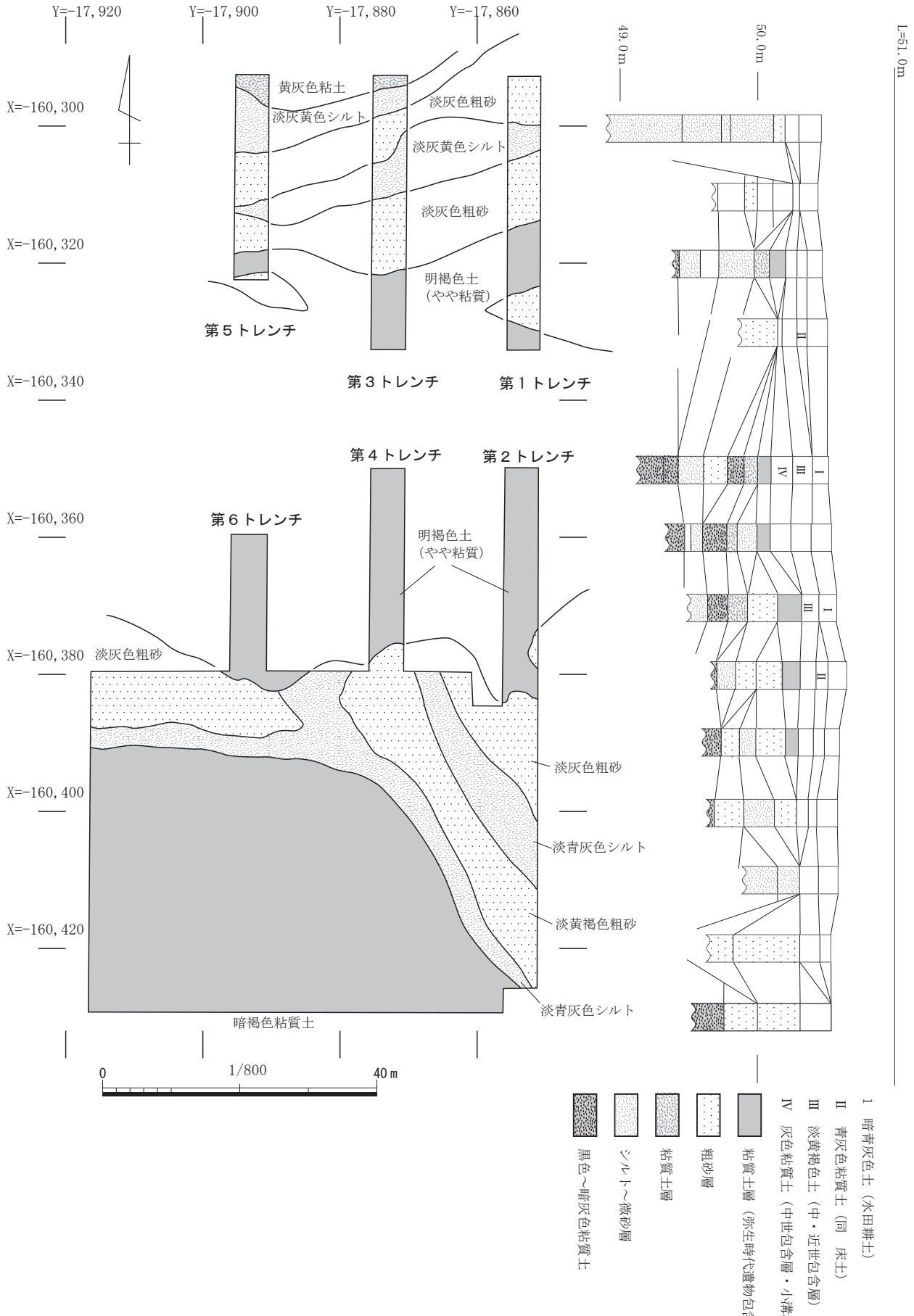


第４図　調査区の設定と新旧座標系の対応（S=1/800）

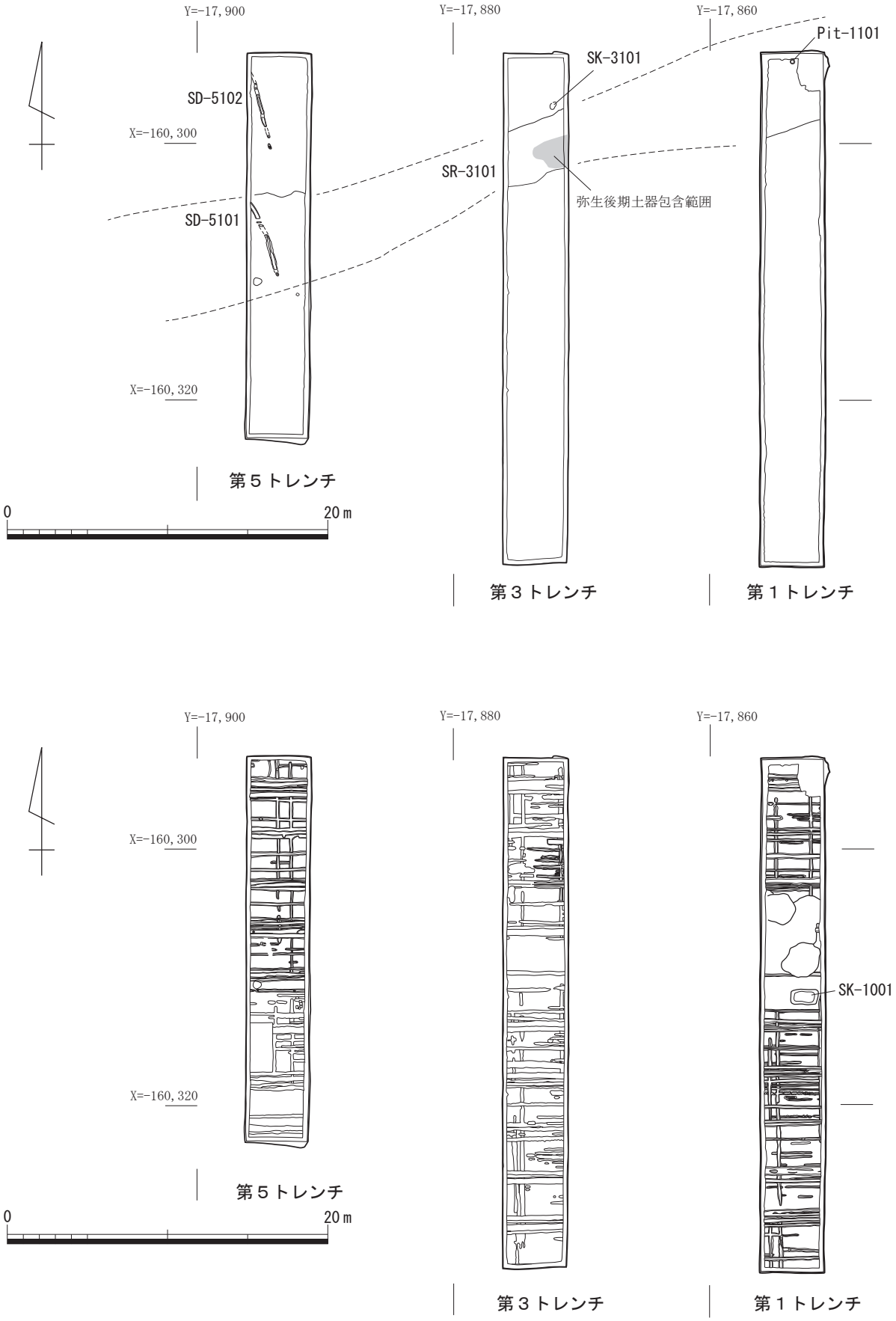
２．基本層序

調査地の現状は水田である。現状の地表面は標高 50.5 ｍ前後で、およそ 0.2 ～ 0.3 ｍの現水田耕土・床土層（Ⅰ～Ⅲ層）を除去すると中・近世の遺構検出面となる。

第５図は中・近世遺構検出面の土層を模式的に表したものである。基本的には弥生時代



第５図　基本層序（S=1/800）



第６図　北半調査区の遺構（S=1/500）

以前からの河川による砂層堆積が全体に拡がるが、本調査区南西部ではその上に暗褐色粘質土層が厚さ0.1ｍ～0.2ｍ堆積する。弥生時代中期後半～後期の範囲で形成された堆積層と考えることができる。

また、北側試掘調査区の南側から本調査区北端にかけて、明褐色土層が厚さ0.1～0.2ｍ堆積する。弥生時代頃の堆積となる可能性が考えられる。

第１トレンチ北端から第５トレンチ中央にのびる淡灰色粗砂層は、弥生時代以前とみられる河川堆積を切り込む形で形成されている。この層の上面に堆積する黒褐色砂質土には弥生時代後期の遺物が含まれることが第３トレンチで確認されており（ＳＲ－3101)、弥生時代後期に埋没する河川跡と考えることができる。

３．検出した遺構

（１）北側調査区（第１・３・５トレンチ）の遺構

弥生時代～古代の遺構

ＳＫ-3101　第３トレンチ北側で検出した小土坑である。長軸0.6ｍ、短軸0.4ｍの平面楕円形で、深さ0.1ｍを測る。大和第Ⅵ-3様式頃の高坏等が出土している。遺構の性格は明らかでない。

ＳＲ-3101　第３トレンチ北側で弥生時代後期の遺物を包蔵する砂層堆積を検出した。厚さ0.1ｍの黒褐色砂質土で、第１トレンチ北端から第５トレンチ中央に流れる河跡の最終堆積層とみられる。出土した土器から、大和第Ⅵ-3～庄内式併行期の堆積とみられる。

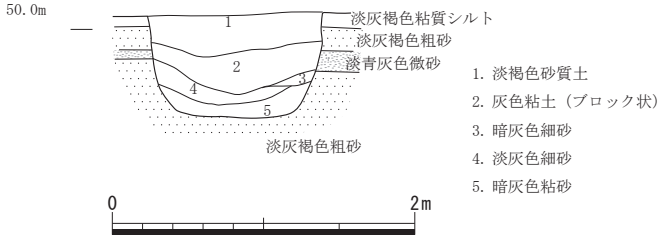
なお、河跡本体の規模と時期を把握するために第１トレンチで重機を用いて深掘りを行った。しかし、遺物の出土はみられず、時期を明らかにすることはできなかった。また、規模についても深さ２ｍ以上となり湧水と壁面の崩落が激しくなったため確認することが出来なかった。

ＳＤ-5101・5102　第５トレンチ北半で検出した、幅0.3ｍ、深さ0.05ｍの小溝である。いずれも北北西－南南東方向であるが、若干湾曲する。遺物が出土していないため時期は明らかでない。古代頃の遺構とみられるが、埋土が黒褐色土であることから弥生時代に遡る可能性もある。

中世の遺構

小溝群　灰色粘質土を埋土とする小溝である。幅0.2～0.3ｍ、深さ0.1～0.3ｍを測る。南北方向のものが数条みられるが、東西方向の溝が主体となっている。遺物には、瓦器・土師器がある。鎌倉時代の遺構であろう。

ＳＫ-1001　第１トレンチ中央で検出した、長軸2.1ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.6ｍの長方形の土坑である。遺物が出土していないため時期は明らかでない。

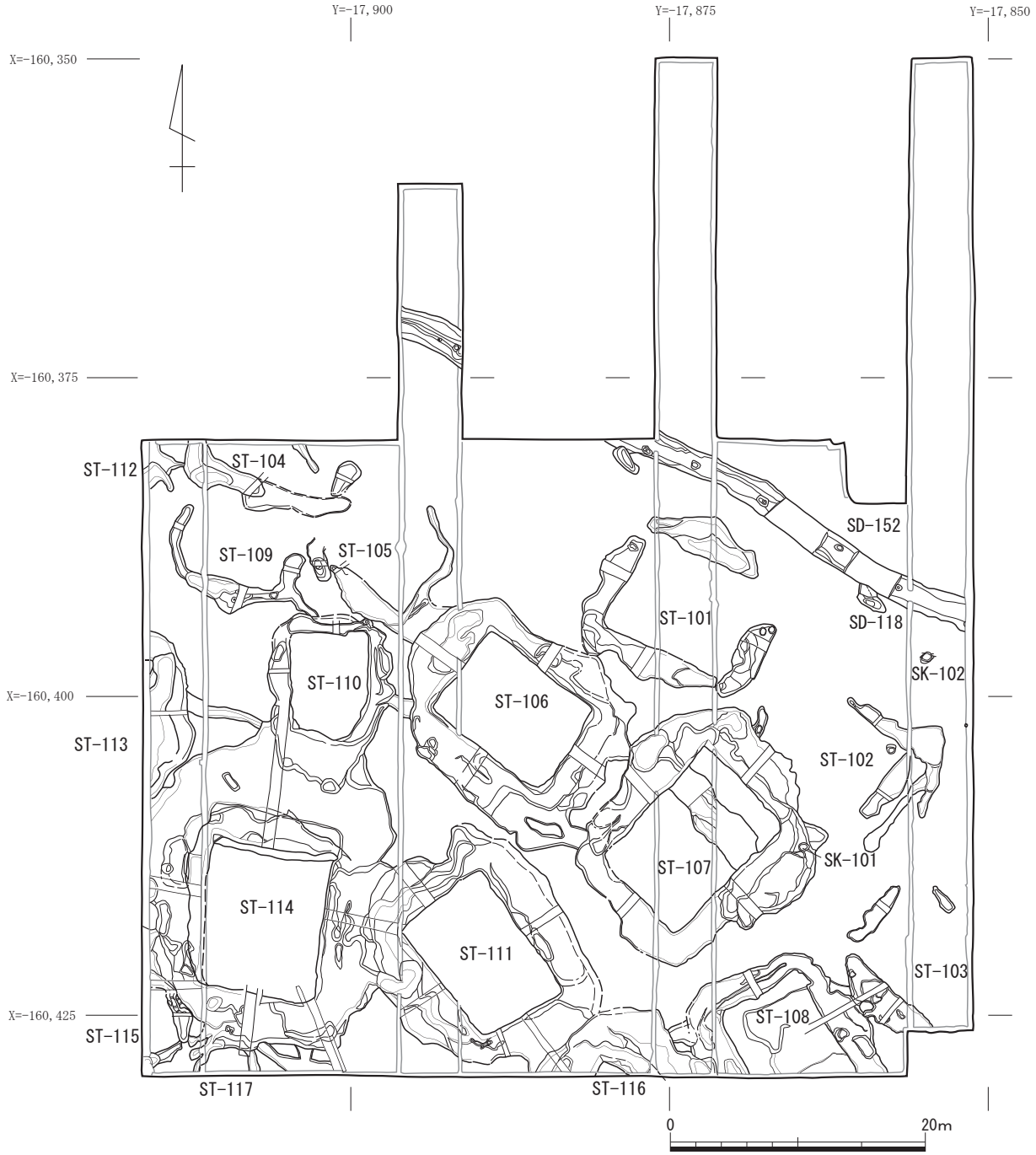


第７図　ＳＫ-1001 東壁層序 (S=1/50)

（２）南側調査区（本調査区、第２・４・６トレンチ）の遺構

弥生時代中期の遺構

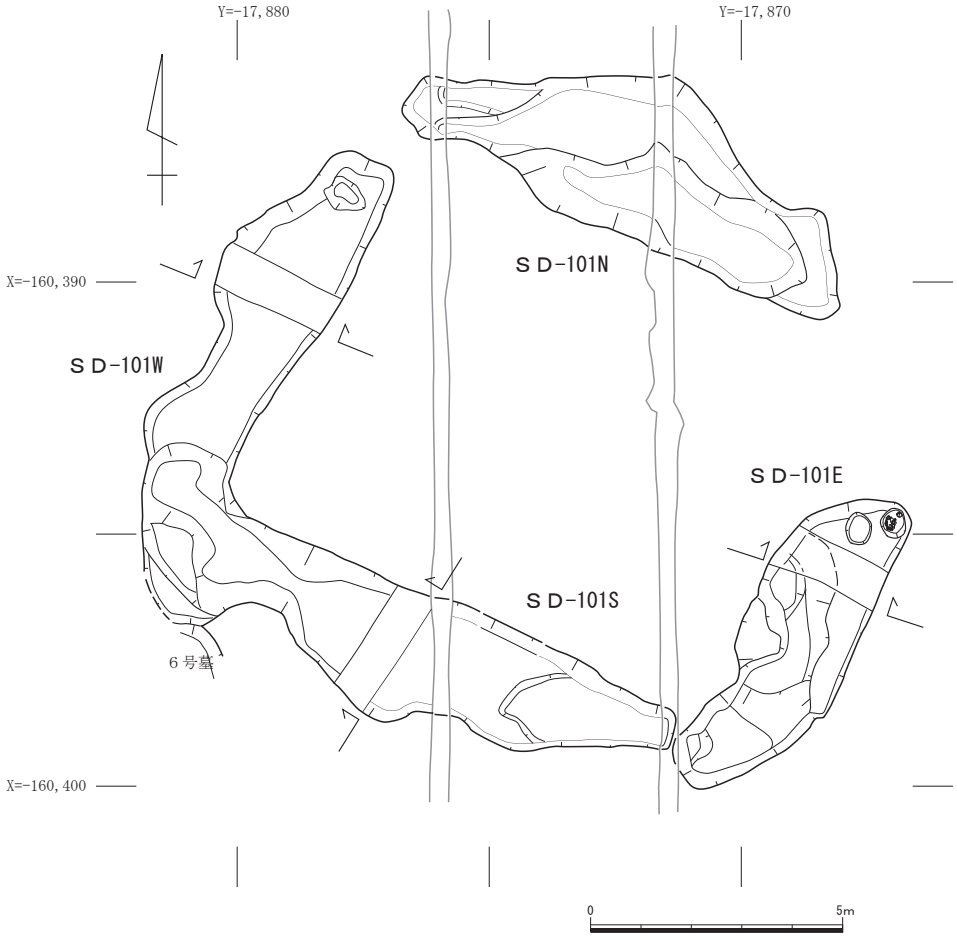
試掘調査により敷地南半に方形周溝墓群が拡がることを確認したことから、面的な拡張をおこない、合計 16 基の方形周溝墓を確認した。また、墓域の北限を示すとみられる溝１条を確認した。以下にその概要を報告する。

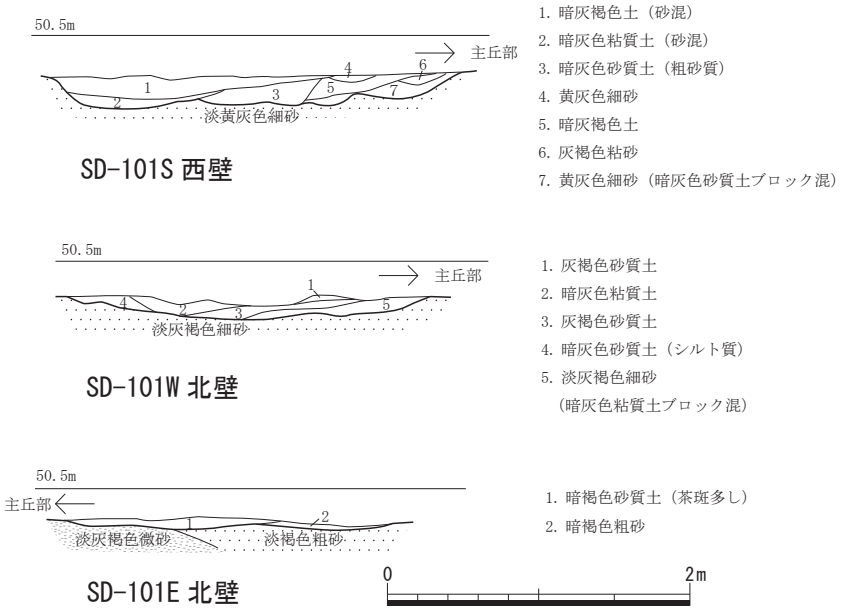


第８図　南半調査区（本調査区）の遺構（弥生時代中期）(S=1/500)

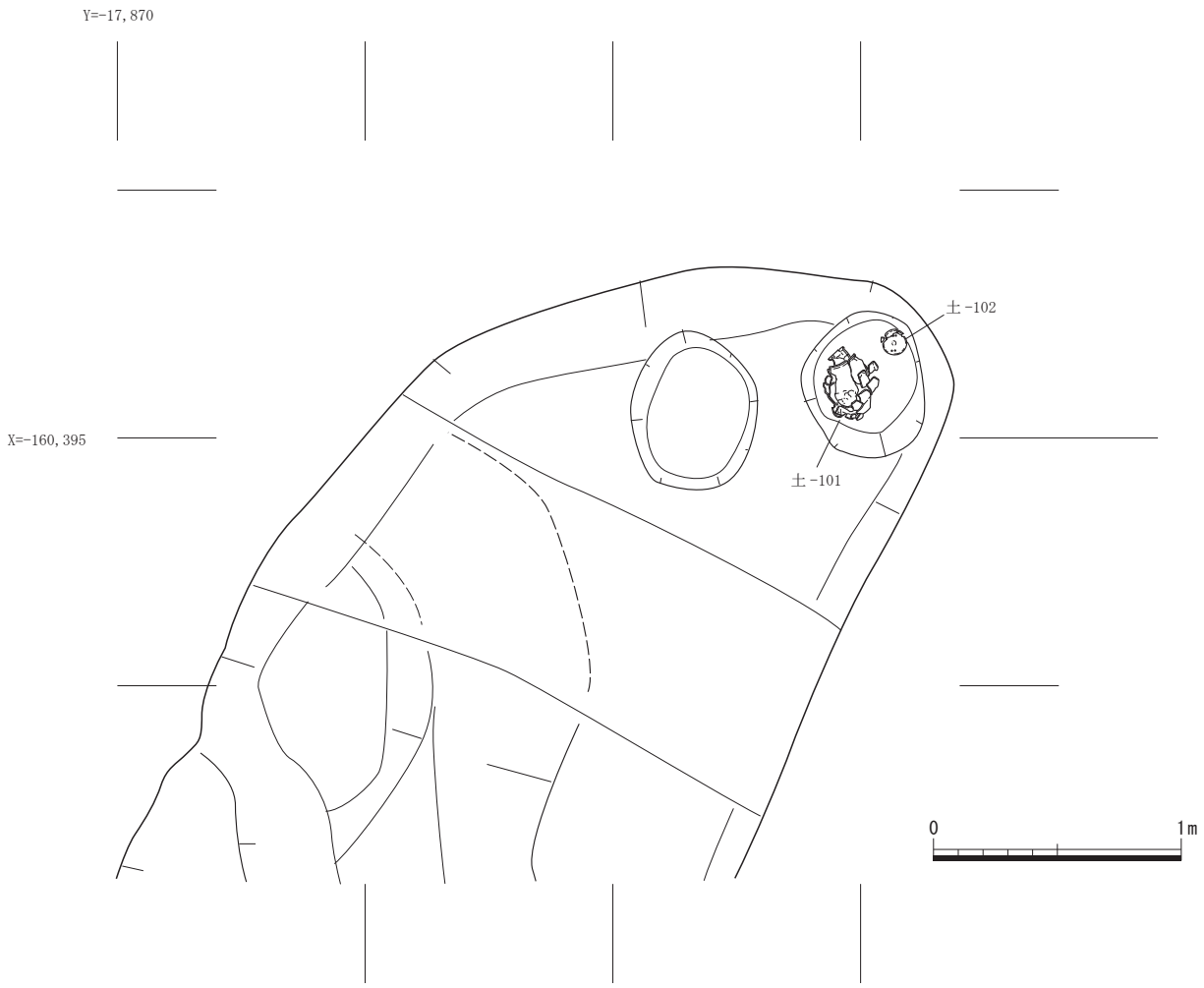
遺構名	主軸	平面規模(m) 長軸 × 短軸	周溝規模(m) 幅 ・ 深さ	供献土器	時期	備　　考
ST-101	北北東	10.5 × 8.7	3.2 ・ 0.2	甕１・甕蓋１	Ⅲ-1	北東と北西のコーナーが切れるが、削平によるものか。土器は東溝北端の小土坑より出土
ST-102	北東	10.1 × 9.4	2.8 ・ 0.1	甕１	Ⅲ-1	削平著しく、西溝と南溝は一部が残存するのみ。墳丘北東隅付近に小土坑。
ST-103	北東	10+ × 7.6	2.5 ・ 0.2		不明	顕著な遺物なく時期不明。南溝は調査区外で全長不明。
ST-104	北北東	10.7 × ***	2.5 ・ 0.3	広口長頸壺１、台付鉢１	Ⅲ-1	南溝は中世小溝群による削平著しい。北半は調査区外で全長不明。
ST-105	北東	約8 × 6.7	2 ・ 0.2		Ⅲ？	削平により遺存状態悪い。北溝不明。
ST-106	北北東	11.1 × 8.2	4.3 ・ 0.4		Ⅲ？	溝の再掘削により若干プラン大きくなる。
ST-107	北東	12.3 × 9.1	5 ・ 0.6	鉢・甕・広口長頸壺・細頸壺・器種不明	Ⅲ-2	東溝中央主丘部肩に鉢・甕を正置。広口長頸壺は倒立。細頸壺は底部を上にして潰れた状態で出土。溝内に小土坑あり、紀伊の土器・甕・台付鉢出土。
ST-107B	北東	9.1 × 7.2	3.2 ・ 0.2			北溝
ST-108	北北西	約10 × 7.5	3.2 ・ 0.5		不明	南溝は調査区外で全長不明。
ST-109	北北東	8.5 × 6.5	2.5 ・ 0.3	壺？	Ⅲ	４号墓南溝を北側の区画として利用か。
ST-110	北	8.6 × 6.4	3.5 ・ 0.3	北溝：壺・甕、 南溝：壺・広口長頸壺・甕	Ⅲ-1	南溝は14号墓（再掘削）に切られる。遺物は壺が北西コーナー付近より、甕破片が集積された状態で北東コーナー付近より出土。南溝中央墳丘側では広口長頸壺等が出土。墳丘からの転落か。
ST-111	北北西	11.8 × 7.8	4.2 ・ 0.5	鉢・壺？	Ⅲ-1	東溝中央墳丘部肩に鉢・壺？各１を正置。壺上半の破片は庄内頃の溝SD-153内に散乱。
ST-112	****	*** × ***	・		Ⅲ？	溝の南東コーナーのみ検出。
ST-113	北	*** × ***	3.4 ・ 0.4	甕３	Ⅲ-2	東溝のみの検出。周溝墓本体は調査区外。周溝墓の外側寄りの溝中層で甕３個体の破片が出土。２点は破片を集積したような状況か。
ST-114	北	14.7 × 11.8	6.9 ・ 0.3	西溝：直口壺・甕 東溝：甕 南溝：広口長頸壺・台付鉢	Ⅲ-2	北溝と東溝は再掘削で当初溝より若干外側に移動。遺物は、南東コーナー付近と西溝中央付近の溝底でそれぞれ甕の破片が集積された状態で出土。台付鉢と広口長頸壺は破片状態で南溝墳丘側で出土。直口壺は破片がST-113にまたがって北西隅周辺に散在。
ST-114B	北	11.4 × 10	3.6 ・ 0.3			南溝の墳丘側肩で方向の異なる溝あり。
ST-115	北北西	5.4 × ***	1.5 ・ 0.2		Ⅲ？	ST-114の南西で検出。ST-114西溝に切られる。
ST-116	北北東	*** × ***	5.4 ・ 0.3		Ⅲ-1	北東コーナーのみ検出。大半は調査区外。ST-111南溝と接するが溝の切り合いは不明瞭。
ST-117	北	3.6 × ***	0.9 ・ 0.2		Ⅲ？	北東コーナーのみ検出。大半は調査区外。ST-111南溝と接するが溝の切り合いは不明瞭。
(SD-118)	北東？	*** × ***	1 ・ 0.1	甕	Ⅲ-1	SD-152の南に接する浅い溝。削平された周溝墓の一部である可能性あり。２号墓の北溝を共有する可能性？SK-102を伴うか？

表１　方形周溝墓一覧

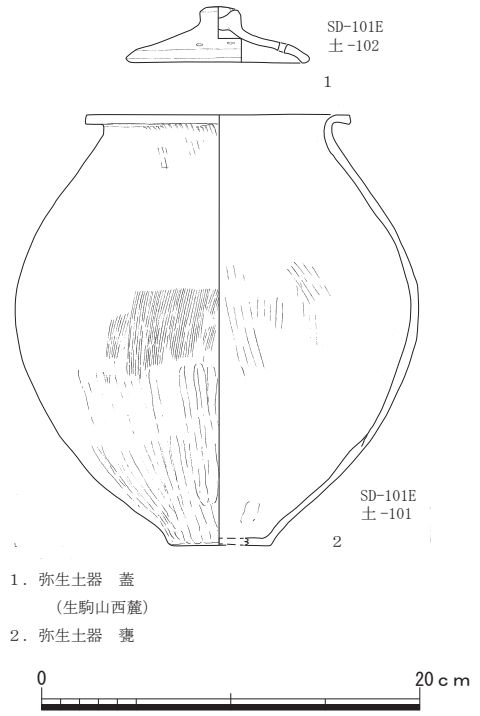




第９図　ST-101（１号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）



第10図　１号墓東周溝内土坑　遺物出土状況（S=1/30）



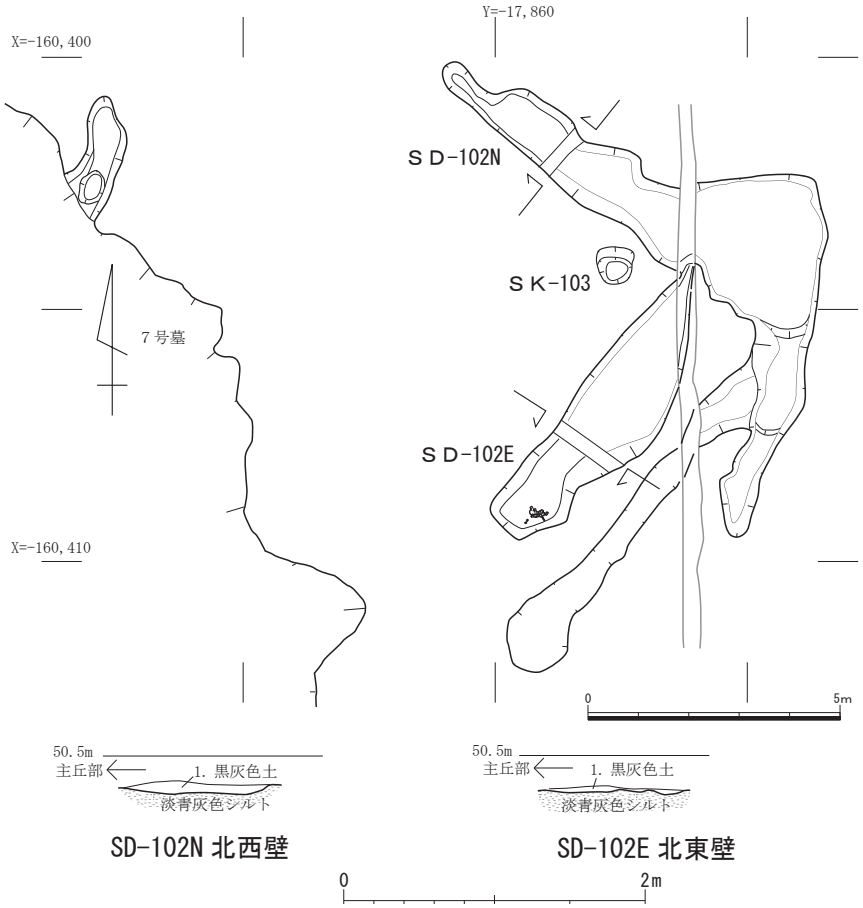
第11図　ＳＴ-101（１号墓）出土遺物（S=1/4）

ＳＴ-101（１号墓）　本調査区中央北側で検出した方形周溝墓である。西北西－東南東方向に軸を持ち、長辺10.5ｍ、短辺8.7ｍを測る。削平により北側周溝の両コーナーが不明瞭となっている。東側周溝の北端付近には甕１点・蓋１点が出土した小土坑がある。小土坑の時期は、大和第Ⅲ様式後半頃とみられる。周溝墓本体の時期は、遺物が希薄であったため明らかでない。

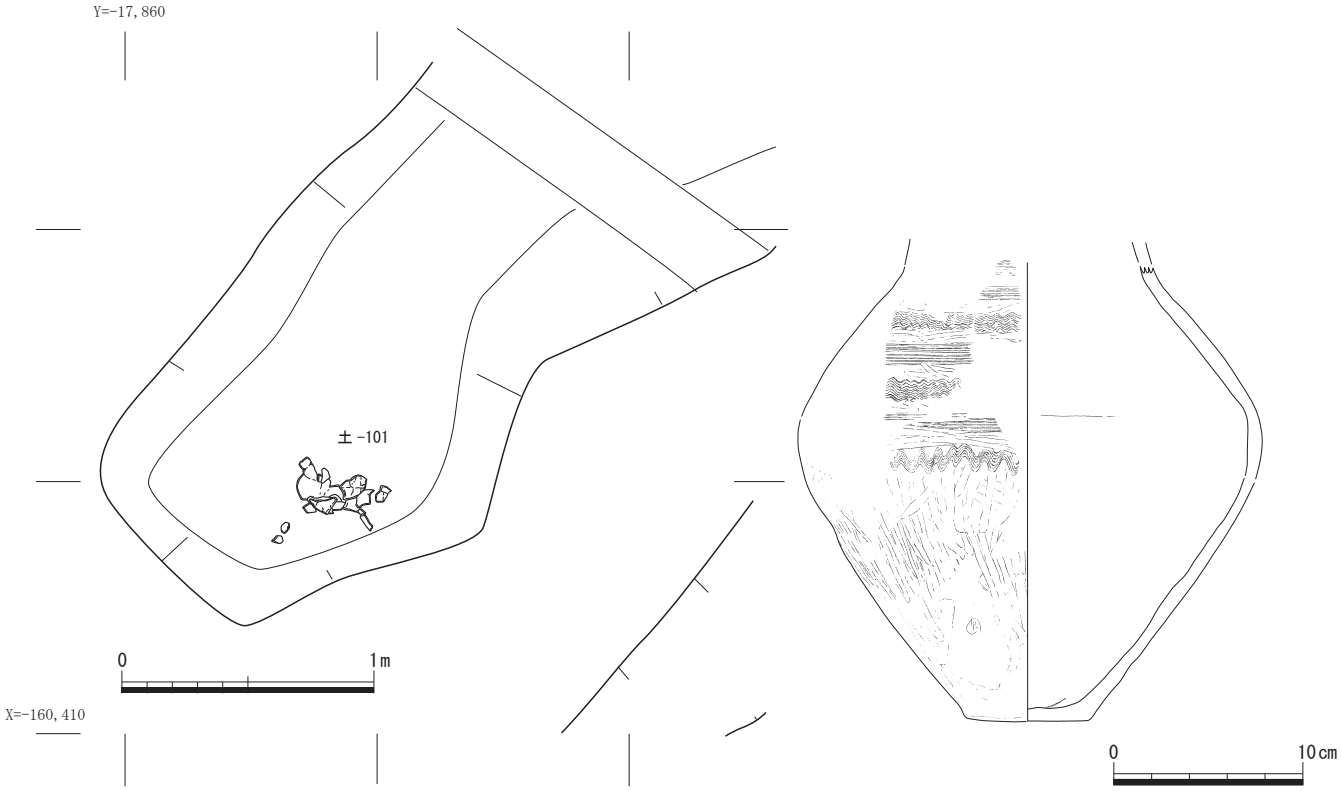
出土した蓋は、２孔一対の紐穴が２ヶ所あり、壷蓋と考えられる。胎土に角閃石を多く含み、生駒山西麓産の可能性がある。出土した甕の口縁径より大幅に小さい。甕は胴部最大径が胴部中位にあり、口縁が短く外反する。出土状況から土器棺の可能性がある。なお、土器内から遺物は出土していない。

ＳＴ-102（２号墓）

本調査区東側中央で検出した方形周溝墓である。西北西－東南東に軸を持ち、長辺 10.1 ｍ、短辺 9.4 ｍを測る。残存状況は極めて悪く、北側周溝・東側周溝のみ残存していた。西側周溝・南側周溝は隣接する７号墓付近に痕跡が残る程度である。甕１点、壺１点が出土している。うち壺は口縁部を欠失するものの、胴部を櫛描直線文・波状文で飾る。大和第Ⅲ様式後半の遺物とみられる。

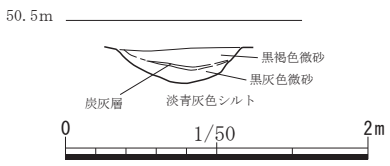


第 12 図　ＳＴ-102（２号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）

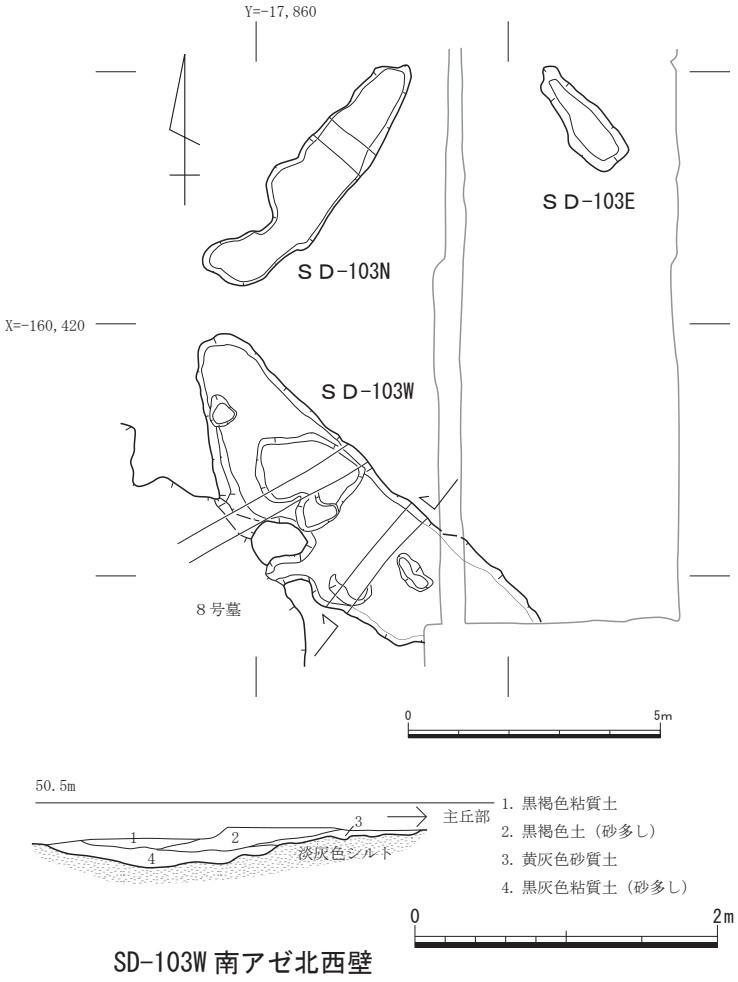


第 13 図　ＳＴ-102（２号墓）東周溝　遺物出土状況（S=1/30）及び出土遺物（S=1/4）

ＳＫ-103　２号墓の東端コーナー部で検出した小土坑である。直径 0.6 ｍ、深さ 0.2 ｍ。中層に薄い炭灰層がみられたが、遺物は出土していない。時期は明らかでないが、２号墓に伴うものである可能性も考えられる。



第 14 図　ＳＫ-103 層序（S=1/50）

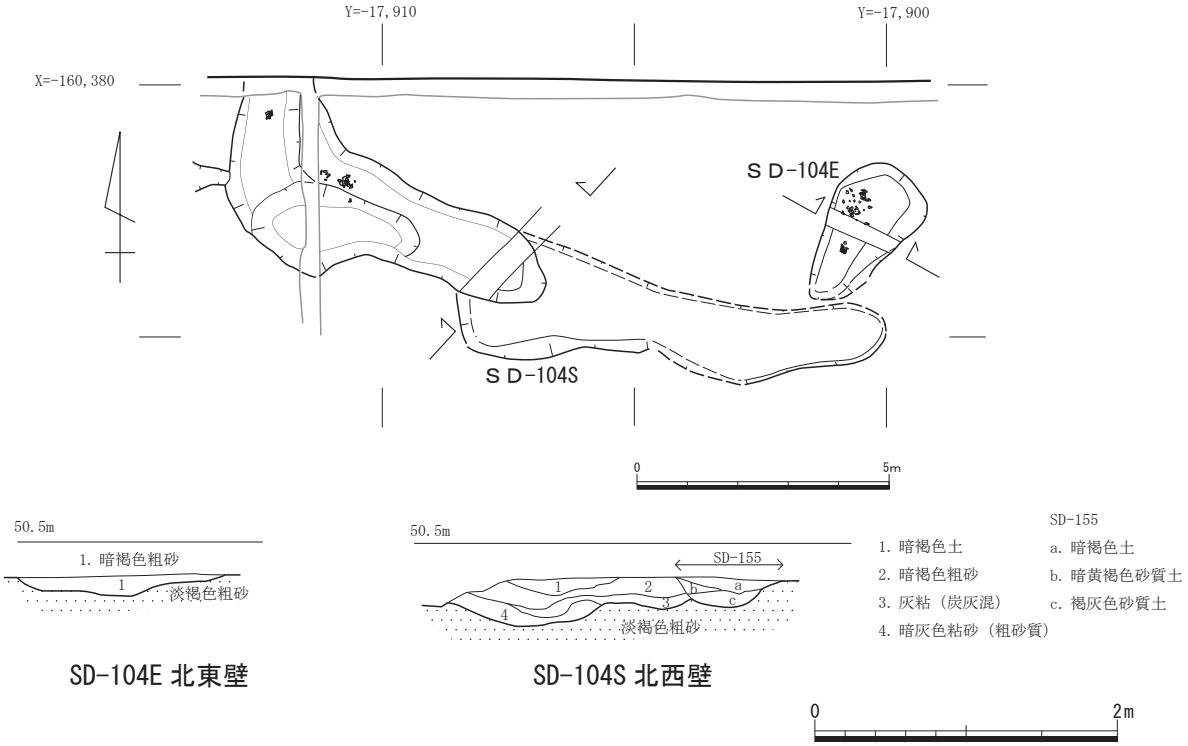


第 15 図　ＳＴ-103（３号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）

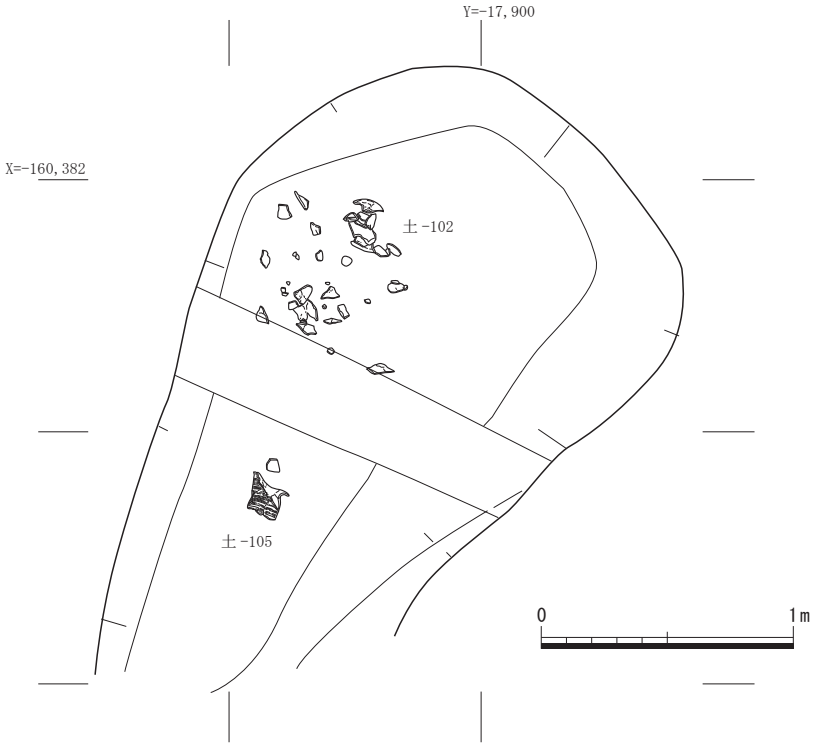
ＳＴ-103（３号墓）　本調査区南東隅で検出した方形周溝墓である。北西－南東に軸を持つ。全体に残りが悪い。西側周溝は比較的明確に残存していたが、北側周溝・東側周溝は一部が辛うじて残存していた程度である。南側周溝は調査区外となるため検出していない。北側周溝南肩から調査区南端までが約 10 ｍであるため、長辺は 10 ｍ以上になるとみられる。短辺は 7.6 ｍである。大和第Ⅱ-1 様式頃の壺小片が出土しているが、ＳＴ－ 108 から出土した壺片と同一個体であるため、周溝墓の時期を示す遺物とはならないであろう。それ以外の出土遺物がみられないため、時期は明らかでない。

ＳＴ-104（４号墓）

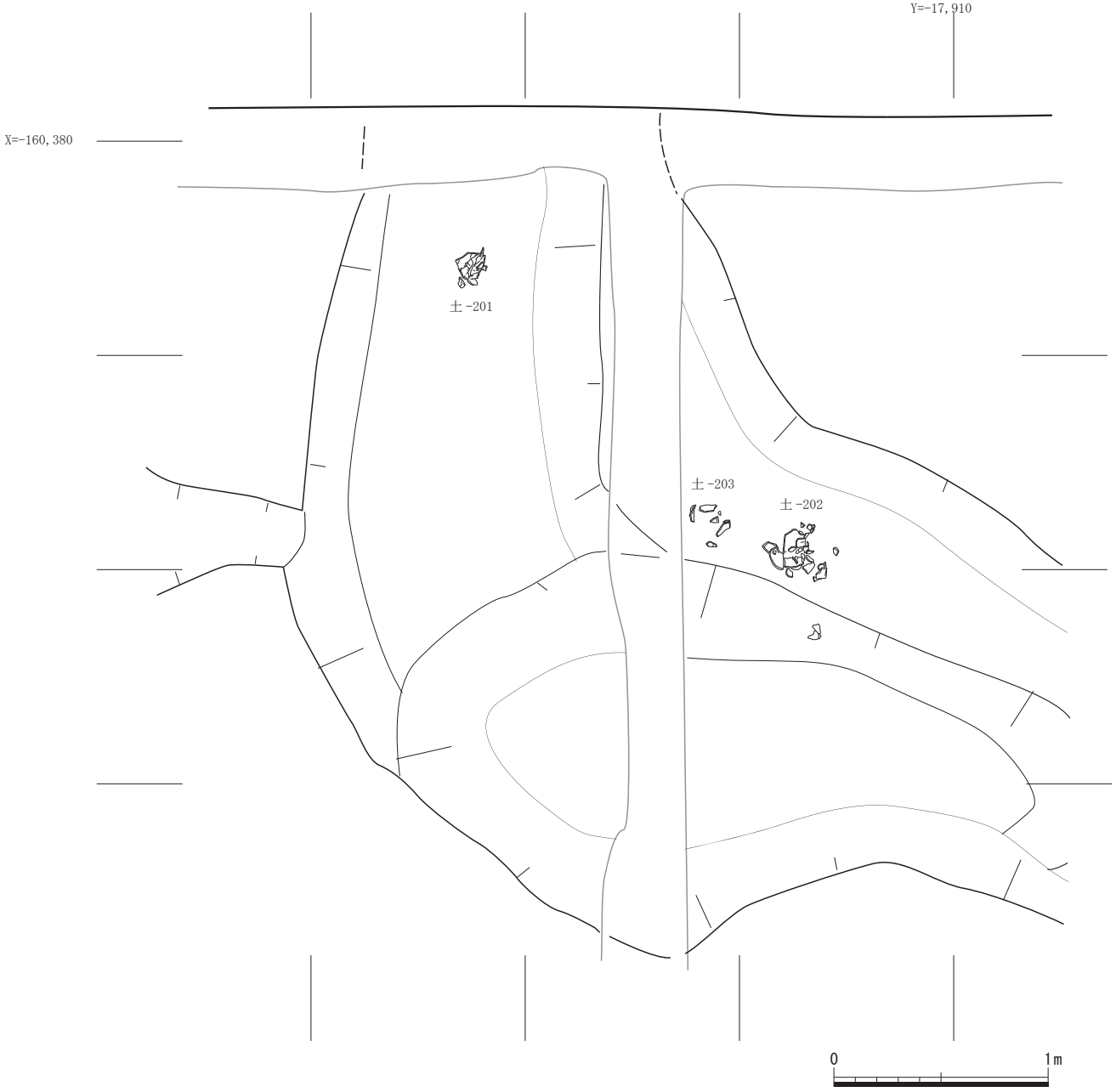
調査区西半北端で検出した方形周溝墓である。西北西－東南東に軸を持ち、東西 10.7 ｍを測る。北側周溝は調査区外となるため検出していない。また、南側周溝の東半は中世素掘小溝により削平を受けている。周溝の最大幅 2.5 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。東側周溝より広口長頸壺１点、台付鉢１点などが出土している（第 19 図）。大和第Ⅲ-1 ～ 2 様式頃の遺構とみられる。



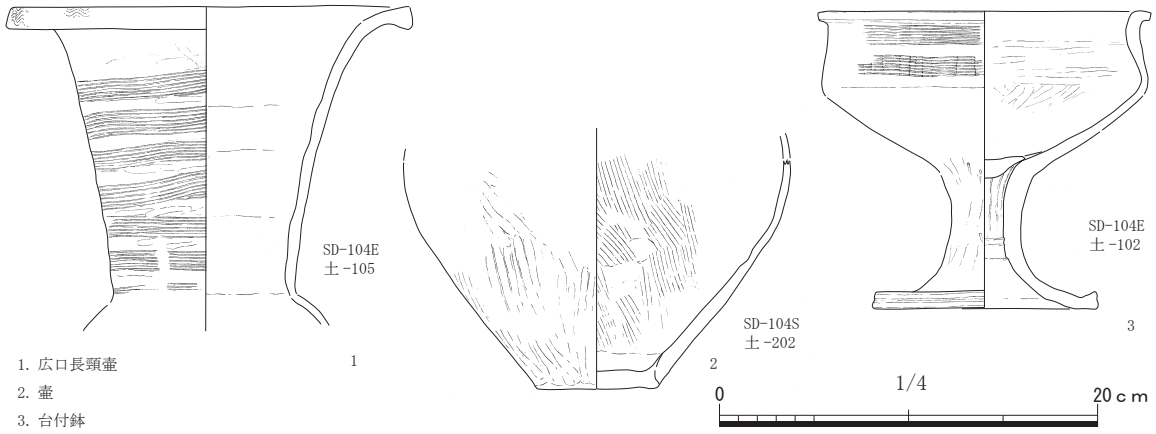
第 16 図　ＳＴ -104（４号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）



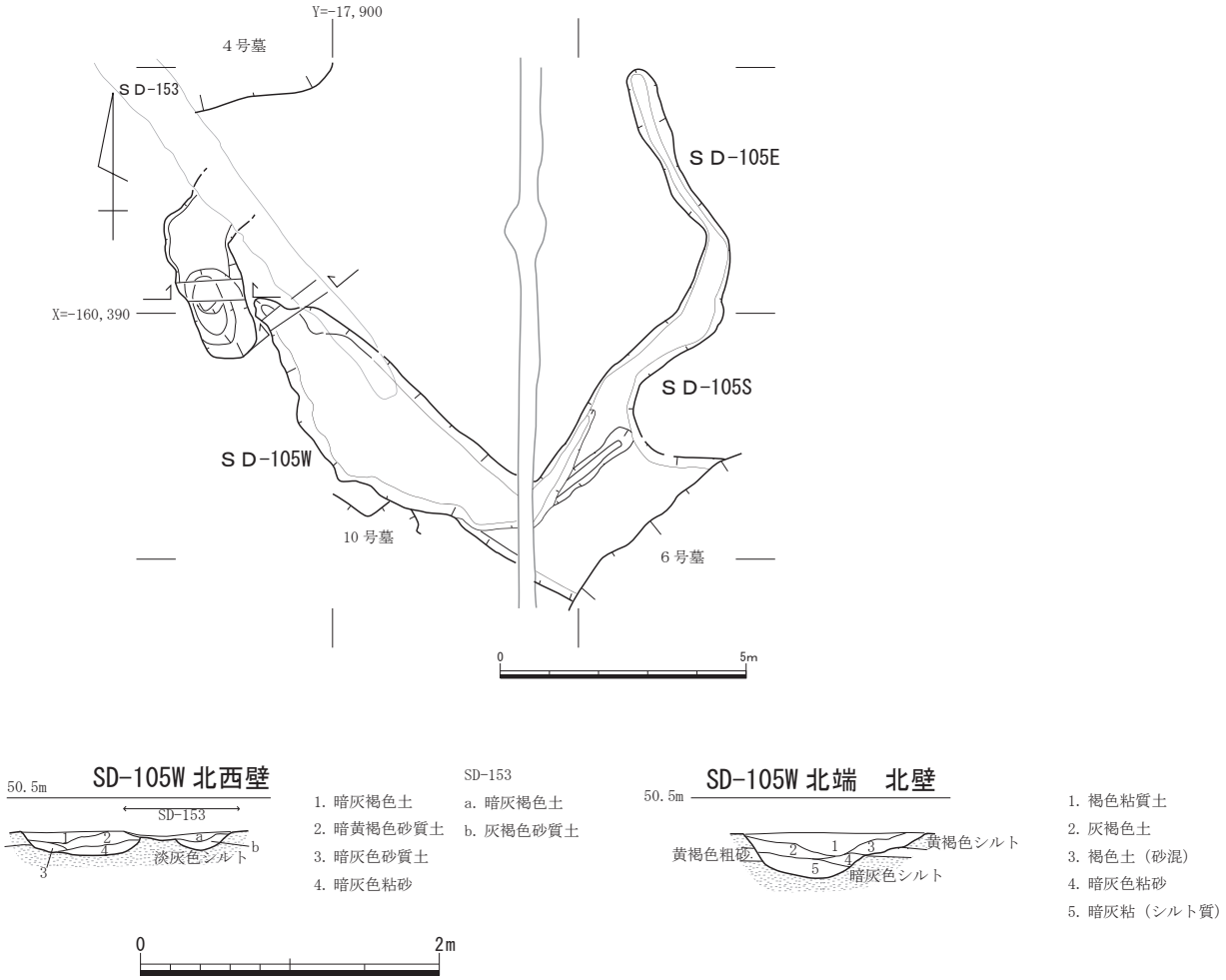
第 17 図　ＳＴ -104（４号墓）東周溝　遺物出土状況（S=1/30）



第 18 図　ＳＴ-104（４号墓）南周溝　遺物出土状況（S=1/30）



第 19 図　ＳＴ-104（４号墓）出土遺物（S=1/4）

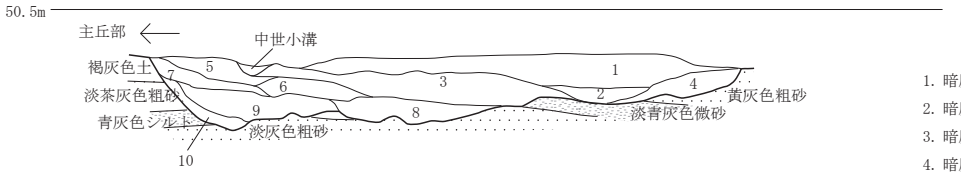


第 20 図　ＳＴ -105（５号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）

ＳＴ -105（５号墓）　調査区西半北側で検出した方形周溝墓である。北西－南東に軸を持つ。全体に削平を受けており、北側周溝は残存しない。また、西側周溝がＳＤ－ 153 に切られるため正確な規模は不明である。現況から規模を推定すると、長軸８ｍ前後、短軸 6.7 ｍ前後とみられる。溝は最大で幅２ｍ、深さ 0.2 ｍであるが、大半の部分は痕跡が残る程度の深さとなっている。遺物が少ないため詳細な時期は不明。なお、この５号墓と南東に隣接する６号墓の溝中より縄文晩期の凸帯文土器小片が出土している。付近に包含層があった可能性がある。

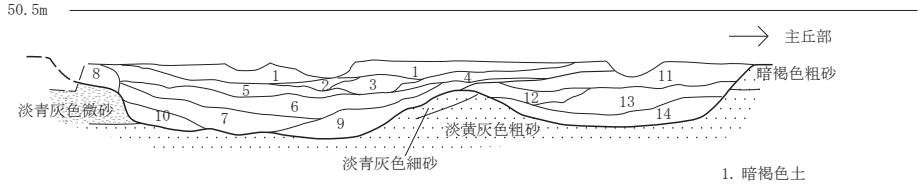
第21図　ＳＴ-106（６号墓）遺構平面図（S=1/150）

ＳＴ-106（６号墓）　調査区中央で検出した方形周溝墓である。北西－南東に軸を持ち、長辺11.1ｍ、短辺8.2ｍを測る。周溝は、幅4.3ｍ、深さ0.4ｍであるが、堆積状況から再掘削が行われた可能性が高い。南東に隣接する７号墓とは２か所で溝が接続している。なお、遺物が少ないため詳細な時期は明らかでない。



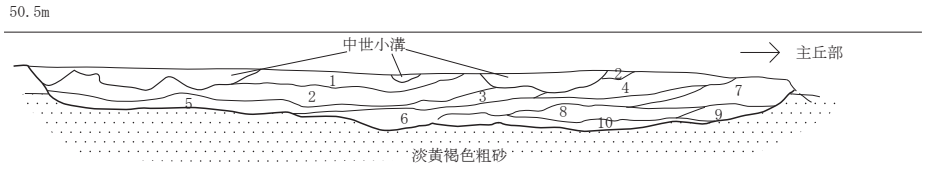
SD-106E 南東アゼ北東壁

1. 暗灰褐色土
2. 暗灰色粘砂
3. 暗灰褐色砂質土
4. 暗灰褐色砂質土（ハード）
5. 灰褐色砂質土
6. 暗灰褐色砂質土
7. 灰褐色粗砂
8. 暗灰色粘質土（粗砂混）
9. 灰褐色粘砂
10. 青灰色シルト（ブロック状）



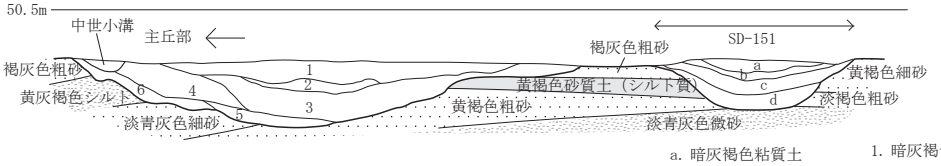
SD-106S 南西アゼ　北西壁

1. 暗褐色土
2. 暗灰色粘質土（砂混）
3. 暗灰褐色土（細砂混）
4. 暗褐色砂質土
5. 灰褐色粘質土
6. 暗灰粘
7. 暗灰色粘砂
8. 暗褐色土（シルト質）
9. 暗灰色砂質土
10. 灰黒色粘砂
11. 暗灰褐色砂質土
12. 灰褐色砂質土
13. 暗灰粘（砂混）
14. 暗灰色粘砂（粗砂質）



SD-106W 北西アゼ　北東壁

1. 暗灰褐色土（砂多し）
2. 暗灰褐色土
3. 黒褐色土
4. 暗灰褐色土（砂多し）
5. 暗灰色粘質土（茶斑）
6. 灰色砂質土
7. 灰褐色砂質土
8. 灰褐色土（暗褐色土ブロック混）
9. 暗褐色土（粗砂混）
10. 暗灰色粘質土（砂混）

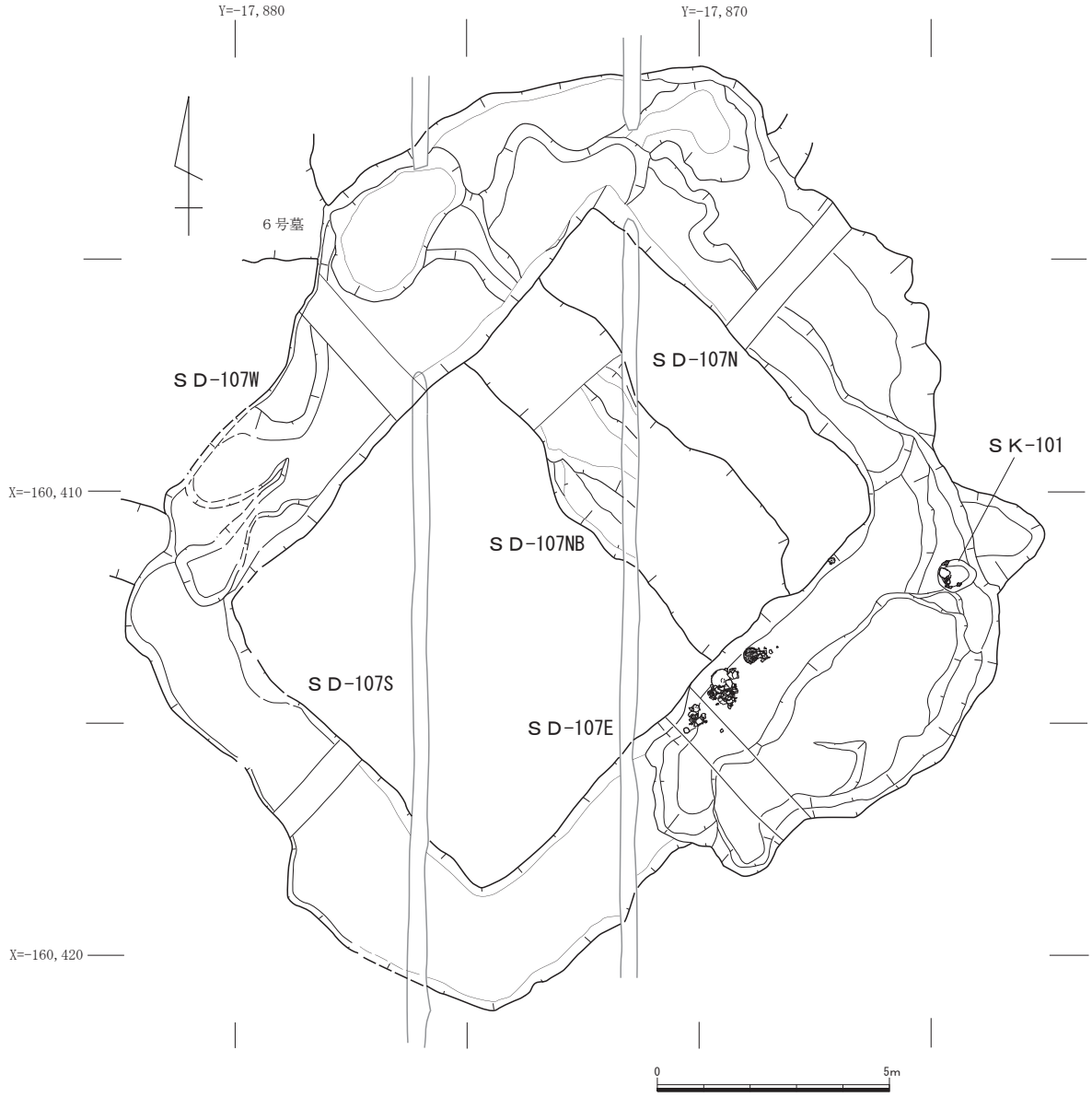


SD-106N 北東アゼ　北西壁

a. 暗灰褐色粘質土
b. 暗灰色砂質土
c. 暗灰粘
d. 灰色粘砂

1. 暗灰褐色土
2. 暗灰褐色粗砂（暗灰粘混）
3. 暗灰色粘質土（粗砂流れ込み混）
4. 灰褐色粘質土（黄褐色粗砂ブロック）
5. 暗灰粘
6. 淡青灰色シルト（灰褐色粘質土ブロック）

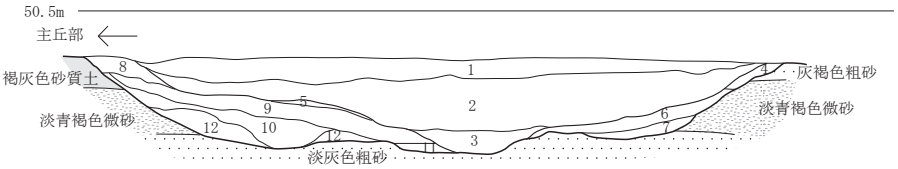
第 22 図　ＳＴ -106（６号墓）層序（S=1/50）



第23図　ＳＴ-107（７号墓）遺構平面図（S=1/150）

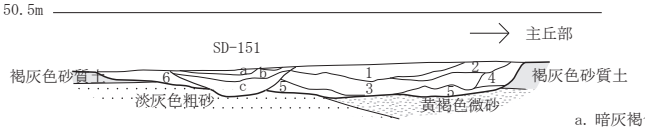
ＳＴ-107（７号墓）　本調査区南側東半で検出した方形周溝墓である。北西－南東に軸を持ち、長辺12.1ｍ、短辺8.6ｍを測る。周溝は東側周溝の北半と西側周溝の北側2/3が深くなっている。南側周溝で幅２～３ｍ、東側周溝中央の最も広い所で幅５ｍを測る。遺物は、東側周溝中央墳丘側で供献土器とみられる大形の甕・大形の鉢・広口長頸壺・細頸壺各１点が出土している（第25～27図）。このうち甕と鉢は肩付近のブロック状の堆積層（墳丘成形層？）の上から浅い穴を掘って正置したものとみられる。広口長頸壺は、同様の堆積層の上に口縁部を下に向けて直立していた可能性がある。検出時には口頸部のみが直立し、胴部はその周辺で潰れた状態で出土した。遺物より、時期は大和第Ⅲ-2様式前後とみられる。

なお、この方形周溝墓の墳丘内には、北側周溝と平行する溝１条がある。溝は南東端で若干南に屈曲すること、７号墓の南側周溝や東側周溝の南半と規模的に近いことなどから、これが本来の７号墓の北側周溝であった可能性が考えられる。溝は地山ブロック土を含む土で埋没しており、墳丘拡張に伴い人為的に埋められたものであろう。このような拡



1. 暗灰褐色土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰粘
4. 灰褐色粗砂
5. 黒灰色砂質土（細砂質）
6. 暗灰色粘質土
7. 暗灰色粘質土
（ブロック土・暗灰色粗砂混）
8. 灰褐色砂質土
9. 黒褐色土（粗砂質）
10. 暗灰色粘砂（淡黄灰色シルトブロック）
11. 淡灰色粗砂（黒灰色土ブロック）
12. 淡灰色粗砂（ブロック状）

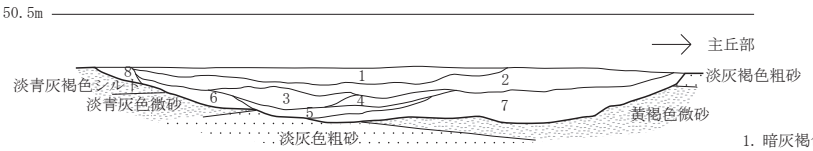
SD-107E　南東アゼ　北東壁



a. 暗灰褐色土
b. 暗灰褐色砂質土
c. 灰褐色粘質土

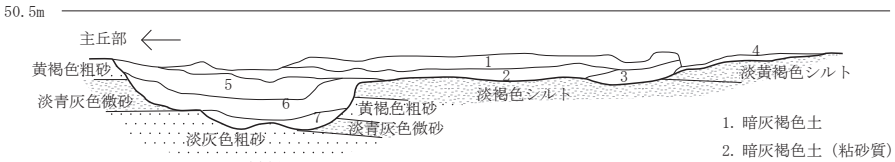
1. 暗灰褐色粘質土
2. 暗灰色粘質土（炭混）
3. 暗褐色粘質土（砂多し）
4. 暗灰色砂質土
5. 暗灰褐色砂質土（黄褐色微砂ブロック混）
6. 暗褐色土（シルト質）

SD-107S　南西アゼ　北西壁



1. 暗灰褐色砂質土
2. 暗灰褐色土
3. 暗灰色粘質土
4. 灰色粘質土（砂混）
5. 暗灰粘
6. 暗灰色粘砂（青灰色微砂ブロック多く含む）
7. 暗灰色粘質土（砂多し）
8. 茶灰色細砂（黒灰色粘質土ブロック混）

SD-107W　北西アゼ　北東壁



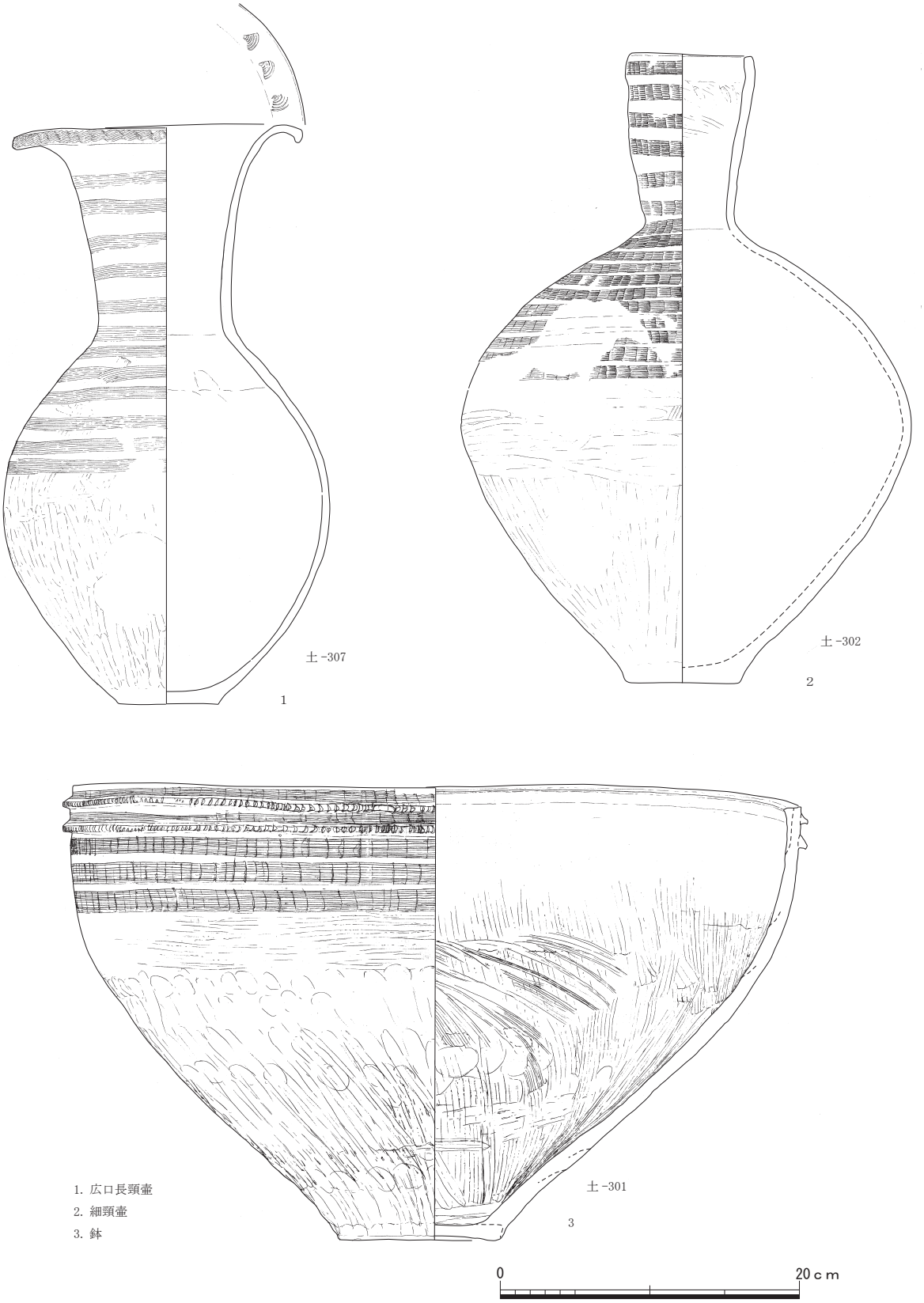
1. 暗灰褐色土
2. 暗灰褐色土（粘砂質）
3. 黒褐色土
4. 暗褐色土（シルト質）
5. 褐灰色砂質土
6. 暗灰粘・黄灰色粘砂ブロック土
7. 淡灰色粘砂（ブロック状・暗灰色粘質土混）

SD-107N　北東アゼ　北西壁

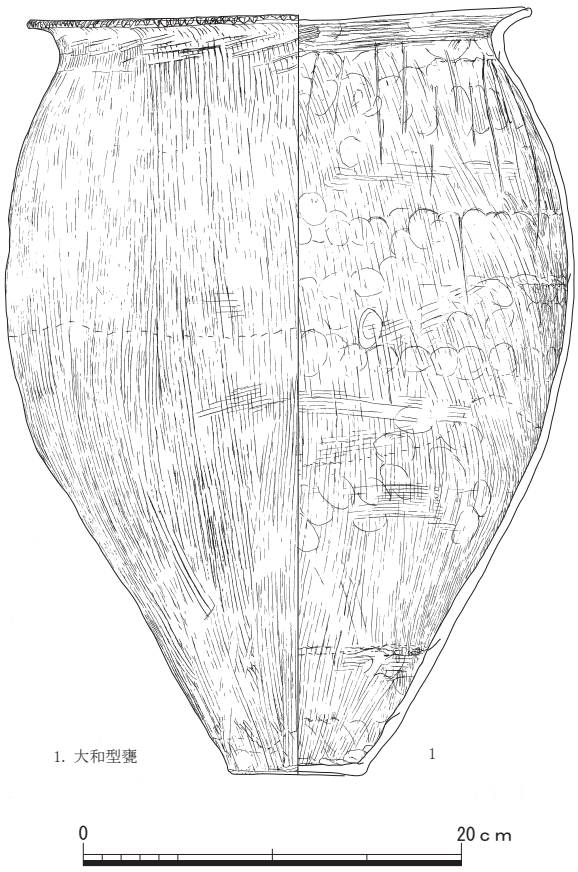
0　2m

第24図　ＳＴ-107（７号墓）層序（S=1/50）

第25図　ＳＴ-107（７号墓）東周溝　遺物出土状況（S=1/30）



第26図　ＳＴ-107（７号墓）出土遺物（１）(S=1/4)

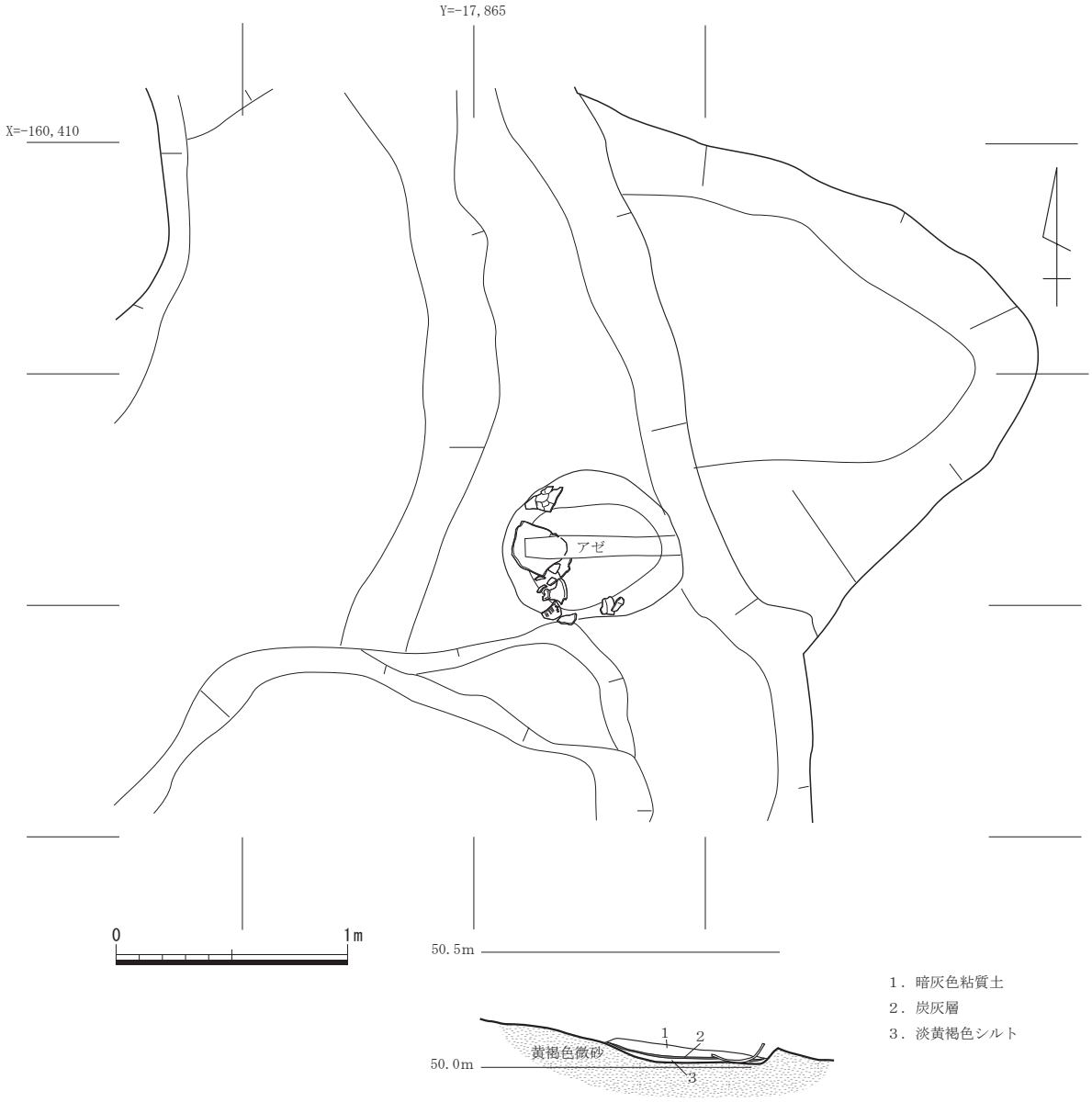


第27図　ＳＴ-107（７号墓）出土遺物（２）(S=1/4)

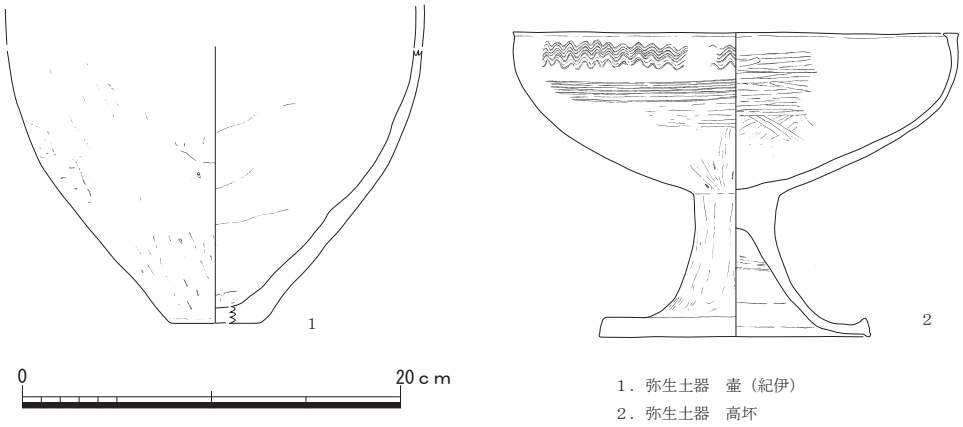
張とも考えられる行為は後述する14号墓でも確認できる。

供献土器はいずれも大形品である。倒立状態で出土した広口長頸壷（土-307　第26図１）は器高38.7cm、口径19.4cm、胴部径21.5cmを測る。鉢の南東で潰れた状態で出土した細頸壷（土-302　第26図２）は、器高42.0ｍ、口径8.0cm、胴部最大径30.0cmを測る。墳丘肩に設置されていた鉢（土-301　第26図３）は、口径48.7cm、器高30.4ｃｍを測る。鉢の北東側に隣接して墳丘肩に設置されていた大和型甕（土-303　第27図１）は、器高40.1cm、口径26.5cm、胴部最大径30.0ｃｍを測る。外面に煤が薄く付着する。

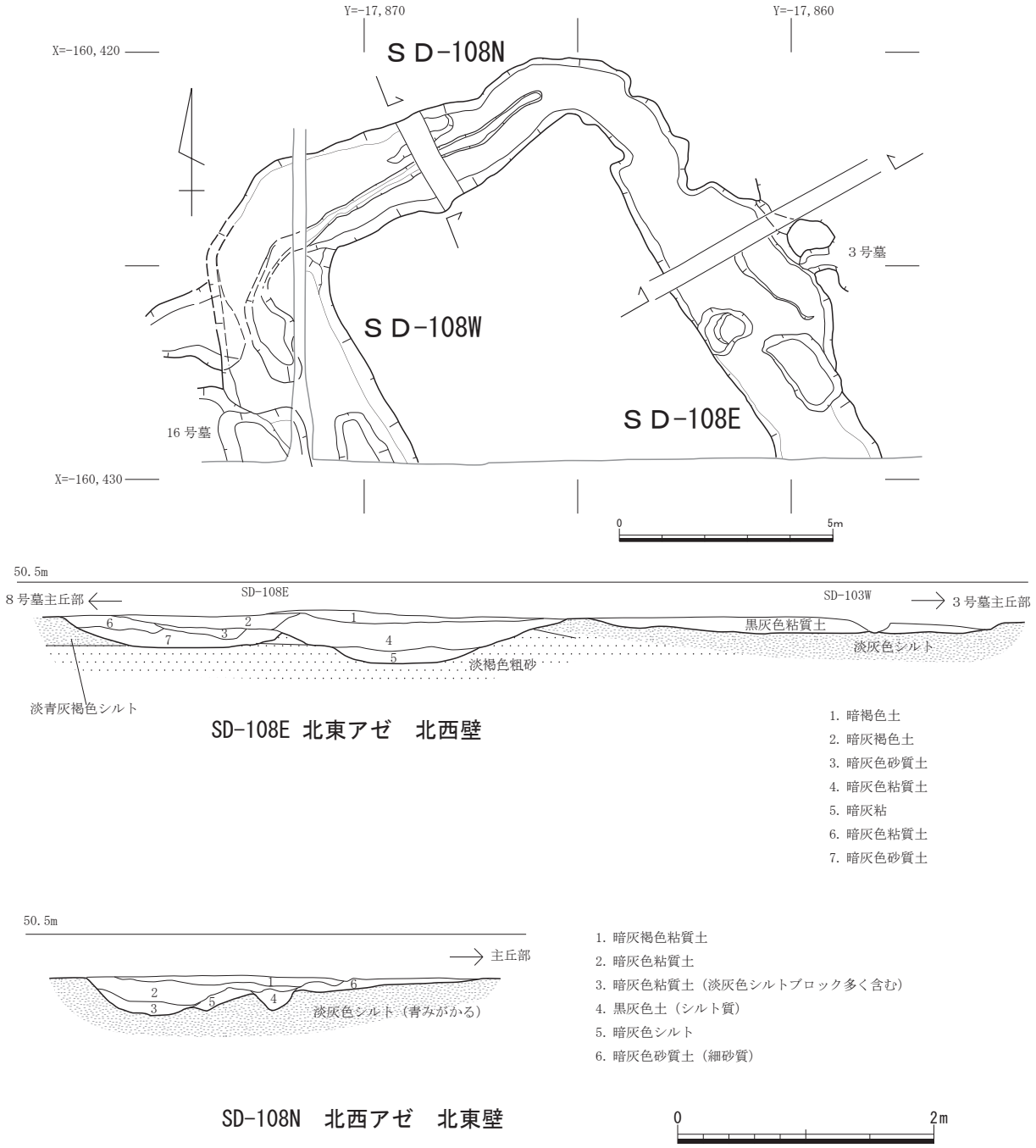
ＳＫ-101　７号墓東端の周溝内で検出した小土坑である。７号墓の掘り下げ中に検出したため、周濠との切り合い関係は確認できなかった。直径約0.8ｍ、残存する深さ0.1ｍ。下面に炭灰層があり、その直上で壷や高坏等の破片が出土した。このうち、壷は結晶片岩を多く含むことから、紀伊地域からの搬入である可能性がある。高坏は半完形に復元できるもので、坏部外面には波状文と直線文が施される。遺物より、大和第Ⅲ-2様式頃の遺構とみられる。



第 28 図　ＳＴ -107（７号墓）東周溝内小土坑（ＳＫ -101）遺物出土状況（S=1/30）



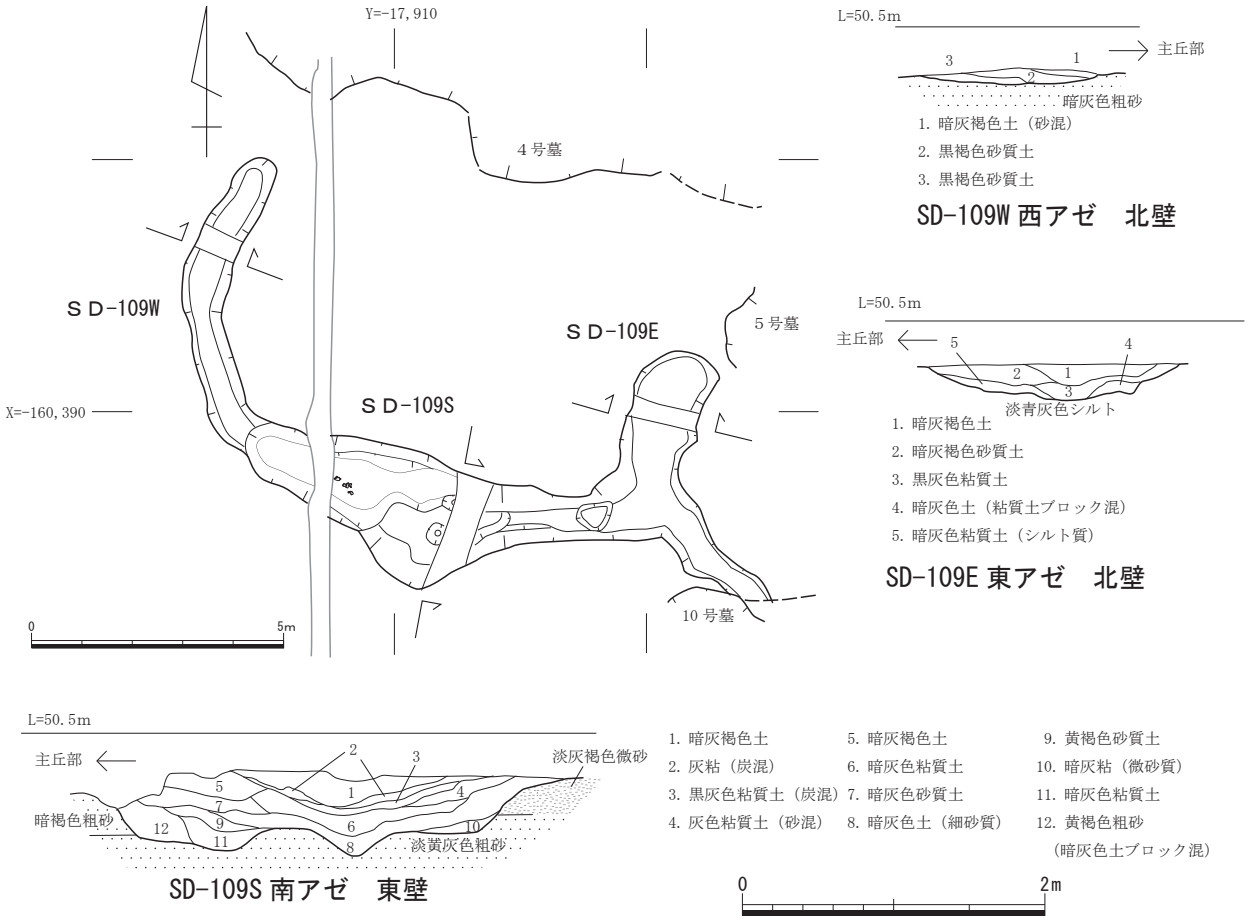
第 29 図　ＳＫ -101 出土遺物（S=1/4）



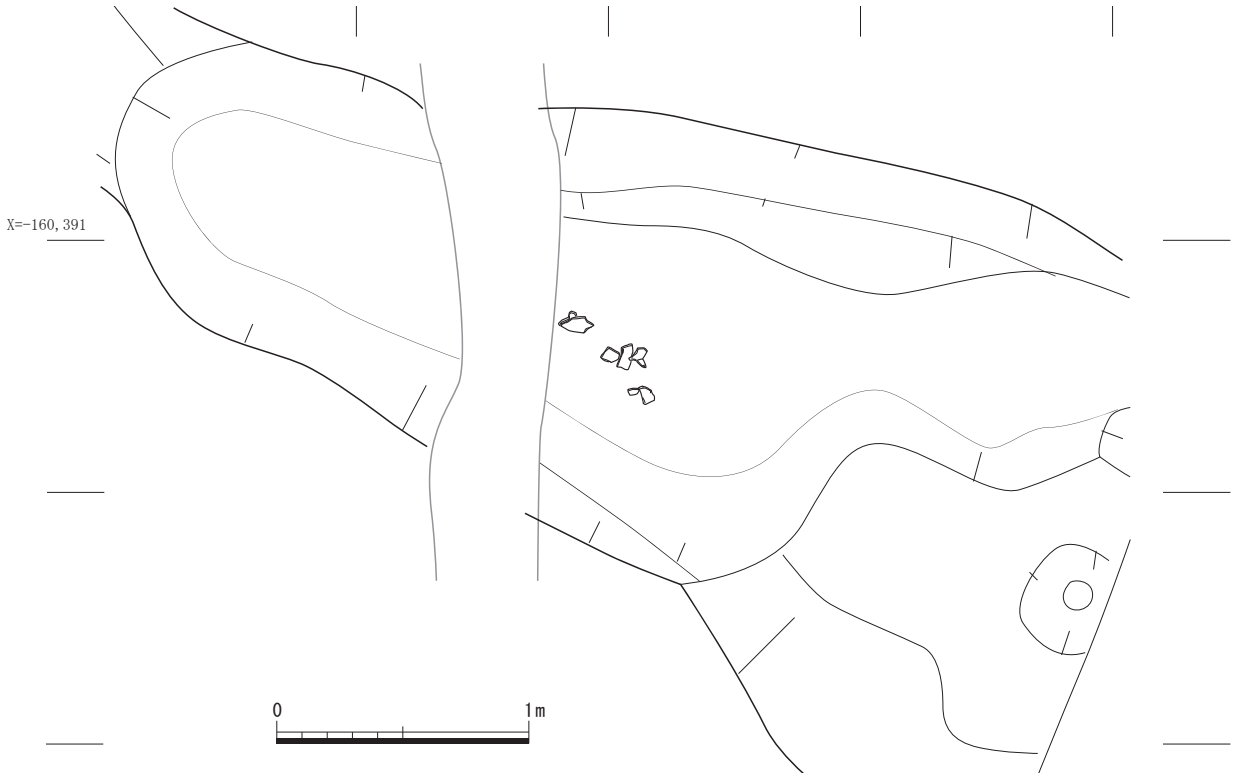
第30図　ＳＴ-108（８号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）

ＳＴ-108（８号墓）　本調査区南端東側で検出した方形周溝墓である。北北西－南南東に軸を持ち、短辺約８ｍを測る。長辺は南端が調査区外となるため正確な規模を知ることができない。ただし、調査区南端で東側周溝が若干西側へ屈曲しており、墳丘東南端に近いとみられる。調査区内の検出長9.5ｍがほぼ長辺の規模となるであろう。出土遺物は、３号墓と同一個体となる前期末の壺片などごく少量であり、遺物からの時期決定は困難である。

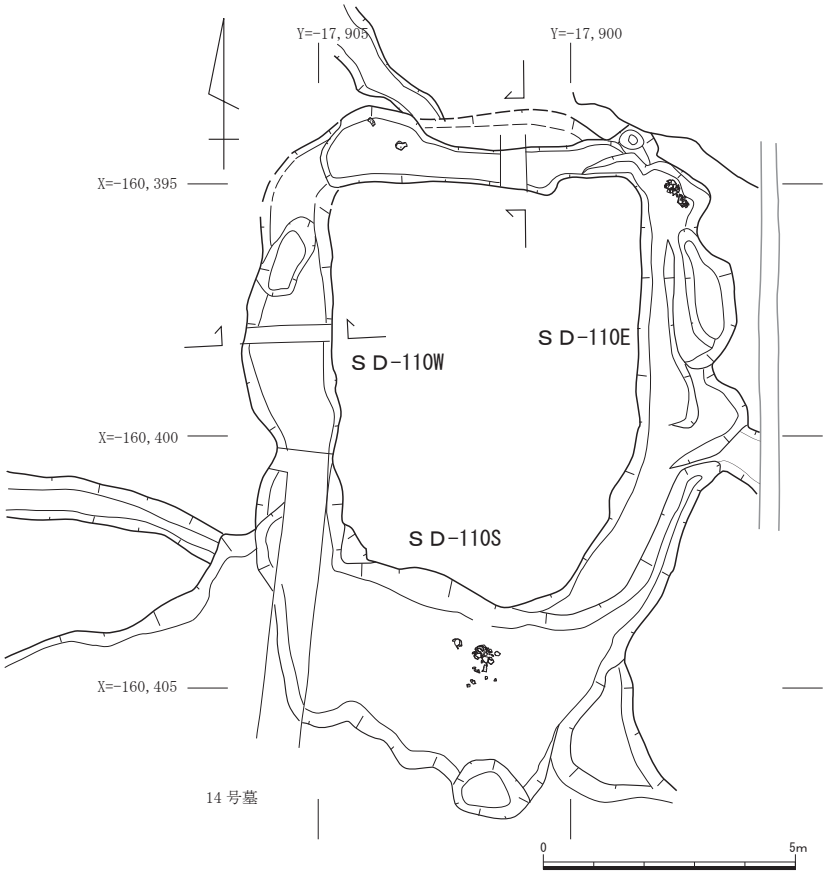
ＳＴ-109（９号墓）　本調査区北西部で検出した方形周溝墓である。西北西－東南東に軸を持つ。長辺9.4ｍを測る。北側周溝が検出されていないが、４号墓南側周溝と共有関係にあると理解すれば、短辺約６ｍとなる。遺物は南西コーナー付近で少量の土器片が出土したのみであり、詳細な時期は明らかでない。

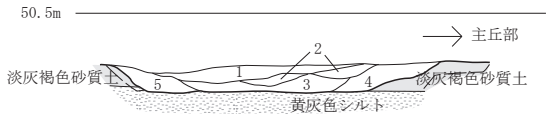


第 31 図　ＳＴ -109（９号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）



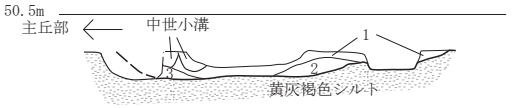
第 32 図　ＳＴ -109（９号墓）南周溝　遺物出土状況（S=1/30）





1. 暗灰褐色粘質土
2. 黄灰色粗砂
3. 灰褐色土（黄褐色粗砂流れ込み含む）
4. 暗灰褐色土
5. 暗灰褐色土（シルト質）

SD-110W 西アゼ　北壁



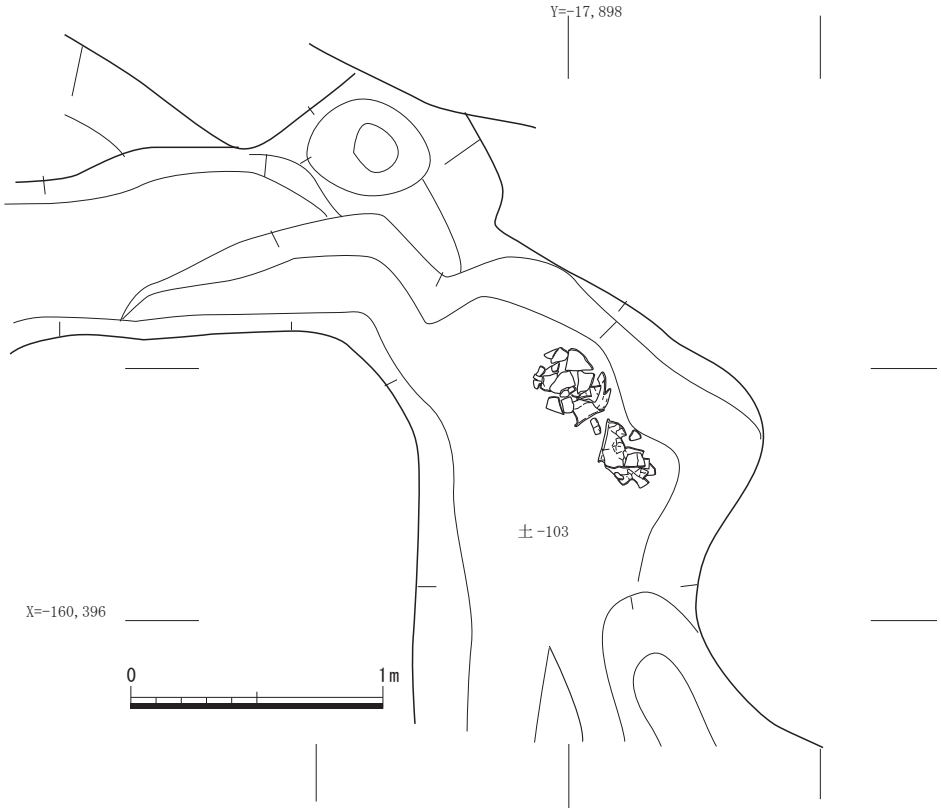
1. 暗灰褐色土（シルト質）
2. 暗灰褐色粘質土（シルト質）
3. 暗黄灰色シルト（粘質土ブロック混）

0　2m

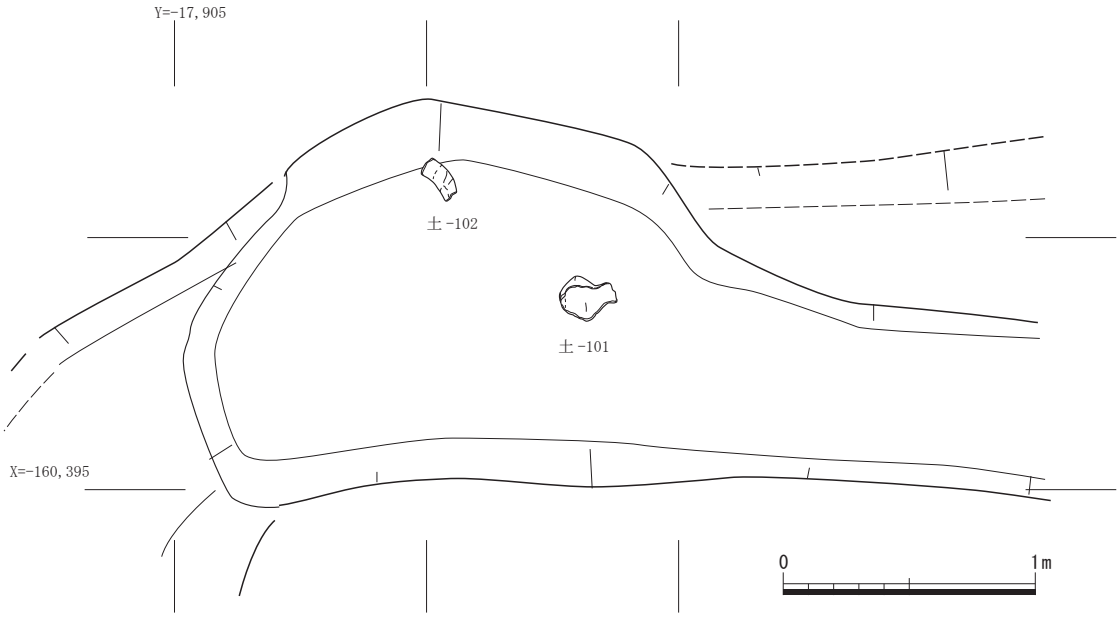
SD-110N 北アゼ西壁

第 33 図　ＳＴ -110（10 号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）

ＳＴ -110(10 号墓）　本調査区西半中央で検出した方形周溝墓である。南－北に軸を持ち、長辺 8.2 ｍ、短辺 6.1 ｍを測る。北側周溝からは甕（第 37 図 4)、壺（第 37 図 3）各 1 点が出土している。なお、壺は色調が淡灰褐色で胴部中央が算盤玉状となり、摂津系の搬入品である可能性がある。時期は大和第Ⅲ -3 様式頃とみられる。南側周溝（ＳＤ -110 Ｓ）は若干主軸が異なり、西北西－東南東方向となっている。10 号墓に切られる別の周溝墓の可能性もあるが、溝の深さは明らかに南側周濠が深いことから、7 号墓で推測される状況と同じく、南側に拡張した結果である可能性が高い。南側周溝出土の土器は、大和第Ⅲ -1 様式に遡る可能性のある壺胴部（第 37 図 2)、大和第Ⅲ -2 様式頃の広口長頸壺（第 37

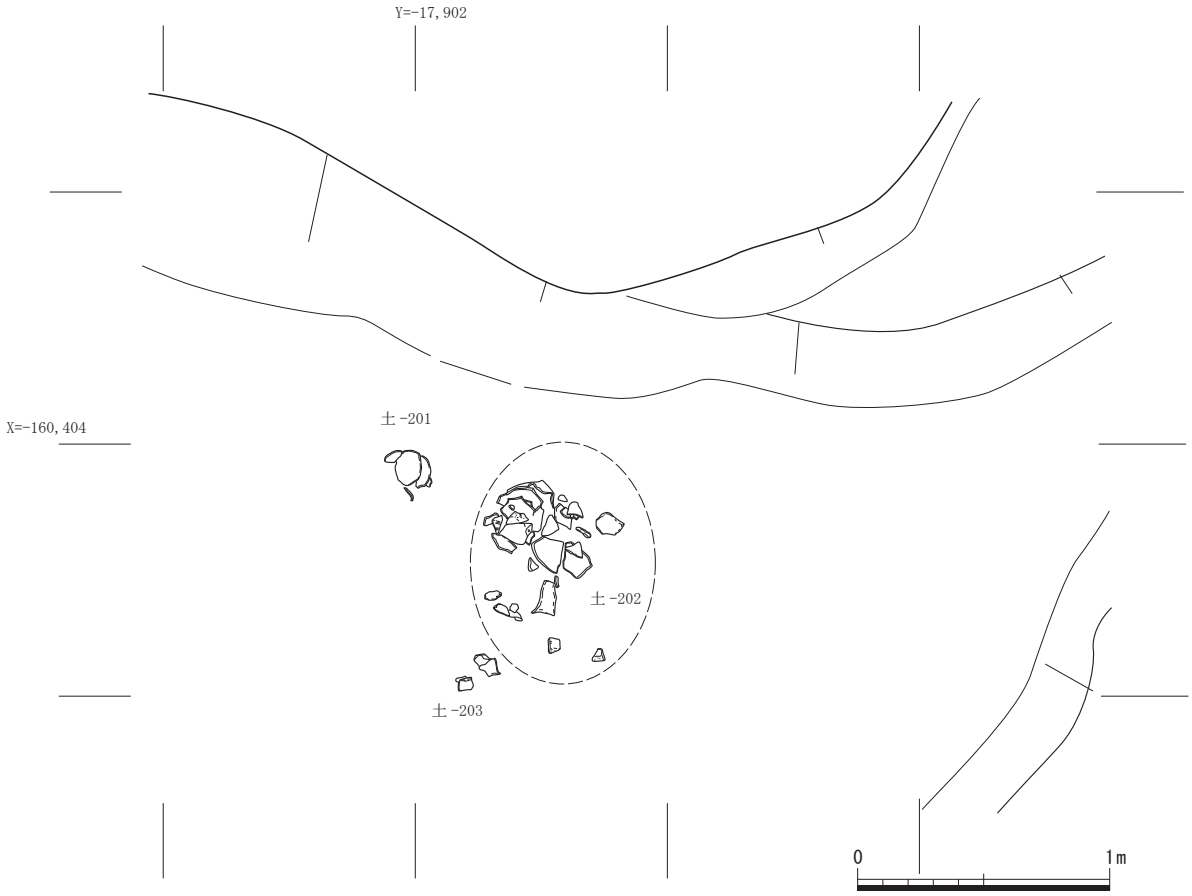


第34図　ＳＴ-110（10号墓）北東角　遺物出土状況（S=1/30）

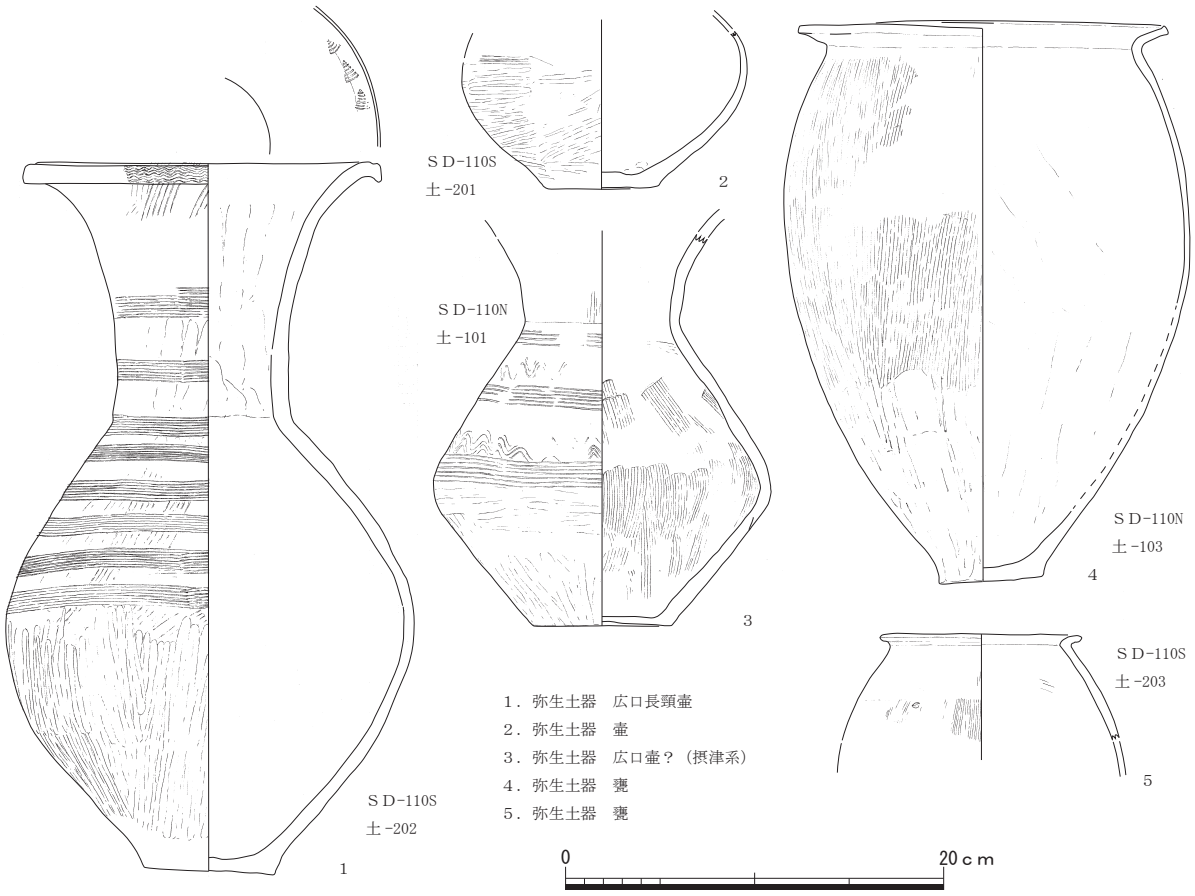


第35図　ＳＴ-110（10号墓）北周溝　遺物出土状況（S=1/30）

図１)、大和第Ⅲ-3様式の可能性のある甕（第37図5）となっており、再掘削の時期はⅢ-4頃とみられる。なお、層序からＳＤ-110 Ｓの北半が当初の掘削、南半が再掘削と考えられる（第47図ＳＤ-114N西壁参照)。



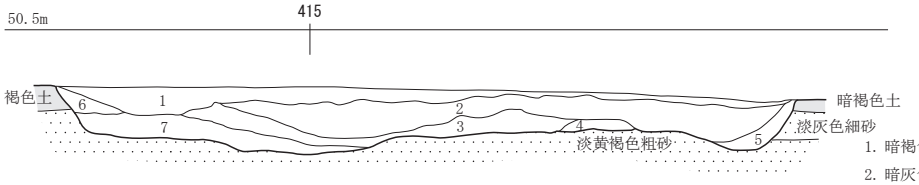
第36図　ＳＴ-110（10号墓）南周溝　遺物出土状況（S=1/30）



第37図　ＳＴ-110（10号墓）出土遺物（S=1/4）

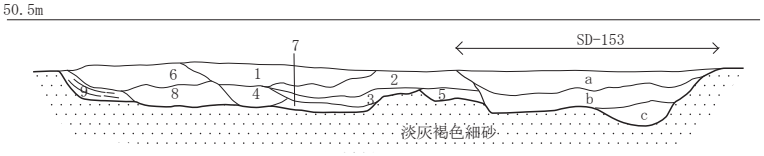
第38図　ＳＴ-111（11号墓）遺構平面図（S=1/150）

ＳＴ-111(11号墓)　本調査区中央南側で検出した方形周溝墓である。北北西－南南東に軸を持ち、長辺11.3ｍ、短辺7.5ｍを測る。 東側周溝東半が庄内期の溝ＳＤ－153に切られているため、溝の東肩は明らかでない。墳丘東辺沿いの砂質ブロック土層（墳丘整形層？）上に鉢１点、壷１点が正置されていた。なお、壷は底部付近のみの出土で、焼成不良のため残存が悪く図化していない。鉢は完形品で、時期は大和第Ⅲ-1様式とみられる（第41図2）。



SD-111N　アゼ　南西壁

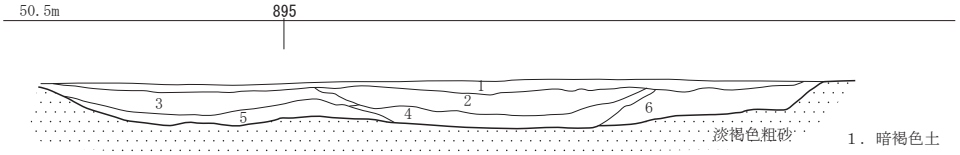
1. 暗褐色砂質土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗灰色粘砂
4. 暗灰色粘質土
5. 淡灰色細砂（流れ込み・暗灰色粘質土混）
6. 黄褐色粗砂
7. 暗灰色粘砂（ブロック状の暗灰色土混）



SD-111E アゼ北西壁

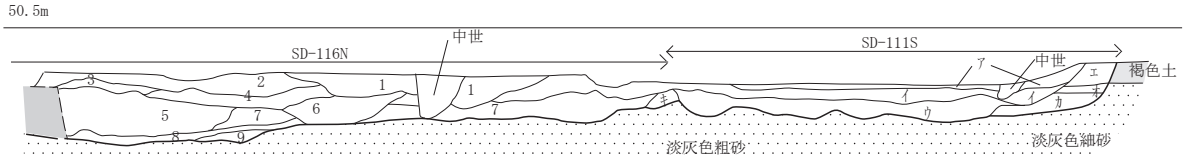
a. 明褐色粘質
b. 灰粘
c. 暗灰色粘質土
（ブロック状・粗砂混）

1．暗褐色土（粗砂混）
2．暗灰褐色粘質土
3．灰色粘質土
4．暗灰色砂質土
5．暗灰色砂質土
6．褐色土（砂多し）
7．暗灰色粘質土
（ブロック状・粗砂流れ込み含む）
8．暗灰粘（砂混）
9．灰色粘質土（淡灰色粗砂流れ込み含む）



SD-111W　北西壁

1．暗褐色土
2．暗灰色粘質土（やや青みがかる）
3．暗灰色粘質土（やや暗い）
4．暗灰色砂質土（ブロック状の粘質土混）
5．黒灰色粗砂（褐色土混）
6．暗灰色砂質土（ブロック状の粘質土混）



SD-111S・SD-116N アゼ南西壁

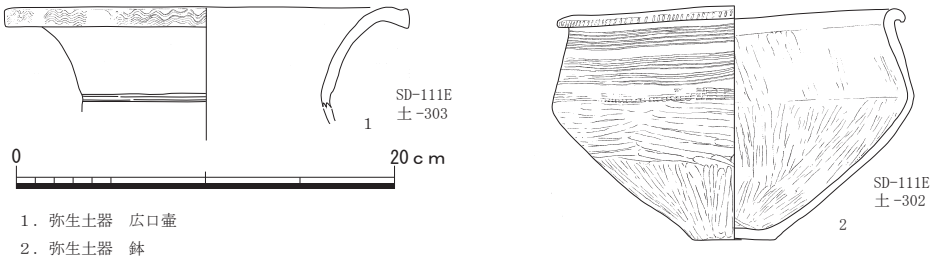
ア．褐色粘質土（鉄分含む）
イ．暗灰褐色粘質土
ウ．黒灰色砂質土（粘質土混）
エ．明褐色砂質土
オ．灰褐色砂質土
カ．明灰色砂質土
キ．黒灰色粗砂

1．暗褐色砂質土
2．明褐色土
3．暗灰色粘質土
4．灰粘
5．暗灰色粘質土
6．暗灰色粘質土（砂多し）
7．黒灰色砂質土
8．灰粘（砂混・炭灰混）
9．黒灰色砂質土

第 39 図　ＳＴ -111（11 号墓）層序（S=1/50）

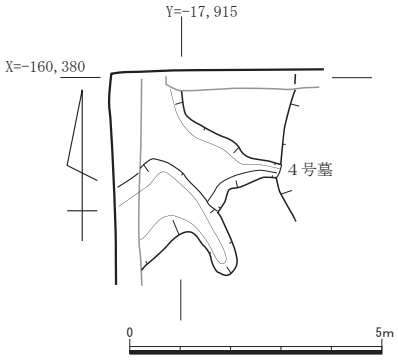
Y=-17,888
Y=-17,886
X=-160,414
X=-160,416
ＳＤ-153
土-301
土-302
土-303
0
1m
50.5m

第40図　ＳＴ-111（11号墓）東周溝　遺物出土状況（S=1/30）



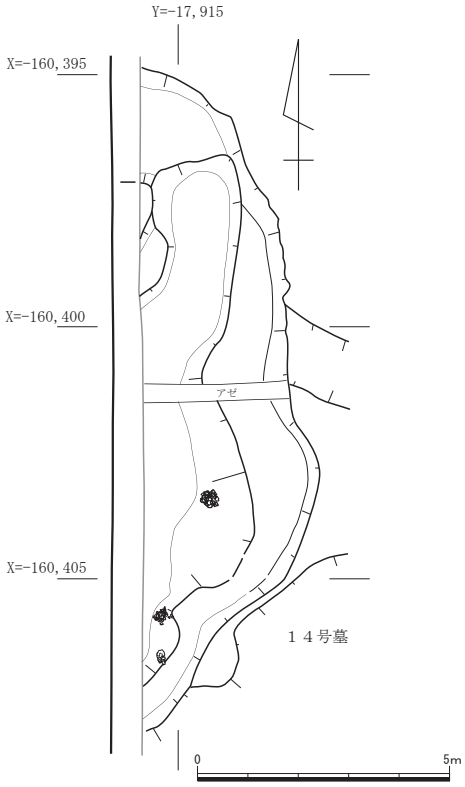
1．弥生土器　広口壷
2．弥生土器　鉢

第41図　ＳＴ-111（11号墓）出土遺物（S=1/4）

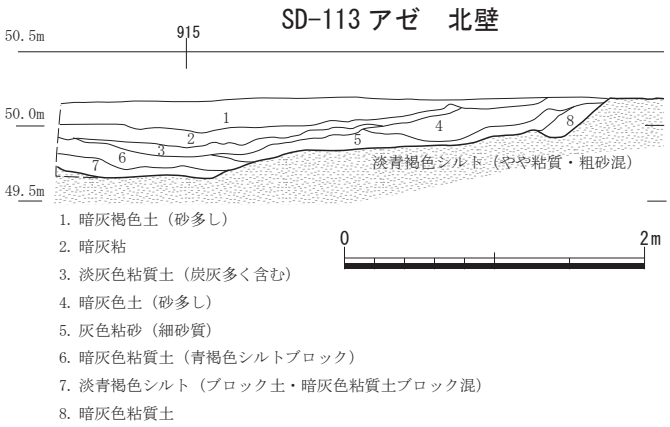


ＳＴ-112(12 号墓)　本調査区北西端で溝の一端を検出した。周囲が方形周溝墓群であることから、これも方形周溝墓の一部になると考えられる。墳丘本体は調査区外であるため、溝幅や墳丘規模は明らかでない。遺物は出土していない。

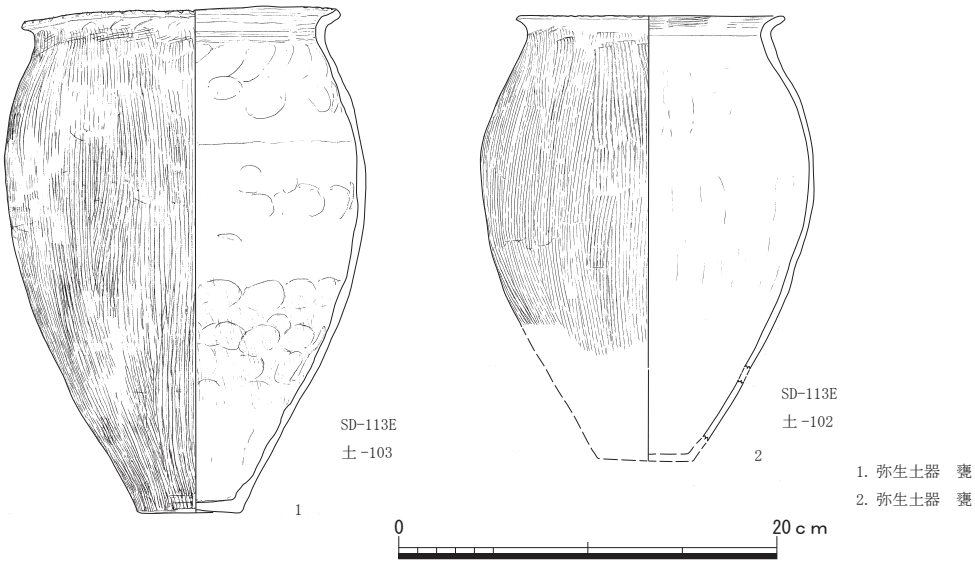
第 42 図　ＳＴ-112（12 号墓）遺構平面図（S=1/150）



ＳＴ-113(13 号墓)　本調査区西端中央で検出した方形周溝墓である。北北東－南南西に軸を持つが、東側周溝と墳丘北東端のみが検出されたのみであるため規模は明らかでない。溝中より大和第Ⅲ-2 様式の大和型甕 2 点などが出土した（第 44 図）。

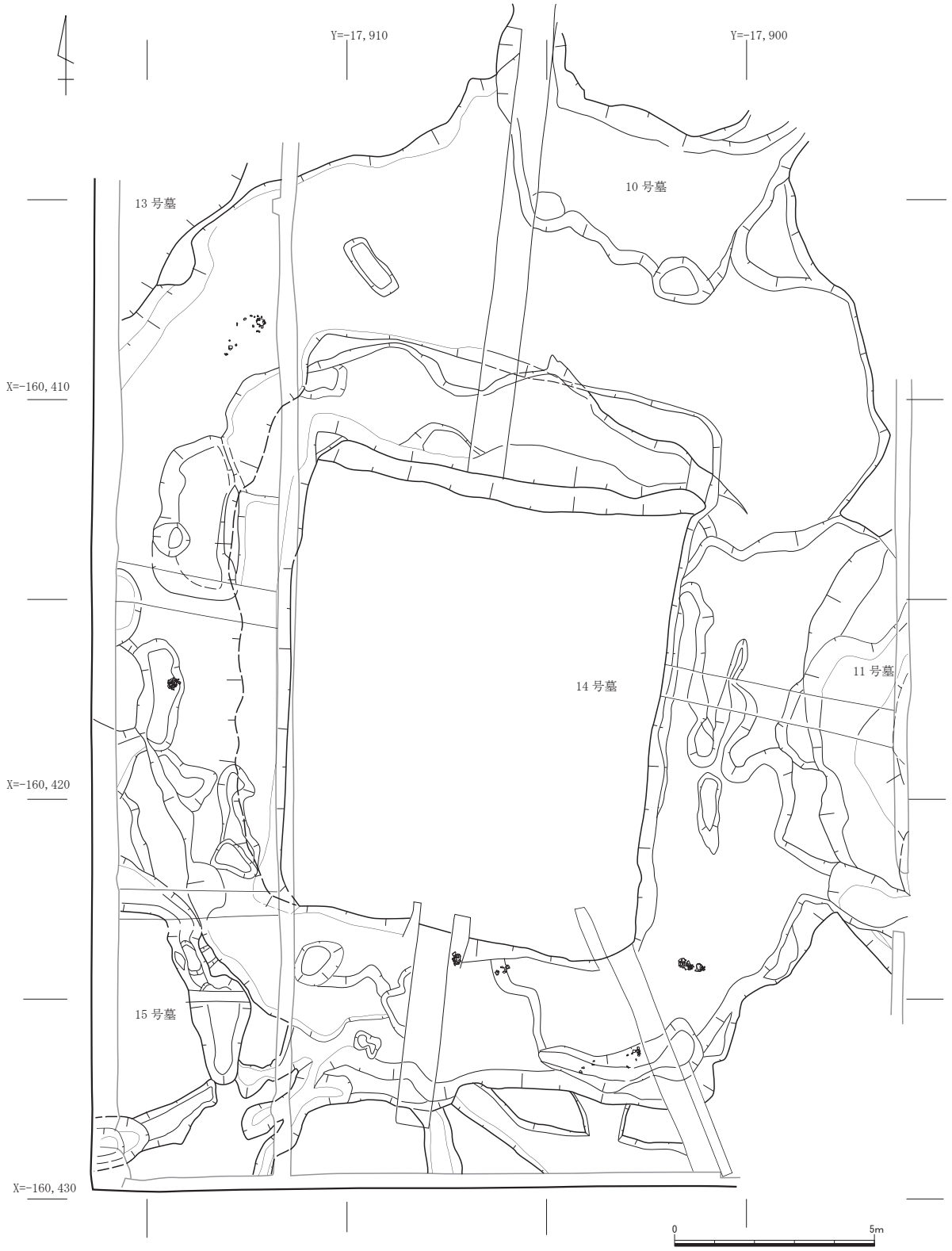


第 43 図　ＳＴ-113（13 号墓）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）



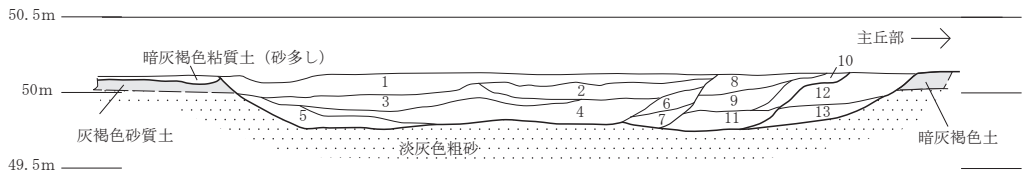
第 44 図　ＳＴ-113（13 号墓）出土遺物（S=1/4）

第45図　ＳＴ-113（13号墓）東周溝　遺物出土状況（S=1/30）



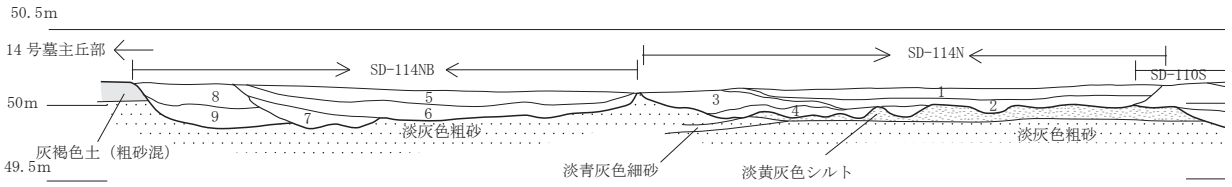
第 46 図　ＳＴ -114（14 号墓）遺構平面図（S=1/150）

ＳＴ -114(14 号墓）　本調査区南西部で検出した方形周溝墓である。ほぼ南－北に軸を持つ。北側周溝は新旧２条が確認される。南北 10.8 ｍの墳丘規模が、再掘削により南北 14.0 ｍに拡がっている。西側周溝も再掘削により東西 9.9 ｍの墳丘が 11.8 ｍに拡がっている。なお、北側に隣接する 10 号墓とは溝が一部切り合うが、10 号墓南周溝の再掘削後に 14 号墓の北側周溝の再掘削をおこなったようである。出土遺物は、南側周溝中央墳丘沿いで高坏（第 52 図 2）・壺（第 52 図 1）、南東コーナー付近で摂津系の甕（第 52 図 4）、



1．暗灰褐色粘質土
2．灰褐色土（やや粘質）
3．暗灰色粘質土（砂多し）
4．暗灰色粘砂（粗砂質）
5．暗灰粘（炭混）
6．暗灰色砂質土（やや青みがかる）
7．暗灰色砂質土・暗灰粘ブロック混
8．暗灰褐色土
9．暗灰褐色土（黄灰色粘砂ブロック）
10．黄灰色粗砂
11．暗灰色粘砂（暗灰粘ブロック混）
以下別遺構？
12．暗茶灰色砂質土
13．暗灰色砂質土（粘砂質）

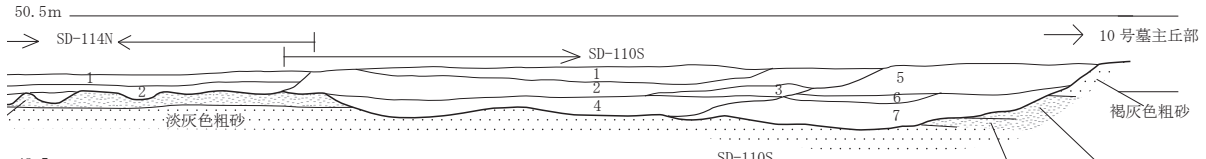
SD-114S　西壁



SD-114NB
5．暗灰褐色土
6．暗灰粘（砂多く含む）
7．灰色粘質土（淡褐色粗砂流れ込み）
8．灰褐色土淡褐色粗砂混
9．暗灰色粘質土ブロック・淡褐色粗砂混

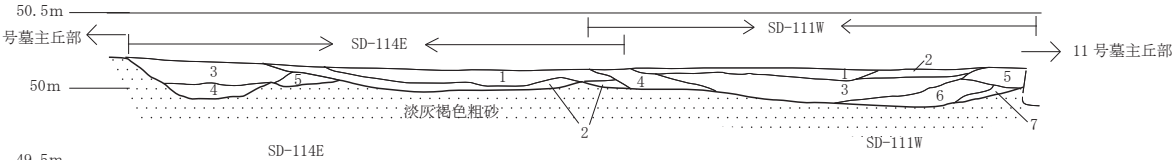
SD-114N
1．灰褐色粘質土（粗砂混）
2．暗灰色砂質土（青みがかる）
3．暗灰色砂質土（暗灰粘混）
4．淡黄灰色シルト（暗灰粘ブロック混）

SD-114N　西壁



SD-110S
1．暗褐色土（砂多し）
2．暗灰褐色土（砂多し）
3．暗灰色砂質土
4．暗灰色粘質土（粗砂多し）
5．暗灰褐色砂質土
6．暗灰色粘砂
7．茶灰色シルト（暗灰粘のブロック土混）

SD-110S　西壁



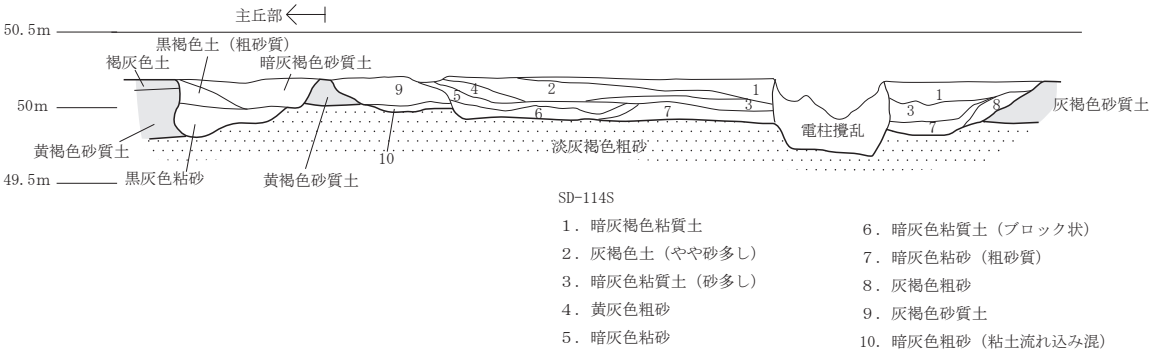
SD-114E
1．暗灰色土（砂多し、やや粘質）
2．暗灰色砂質土
3．暗灰褐色砂質土
4．暗灰色粘質土（ブロック状・茶灰色粗砂混）

SD-111W
1．暗灰褐色粘質土
2．暗灰褐色土
3．暗灰色粘質土
4．暗灰色土
5．暗灰褐色砂質土
6．暗灰色砂質土
7．灰褐色粗砂

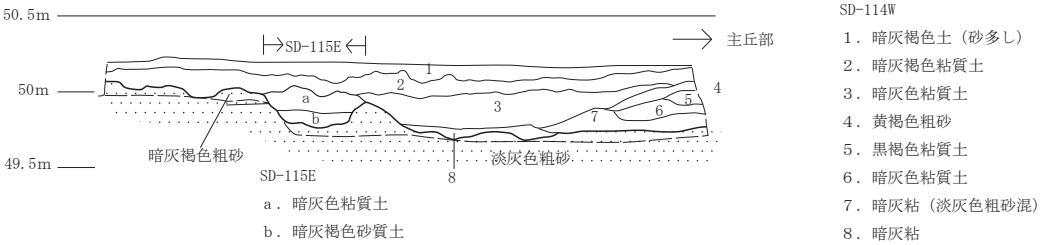
SD-111W・SD-114E　北壁

0　2m

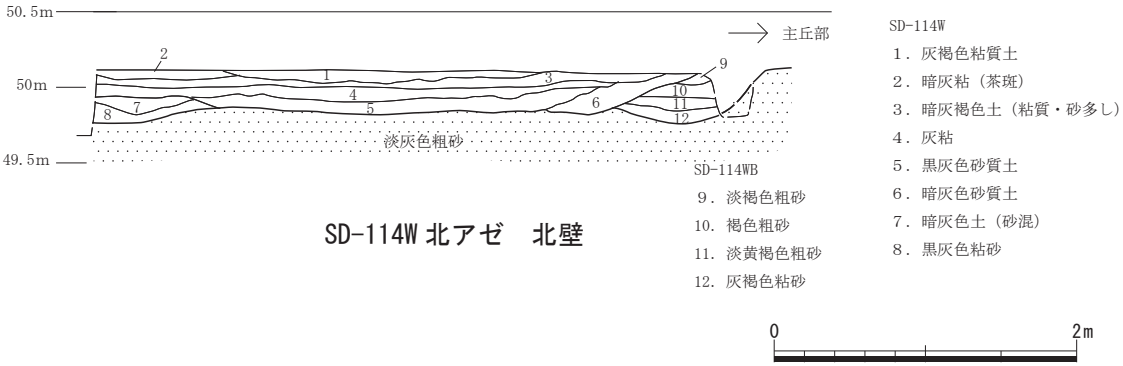
第 47 図　ＳＴ -114（14 号墓）ほか層序（１）(S=1/50)



SD-114S 東アゼ　東壁



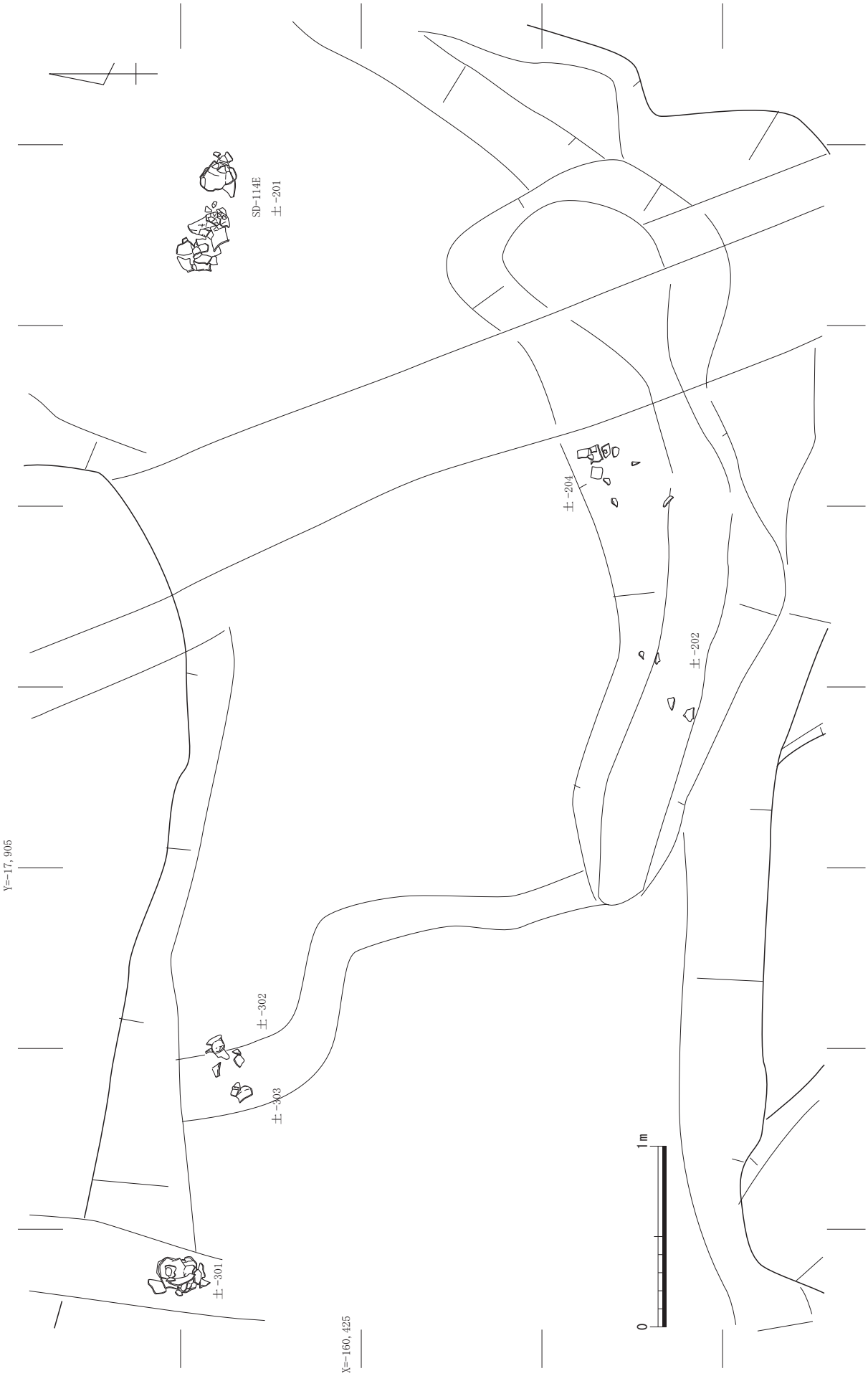
SD-114W 南アゼ　北壁



SD-114W 北アゼ　北壁

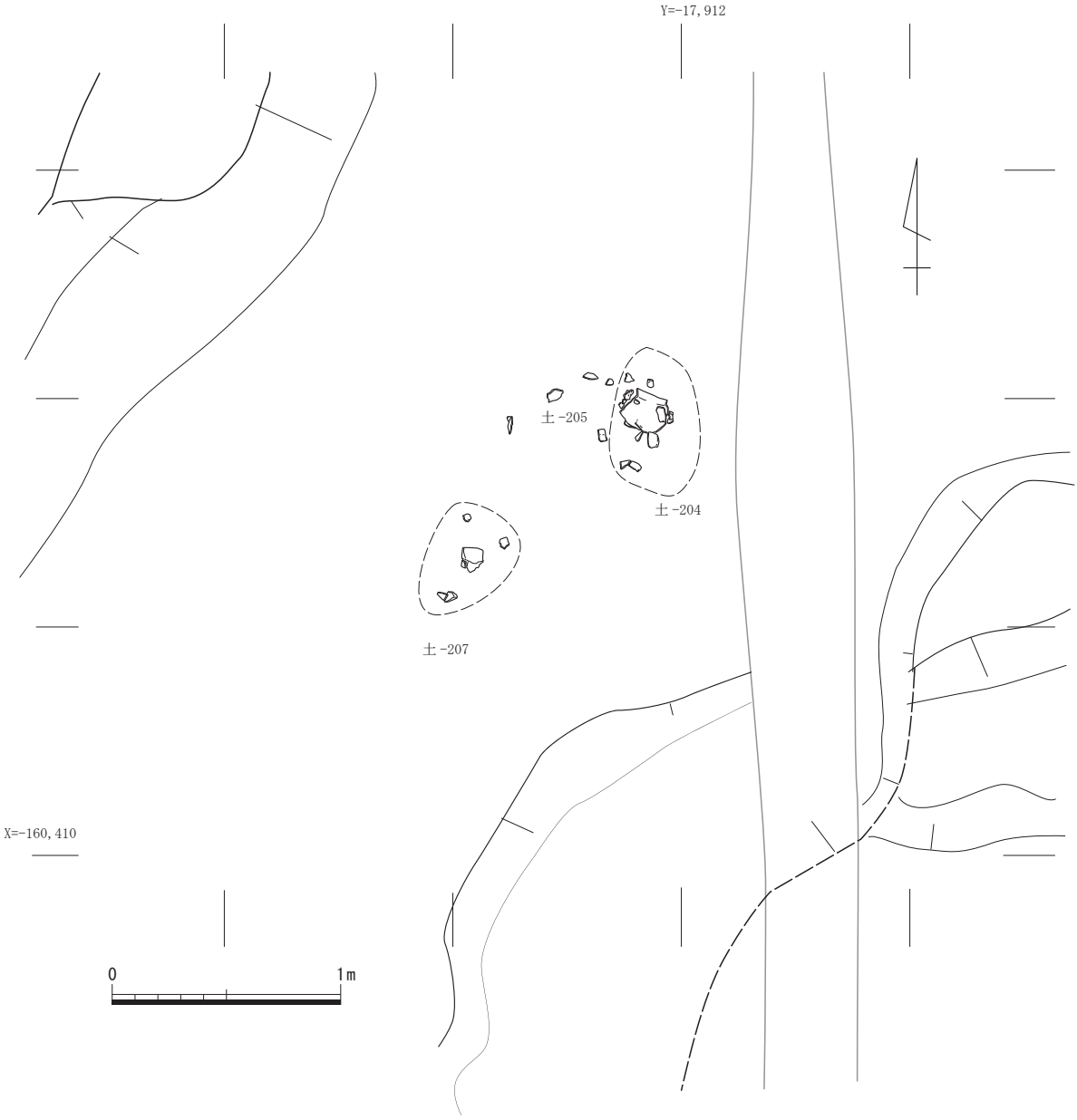
第 48 図　ＳＴ -114（14 号墓）層序（２）(S=1/50)

西側周溝中央付近で大和型甕（第 52 図 3)、北東コーナー付近で瀬戸内系の甕（第 52 図 5）などが出土している。大和第Ⅲ様式後半の遺構であろう。なお、溝中から縄文土器とみられる小片が出土している（第 52 図 6)。

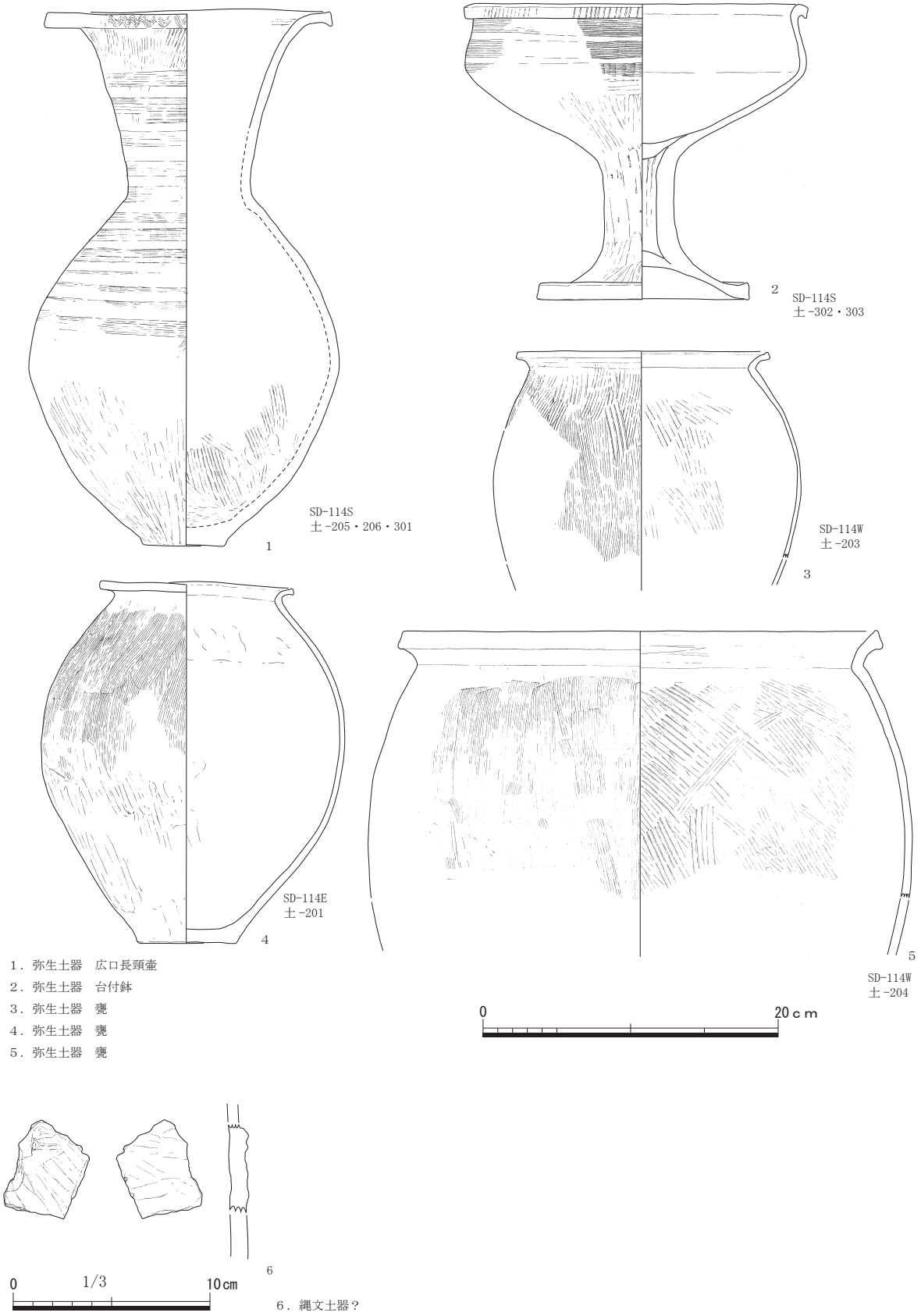


第 49 図　ＳＴ -114（14 号墓）南周溝　遺物出土状況（S=1/30）

第50図　ＳＴ-114（14号墓）西周溝　遺物出土状況（S=1/30）



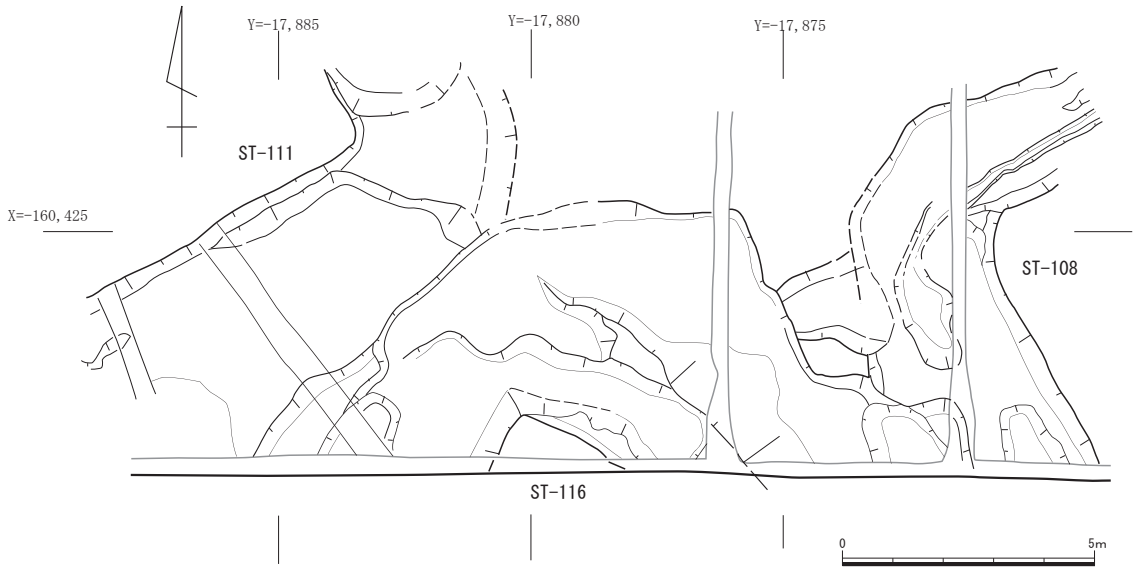
第51図　ＳＴ-114（14号墓）西周溝北端　遺物出土状況（S=1/30）



1．弥生土器　広口長頸壷
2．弥生土器　台付鉢
3．弥生土器　甕
4．弥生土器　甕
5．弥生土器　甕

6．縄文土器？

第52図　ＳＴ-114（14号墓）出土遺物（S=1/4）



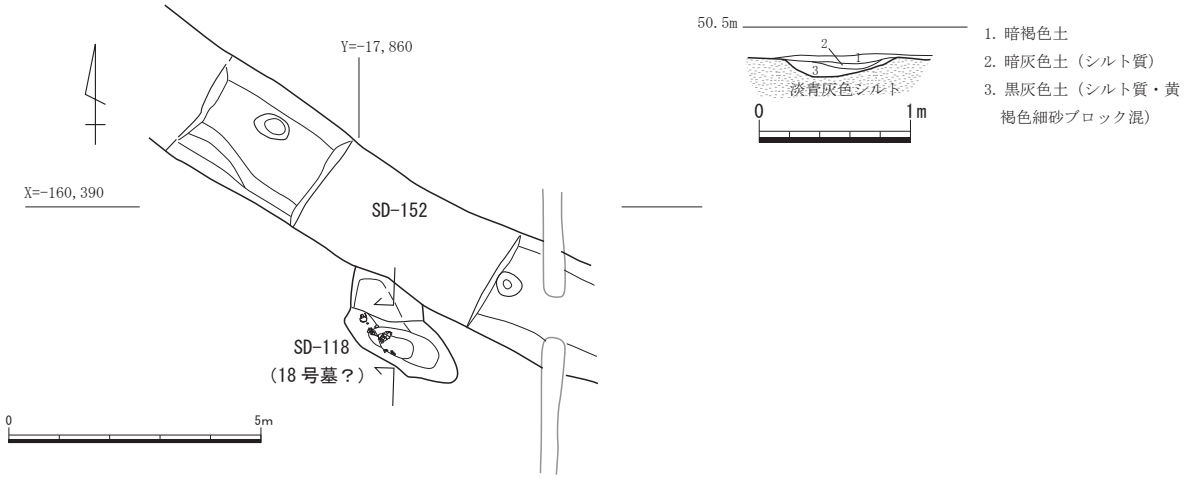
第 53 図　ＳＴ -116（16 号墓）遺構平面図（S=1/150）

ＳＴ -115(15 号墓）　14 号墓の南西に接する小規模な方形周溝墓である。北北西－南南東に軸を持つ。西半が調査区外となるため正確な規模は明らかでないが、南北 5.2 ｍを測る。

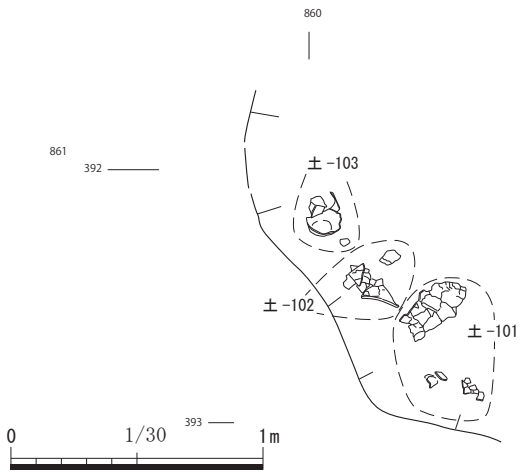
ＳＴ -116(16 号墓）　11 号墓の南側で北西コーナー部のみ検出した。北北東－南南西に軸を持つ。出土遺物は極めて少ないが、大和第Ⅲ様式の鉢小片が 1 点出土している。

ＳＴ -117(17 号墓）　14 号墓の南に接する小規模な方形周溝墓である。南半が調査区外となるため正確な規模は明らかでないが、東西 4 ｍを測る。なお、北西コーナー付近は試掘調査時の排水溝の影響不明瞭となっている。

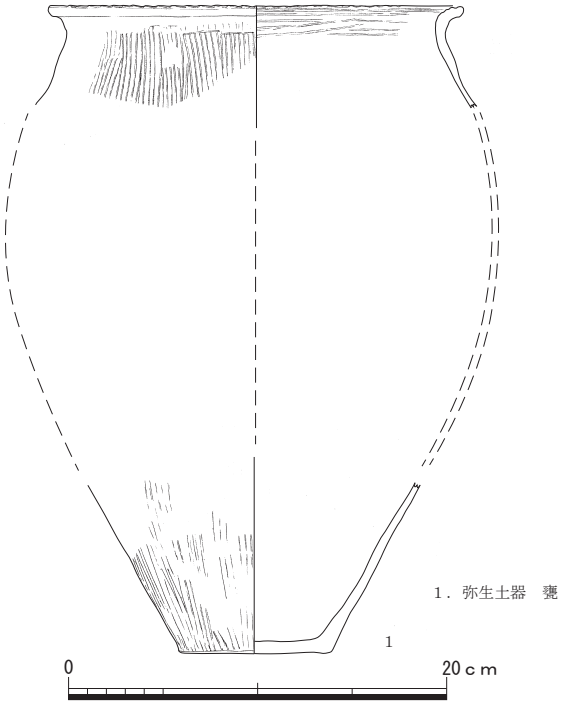
ＳＤ -118(18 号墓）　2 号墓の北側、後述するＳＤ -152 南肩で検出した溝である。幅 1.4 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。大和型甕 1 点が出土しており、周辺の遺構との関係からこの溝も方形周溝墓の一部とみられる。ＳＤ -152 よりも墓域が北東側に拡がらないとみられることから、ＳＤ -118 は 18 号墓の北東側を区画する溝となると考えられる。



第 54 図　ＳＤ -118（18 号墓？）遺構平面図（S=1/150）及び層序（S=1/50）

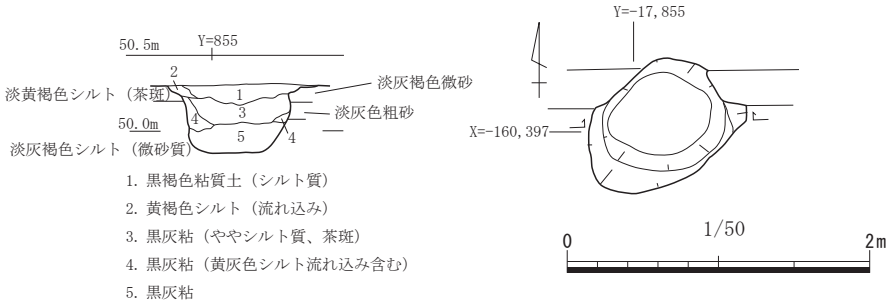


第55図　ＳＤ-118遺物出土状況（S=1/30）



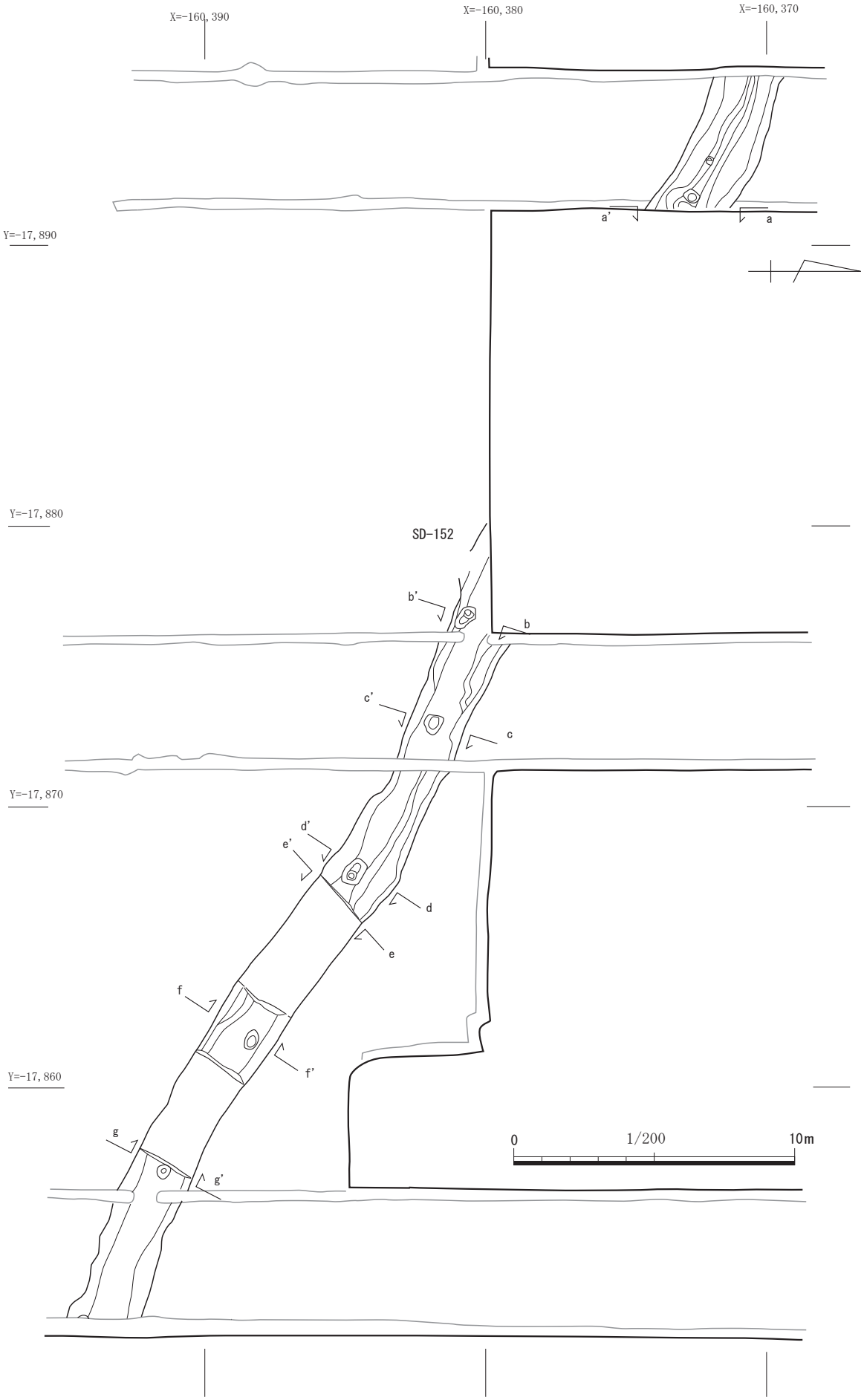
第56図　ＳＤ-118出土遺物（S=1/4）

ＳＫ－102　調査区東端の２号墓北側で検出した小土坑である。直径約0.9ｍ、深さ0.4ｍを測る。大和第Ⅲ様式の甕１点が出土している。

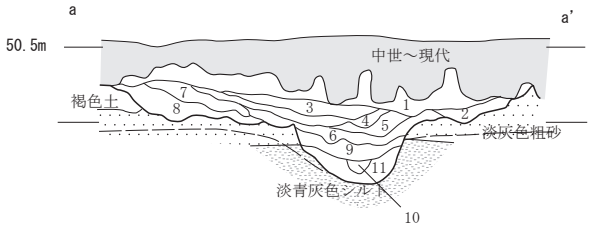


第57図　ＳＫ-102遺構平面図及び層序（S=1/50）

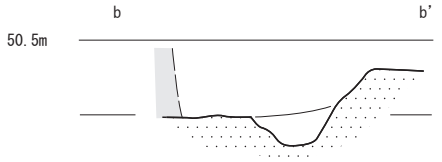
ＳＤ-152　本調査区北部で検出した西北西－東南東方向の溝である。幅2.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。弥生時代中期頃の遺物が少量出土しているが、詳細な時期は明らかでない。この溝以北では方形周溝墓が検出できなかったことから、墓域を区画する溝としての位置づけが考えられる。なお、溝底面で６ｍ前後の間隔をおいて７基のピットを検出している。規模は直径0.7ｍ前後、深さ0.3ｍの楕円形のものが中心だが、最大のもので長軸１ｍ・短軸0.7ｍ・溝底からの深さ0.5ｍとなっている。溝底面から掘り込まれているとみられることから、溝掘削当初から墓域の結界を表象するような柱状のものが樹立されていた可能性が考えられる。

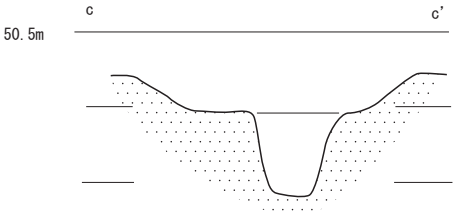


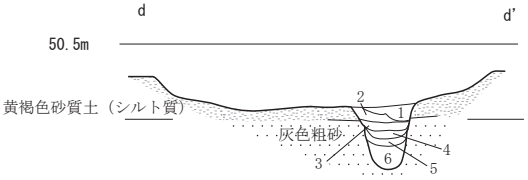
第 58 図　ＳＤ -152 遺構平面図（S=1/200）



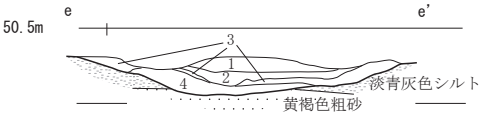
1. 褐色土（砂多し）
2. 黒灰色砂質土
3. 暗灰褐色土
4. 茶灰色粘砂
5. 暗灰褐色土
6. 暗灰色粘砂（細砂質）
7. 褐色土
8. 暗灰色粘質土（砂多し）
9. 暗灰粘
10. 暗灰粘（ソフト）
11. 黒粘



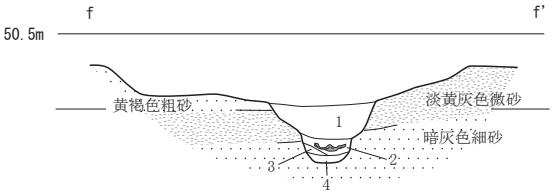




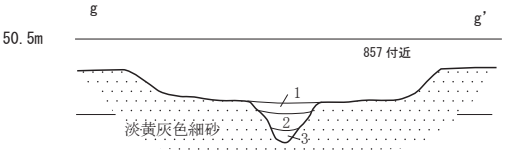
1. 淡灰褐色粗砂（シルト質）
2. 暗灰色粘質土（粗砂混）
3. 暗灰色粘質土（微砂混）
4. 暗灰色粗砂
5. 黒灰粘（砂混）
6. 淡灰色粗砂（淡灰粘ブロック混）



1. 暗褐色砂質土
2. 暗灰色粘質土（砂混）
3. 灰褐色粗砂
4. 暗灰色粘砂

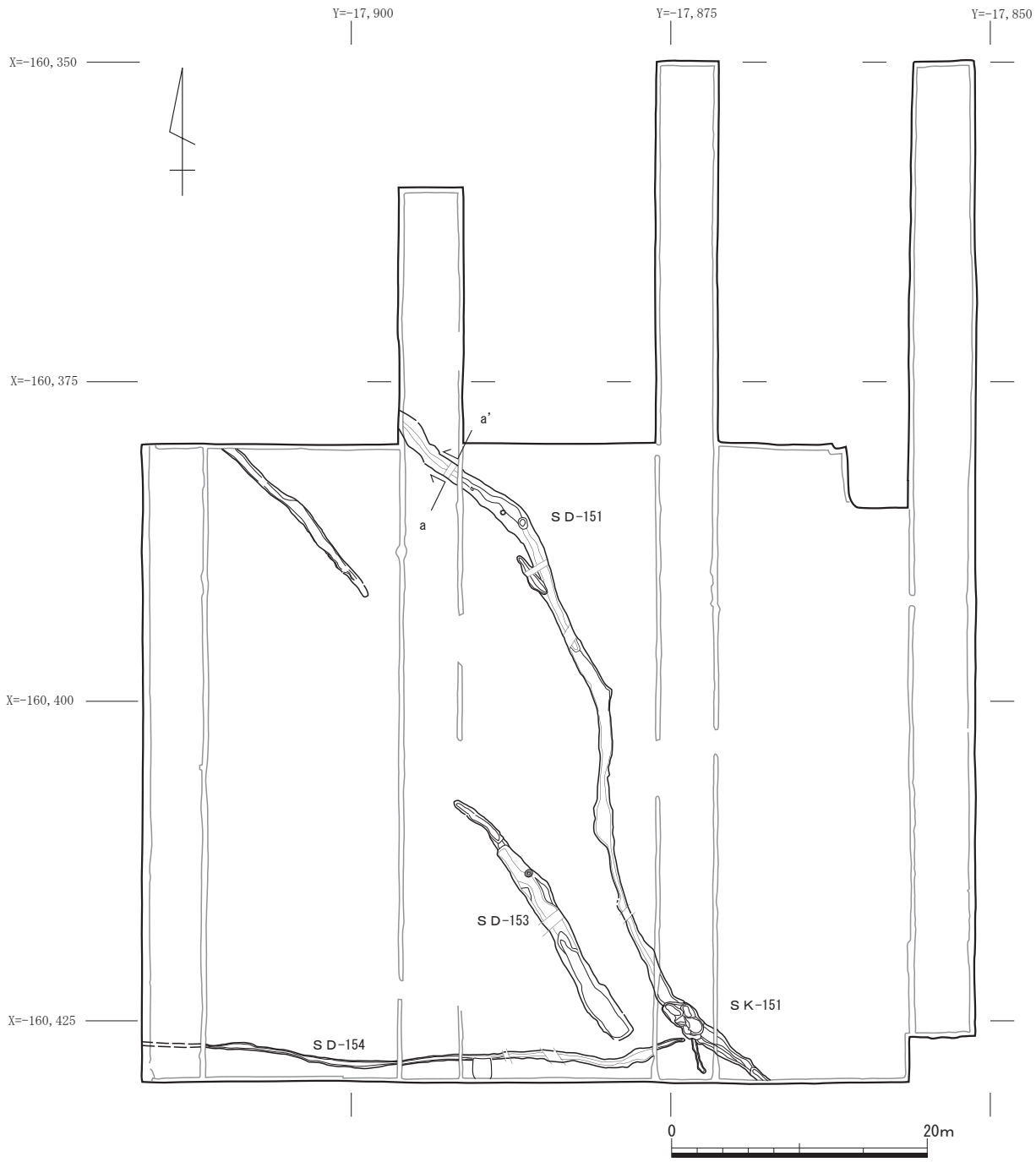


1. 暗灰色粘質土
2. 暗灰粘（植物質のものが腐食したとみられる鉄分凝集部あり）
3. 暗黄褐色砂質土
4. 暗灰粘



1. 黒灰色土（暗灰色砂質土混）
2. 黒灰色土
3. 黒褐色粘質土

第59図　ＳＤ-152層序（S=1/50）



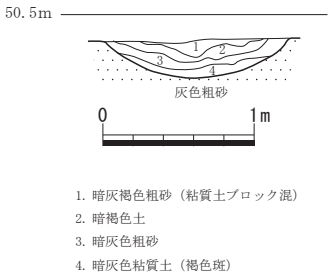
第 60 図　弥生時代後期の遺構（S=1/500）

弥生時代後期～庄内期の遺構

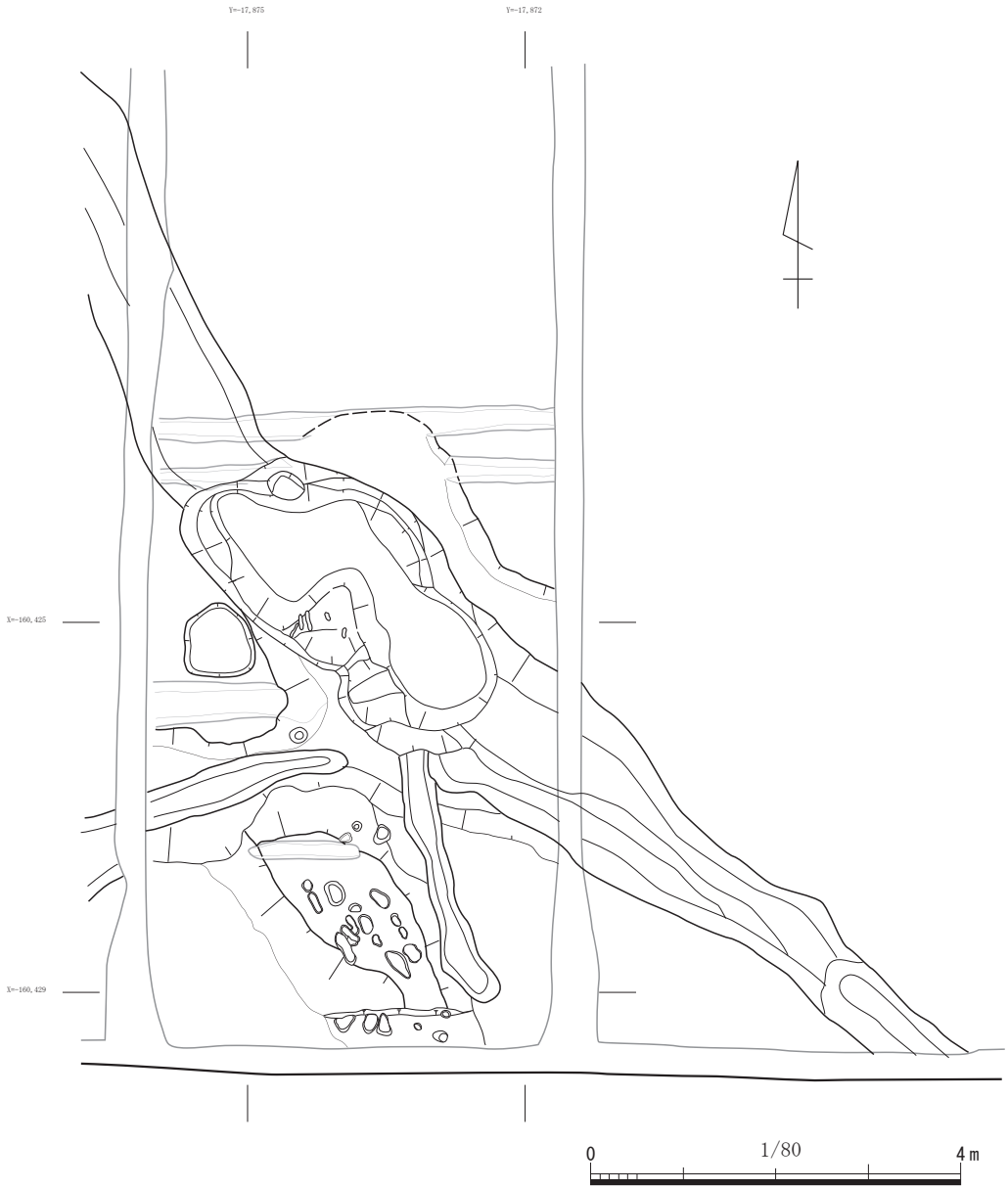
ＳＤ－151　調査区中央で検出した、北北西－南南東方向の溝である。幅 0.6 ～ 2.0 m、深さ 0.05 ～ 0.25 m を測る。詳細な時期は明らかでないが、弥生時代後期頃の遺物も含まれる。下層は粗砂で、上層は灰色粘質土で埋没する。

ＳＤ－153　11 号墓の東辺に沿って北北西－南南東にのびる溝である。幅は 0.5 m～ 1.2 m で、深さ 0.2 m を測る。庄内期の遺物が出土している。

ＳＤ－154　調査区南端を東西に横断する小溝である。幅約



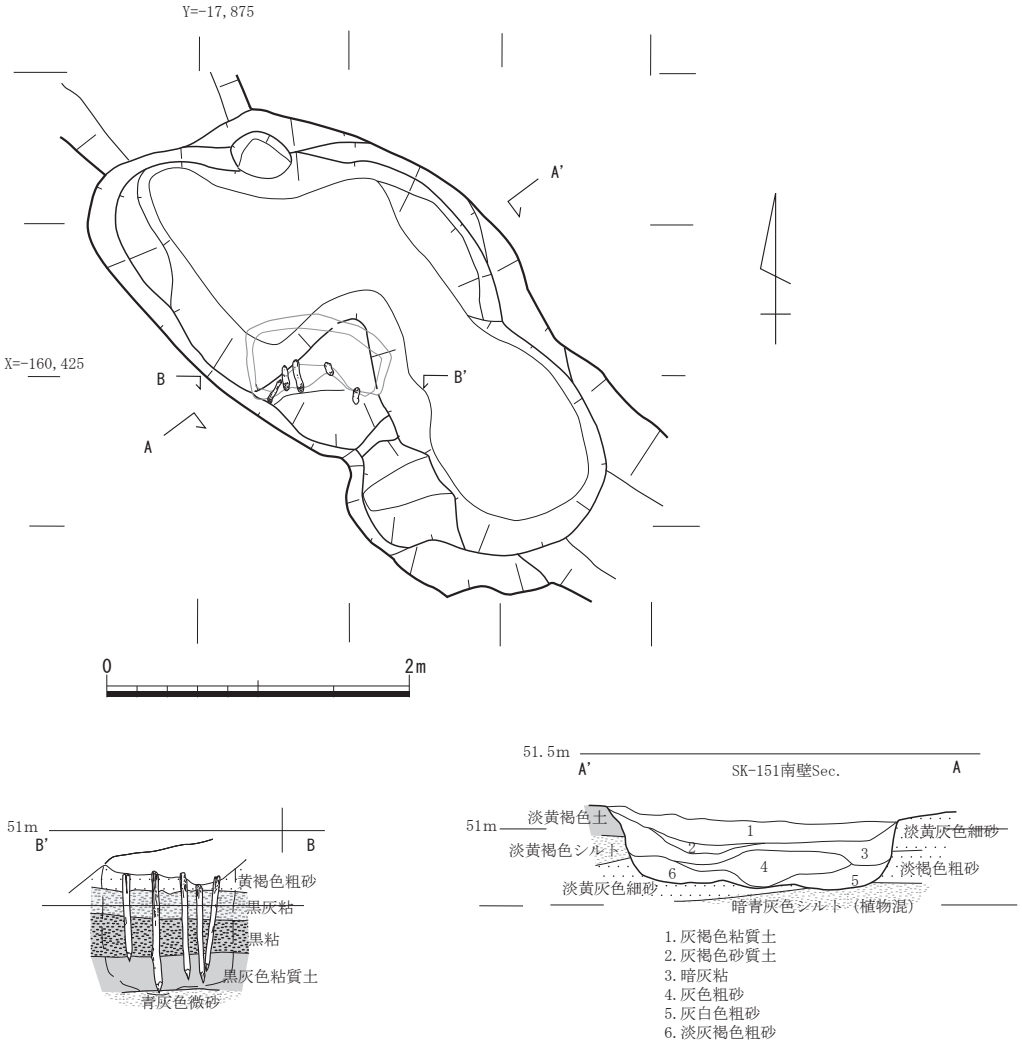
第 61 図　ＳＤ -151 層序（S=1/50）



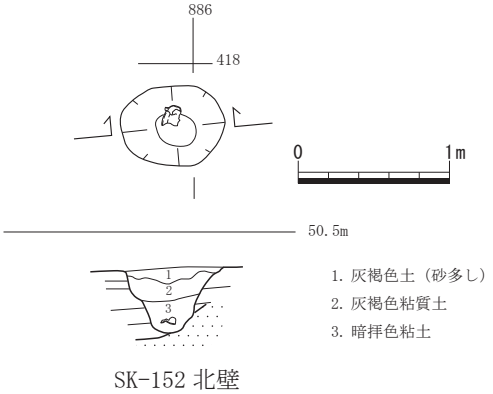
第62図　ＳＫ-151とその周辺（S=1/80）

0.2～0.4ｍ、深さ0.1ｍ。粗砂により埋没する。東端はＳＤ－151と合流している。弥生時代後期末～庄内期の遺物が出土しているものの、詳細な時期は明らかでない。

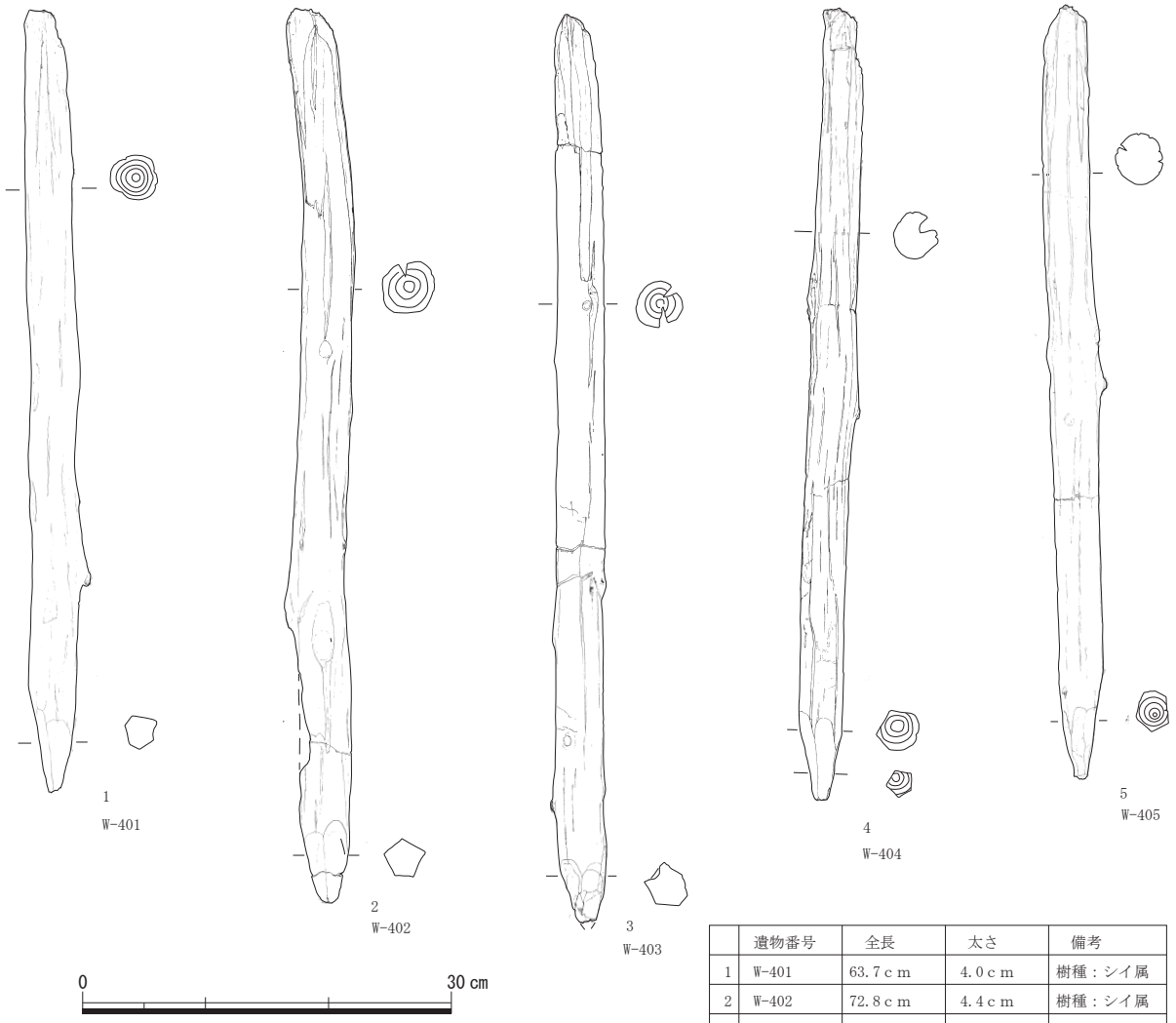
ＳＫ－151　本調査区南側、ＳＤ－151内で検出した土坑である。ＳＤ－151完掘の過程で検出したため、ＳＤ－151との切り合い関係は明らかでない。平面形は瓢箪形に近い楕円形で、長軸3.7ｍ、短軸2.0ｍ、深さ0.6ｍを測る。括れ部付近の南西肩では、５本の杭列を検出した。杭は直径４ｃｍ前後の丸太杭で、全長63～74ｃｍが残存する。樹種同定をおこなった結果、いずれもシイ属との結果を得た。杭はベースの黒色粘土層内に残存し、土坑埋土部分では腐食が進行したためか残存を確認できなかった。ＳＤ－151はこの土坑以南で二股に分かれている。ＳＤ－151に伴う分水施設となる可能性が高い。遺物は僅少であるが、弥生時代後期末頃の広口壷片（第66図１）等が出土した。



第 63 図　ＳＫ -151 遺構平面図及び層序（S=1/50）



第 64 図　ＳＫ -152 遺構平面図及び層序（S=1/50）



	遺物番号	全長	太さ	備考
1	W-401	63.7ｃｍ	4.0ｃｍ	樹種：シイ属
2	W-402	72.8ｃｍ	4.4ｃｍ	樹種：シイ属
3	W-403	73.9ｃｍ	4.0ｃｍ	樹種：シイ属
4	W-404	64.5ｃｍ	3.8ｃｍ	樹種：シイ属
5	W-405	63.0ｃｍ	4.1ｃｍ	樹種：シイ属

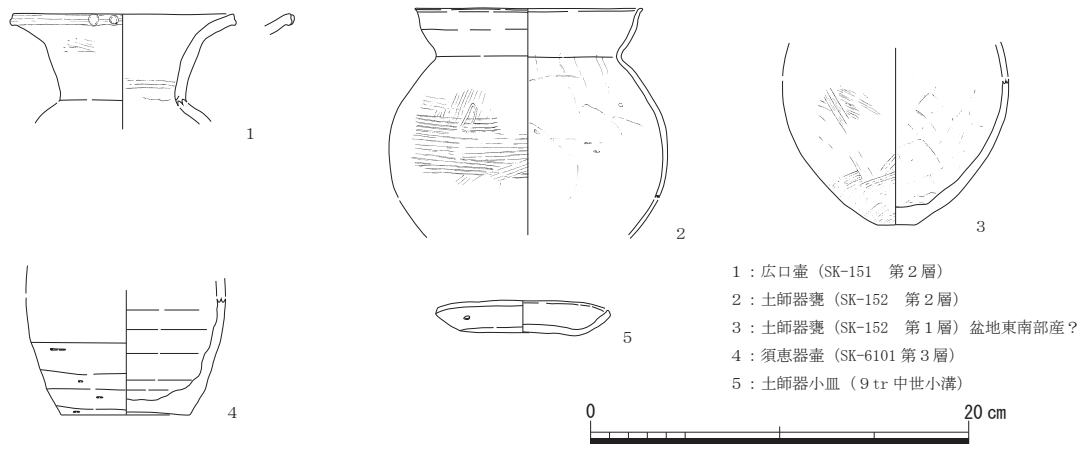
第65図　ＳＫ-151出土木製品（S=1/6）

古墳時代前期の遺構

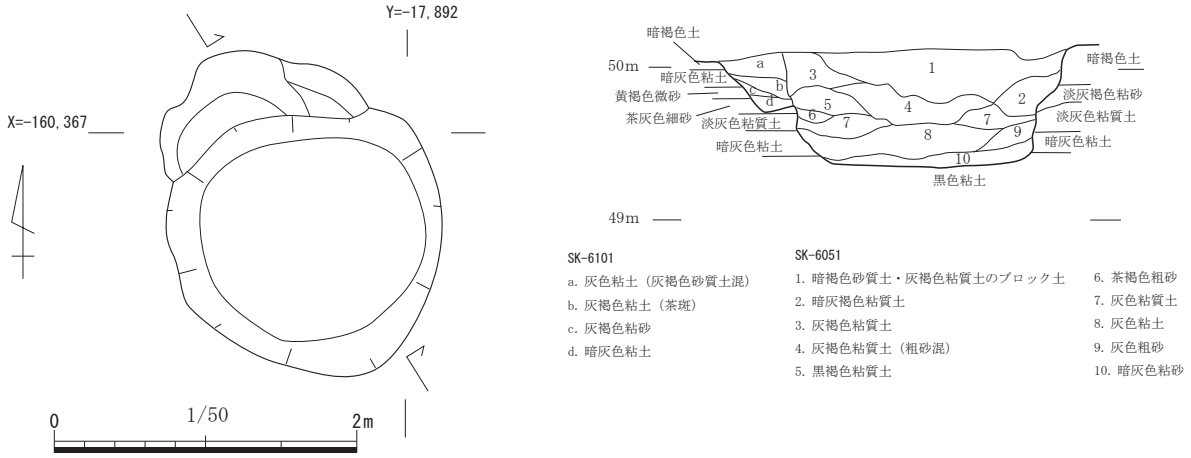
ＳＫ-152　調査区中央南側、ＳＤ－153上面で検出した小土坑である。直径0.5ｍ、深さ0.45ｍを測る。下層から布留系の甕１点が出土した（第66図２）。また、上層から盆地東南部産の可能性がある庄内系の甕が出土した（第66図３）。古墳時代初頭の遺構とみられる。

古代の遺構

ＳＫ-6101　試掘第６トレンチ北側で検出した土坑である。推定径1.4ｍ、深さ0.4ｍを測る。大半がＳＫ－6051により失われている。須恵器壺１点が出土している（第66図４）。遺物より、平安時代頃の遺構とみられる。



第 66 図　弥生時代末～中世遺構　出土遺物（S=1/4）



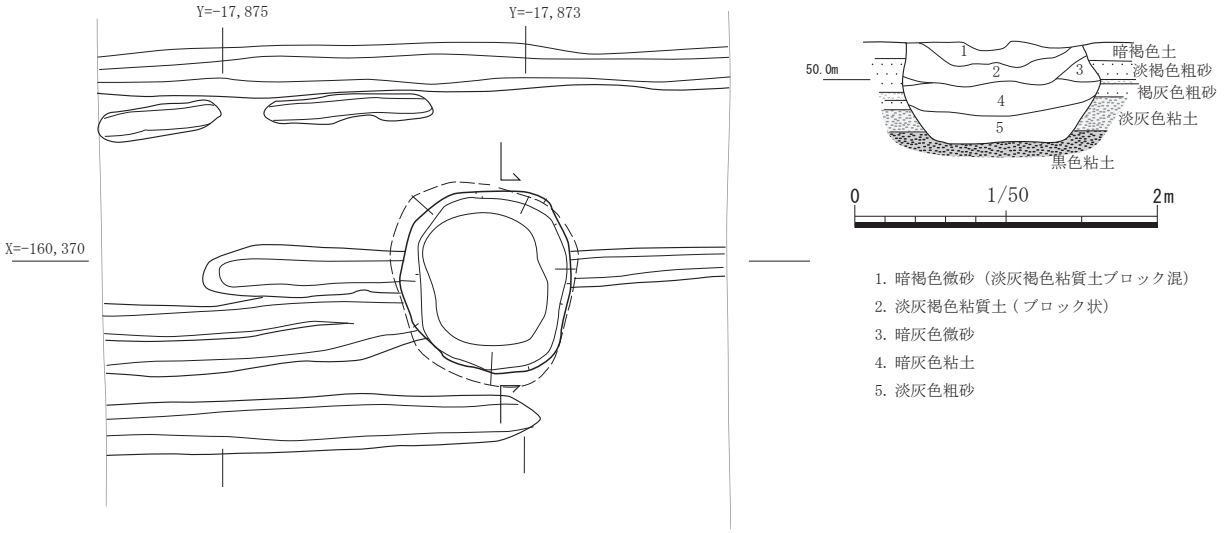
第 67 図　ＳＫ -6051・6101 遺構平面図及び層序（S=1/50）

中・近世の遺構

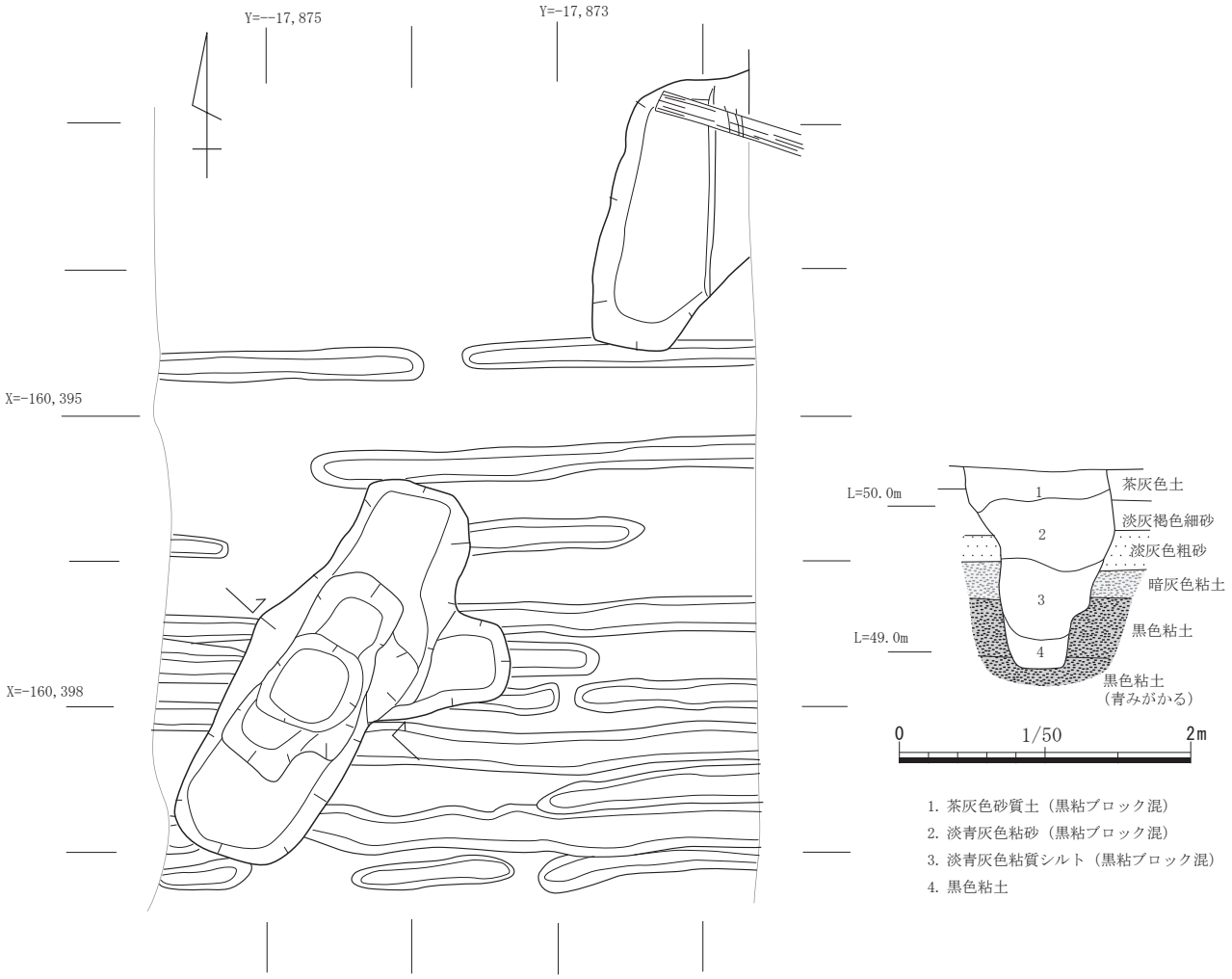
小溝群　灰色粘質土を埋土とする小溝である。幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。調査地北半では南北方向のものが数条みられるが、本調査区では全てが東西方向の溝となっている。遺物には、瓦器・土師器がある。第 66 図５の土師皿は６号墓周溝上で確認した小溝（試掘第６・７トレンチ間に位置し、便宜上第９トレンチとする）から出土した。この遺物などから、小溝群の大半は鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＫ－ 4051　第４トレンチ北側で検出した円形の井戸である。直径 1.2 m、深さ 0.7 mを測る。遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、素掘小溝との関係から、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ－ 6051　第６トレンチ北側で検出した円形の井戸である。直径 1.8 m、深さ 0.8 mを測る。遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、素掘小溝との関係から、中世の遺構と考えられる。



第 68 図　ＳＫ -4051 遺構平面図及び層序（S=1/50）



第 69 図　ＳＫ -4001 遺構平面図及び層序（S=1/50）

第 70 図　南半調査区の遺構（中世以降）（S=1/500）

近現代の遺構

ＳＫ -4001　第４トレンチ中央南で検出した電柱設置用の穴である。平面楕円形で、長軸 2.8 ｍ、幅１ｍ、中央が円形で一段深くなり、深さ 1.4 ｍを測る。「キタノ　６　Ｎ４」と記された樹脂製プレートが出土した。隣接する土坑には、ワイヤーの巻きつけられた横木が埋められていた。電柱の控えである可能性がある。なお、平面図に明示していないが、14 号墓南東側周溝内でも電柱跡とみられる土坑１基を確認している（第 48 図参照）。

Ⅲ．まとめ

１．遺跡の変遷について

調査の結果、縄文時代～近代に至る遺構・遺物を確認した。ここでは本遺跡の時期的な変遷をまとめる。

（１）縄文時代～弥生時代中期初頭

調査では、縄文時代後期～晩期頃の土器片、弥生時代前期～中期初頭の土器片を複数確認した。当該時期の明確な遺構は確認していないが、本調査区周辺を生活圏とする集落が存在した可能性が考えられる。

（２）弥生時代中期中頃

本調査区の南半には、18 基の方形周溝墓群が拡がっていた。遺物から想定される築造期間は大和第Ⅲ -1 ～Ⅲ -3 様式頃である。方形周溝墓群の詳細については後述する。

墓域を区画する溝を挟んだ調査区北半は、弥生時代を通じて河跡を含む落ち込み状の地形であったと考えらえる。この地形は最終的に弥生時代後期頃の土器を含む砂層で埋没するとみられる。

（３）弥生時代後期～古墳時代前期

調査区南半では、周溝墓群に重複する形で弥生時代後期頃とみられる溝と土坑が掘削されていた。これらの遺構は本来明褐色粘質土層の上面で検出される遺構群と考えているが、この明褐色粘質土層の上面では足跡状の窪みや畦状の高まりを検出しており、水田に関わるものであった可能性が考えられる。溝は、弥生時代中期中頃の方形周溝墓周溝跡に重複して掘削されていることから、弥生時代後期の時点で窪みが残っていた可能性も考えられる。なお、本遺跡の南側１ｋｍの阪手遺跡では、弥生時代後期（第１次調査）と古墳時代前期（第６次調査）の堰を伴う溝を検出しており、水田に伴う水路と堰である可能性が考えられる。同様に柿ノ森遺跡第２次調査でも弥生時代後期末頃の溝（河跡）と杭列を確認している。こちらも同様に堰を伴う水田の水路である可能性がある。これらの状況から、弥生時代後期末～古墳時代前期にかけて、現在の大字阪手周辺には水田域が拡がっていた可能性が考えられる。

なお、古墳時代前期初頭頃の土坑１基は、周囲に集落関連遺構がみられず、遺物量も僅少であったことから、仮に集落関連遺構であったとしても極めて小さい単位の居住域であると考えられる。あるいは灌漑用に掘削された井戸のような役割であった可能性もある。

（４）古代～近世

調査区全体が耕地となるとみられる。このうち、調査区北西部の第５トレンチでは、北北西－南南東方向の小溝２条を確認しており、条里制地割施行以前の耕作に伴う小溝群となる可能性が考えられる。平安時代頃には土坑１基を確認しているが、灌漑に関わるものである可能性がある。鎌倉時代以降は調査地全体に東西方向を主とする小溝群が拡がることから、現代に至るまで耕地としての土地利用が続いたと考えられる。

２．弥生時代中期の方形周溝墓群について

（１）墓域の区画と墓群の構造

今回検出した方形周溝墓群の北東側で、西北西－東南東方向の溝 SD-152 を検出した。この溝と周溝墓群との同時期性については、溝出土遺物が僅少であったことから即断することができないが、周溝墓群のうち東側のグループがこの溝に方向を規定されているとみられることから、墓域を区画する意図をもって掘削された溝である可能性が高い。溝底にはピットが点々と存在するが、これは集落に伴う溝にみられない特徴で、墓域を示すような柱状の構造物が存在した可能性を考える必要がある。

方形周溝墓群の群構成について先行研究に倣って周溝墓の主軸をもとに検討する。阪手東遺跡の場合、北東－南西方向を基調とする東側の一群と、南北方向を基調とする西側の一群に分けられる。さらに細かくみると、ＳＴ-101・102・103・105・106・107 の軸は上記ＳＤ-152 と同じ西北西－東南東方向である。また、ＳＴ-108・111 は北西－南東方向に軸をもち、やや上記一群と軸を異にする。南北方向を基調とする西側の一群のうち、ＳＴ-110・113・114 は若干北北東－南南西に振れるが南北に近い。ＳＴ-104・109 は北北東－南南西方向である。

主軸の違いについては、築造時期の差や単位集団の差などがその原因として考えられることが多い。しかし、本遺跡の場合、主軸の差を時期の差として説明することは難しい。溝の再掘削が複数の墓で認められることから、各周溝墓は維持されつつ複数回の埋葬に供されたとみられる。そのため、周溝墓の溝はすぐには埋没せず、一部の溝は窪みとなって弥生時代末頃まで残っていたようである。本遺跡の周溝墓群の景観は基本的には同時併存的なものであったとみてもよいだろう。

集団の差という説明については、本遺跡においては主体部を検出することができなかったためこれを積極的に検討するだけの材料に欠ける。

弥生時代の社会において、方位に対する意識がどれだけ普及していたかは未知数である。しかし、近畿地方で検出されている弥生時代の大形建物のうち、座標北より東へ７度前後振った方位を指向するものが数例みられ、「弥生方位」の存在を指摘する意見も出ている。本遺跡の ST-110・ST-113・ST-114 もこの軸に近い方位である。墓域全体が把握できていない現状では推測にすぎないが、主軸設定に際して北東側の一群では地形的制約が優先され、西側の一群では南北方向の軸を指向する意識が優先された可能性がある。そして、主軸の違いは、集団内のグループ差を反映している可能性もあるが、単に墓群内での立地条件の違いを反映しているにすぎない、という可能性も考える必要があろう。

（２）方形周溝墓の「再掘削」「拡張」について

今回検出した方形周溝墓群のうち、ST-106 南西側周溝、ST-108 北側周溝で再掘削がおこなわれていることを断面観察等で確認した。また、再掘削というより、溝を当初の位置から大きく外側に変更して、墳丘の「拡張」を行っているものが３例みられた。ST-107 では、当初の北東側周溝ＳＤ-107NB がブロック土で埋没し、墳丘を大きく北東側に拡張する形でＳＤ-107N とＳＤ-107E 北東半・ＳＤ-107W 北東半が掘削される。この拡張部分の溝は、幅・深さとも当初の溝より規模が大きくなる。ＳＴ-114 は、北側周溝が一回り大きくな

る形で再掘削をおこなう。また、西側周溝も当初の溝肩より若干西側に位置がずれる。

方形周溝墓の「拡張」については、他の遺跡でも指摘されている。本事例のような平面プランに顕れた「拡張」だけでなく、埋葬の度に新たな盛り土を行うことで立体的に「拡張」している事例も報告されている。

大阪府の事例などで、主体部を新たに設ける際に周溝墓を改修することが明らかとなっている。本遺跡では埋葬主体を検出していないため、周溝墓の拡張の原因を直接明らかにすることはできないが、同様の事情で溝の再掘削や拡張をおこなったのであろう。

このような「再掘削」「拡張」は、本遺跡の方形周溝墓の性格を考える上で重要な要素である。近畿地方における弥生時代中期の方形周溝墓は、１つの区画が何世代かにわたって墓域として利用される傾向があるのかもしれない。

（３）供献土器の出土状況について

弥生時代中期の方形周溝墓への土器供献について、土橋遺跡の事例を中心に川部氏が纏めている。その中で、氏は特徴的な土器供献の形態について「直立型」「破砕集積型」「反転並置型」の３種を設定した。直立型は土器を立てて周溝墓墳丘肩あるは墳丘裾に設置したものを指す。破砕集積型は割れた土器片を人為的にまとめた状況で溝中に廃棄しているものを指す。反転並置型は、２個体の土器の口縁と底部の向きが互い違いになるように横置されたものを指す。阪手東遺跡第２次調査では、直立型・破砕集積型の事例を確認しているほか、半完形のものが溝内から横倒しの状態で出土したものもあり、このような事例も含め検討する。

阪手東遺跡第２次調査では、「直立型」として SD-107E の土 -301（鉢）・土 -303（大和型甕）・土 -304（壺？）の事例、SD-111 E の土 -301（鉢）、土 -302（壺）の２例がある。また、SD-107E 土 -307（広口長頸壺）も倒立状態で設置されていた可能性がある。SD-107E は、墳丘側肩に地山のブロック土を盛り整形している可能性があるが、このブロック層上面より土器設置のための穴を掘って鉢と大和型甕を据えている。SD-111E も同様の状況が考えられる。倒立していた SD-107E 土 -307 については黒褐色粘質土堆積上に設置された状況であり、設置の時期が若干遅れる可能性がある。なお、本遺跡では胴部穿孔はみられない。

「破砕集積型」としては、SD-114E 土 -201（甕）、SD-114 W 土 -206（甕）、SD-110N 土 -103（甕）がある。１個体分の破片が限られた範囲内にまとまって出土し、墳丘上で割れたものが転落したような散乱の仕方をしていない。また、口縁部や底部の位置関係などから、原位置にあった完形品が土圧で潰れたというような状況とも考え難い。別の場所で割れたものが纏められて廃棄されたと解釈するのが最も妥当性が高い。本遺跡の３例いずれも使用された甕であることも何らかの意味があるかもしれない。

このほか、SD-110N の壷など半完形で横転した状態で出土したものがあり、溝内に完形土器を供献した可能性がある。また、周溝内から破片状態で出土したものの多くは積極的に位置付けすることが困難であるものの、墳丘上に置かれたものが周囲に散らばるなどの状況があった可能性もあり、注意が必要である。

周辺の「直立型」の事例としては、田原本町矢部南遺跡、三宅町三河遺跡、橿原市土橋遺跡でも確認されている。川部氏のいうように、弥生時代中期の方形周溝墓における供献

のあり方の１つとして、土器を据えるという行為があったことは間違いないだろう。なお、三河遺跡や土橋遺跡等では胴部の穿孔を伴う事例がみられる。大場氏は大阪府下の事例を分析しているが、それによると周溝墓コーナー付近に土器を設置するという供献方法が抽出できるとのことである。一方、奈良盆地では周溝墓中央付近の肩に設置しているものが多い。地域差として認識できる可能性がある。

「破砕集積型」に類するものとして、矢部南遺跡では、２片に割れた高坏の坏部が重ねられた状態で出土している。阪手東遺跡のもの３例全てが甕であることと較べて性格の相違があるかもしれない。

川部氏が挙げた類型のうち、「反転並置型」のものは本遺跡では確認していない。近隣では、矢部南遺跡で大和第Ⅲ-4 様式の壺と甕が互い違いに並んで横置きされたもの、細頸壺と高坏が互い違いに横転して並ぶものの２例が、前栽遺跡で壺と甕が互い違いに横置されたものが、土橋遺跡で大和Ⅲ-4 様式の甕２点が互い違いに並んで横置されたものが知られる。いずれの事例も溝の中層付近で検出されている。

（４）方形周溝墓群で検出される小土坑の位置づけ

ＳＫ-101、ＳＫ-103 は、それぞれ７号墓、２号墓に付随する施設であった可能性がある。土坑の規模に大差がなく、いずれも下層に薄い炭灰層がある。ＳＫ-101 の底面に拡がる炭灰層の直上には紀伊産の壺底部が置かれ、土坑上位では半完形に復原できる台付鉢１点が割れた状態で出土した。ＳＫ-103 はほとんど遺物を含まなかった。遺物の有無という点では異なるが、何らかの共通する意図があったのかもしれない。

１号墓東周溝で検出した小土坑は、上記の小土坑と規模が近いものの、炭灰層はみられなかった。器高約 23 ｃｍの甕１点と生駒山西麓産とみられる壷蓋１点が半完形で出土した。蓋の直径は 9.8 ｃｍ、甕の頸部内側の直径は約 11 ｃｍで、通常の使用法としてはセット関係として成り立ち難い。

周溝墓群で検出される小土坑の性格については、小児用の埋葬施設の可能性がまず考えられる。1 号墓東周溝内土坑は土器棺とその蓋として置かれた可能性も考えられる。一方、規模的に類似するＳＫ-101、ＳＫ-103 については、直接的な埋葬遺構というよりは、下層に炭灰層がみられることから、葬送儀礼に伴って火を使う行為があったと想定することができる。煮炊きに使われた甕が割られて人為的に取りまとめられた上で廃棄されている可能性が考えられることとも関連するが、葬送儀礼に伴う饗宴のような行為がおこなわれていたのであろうか。

（５）弥生時代中期方形周溝墓群の位置付けについて

今回検出した周溝墓群は、弥生時代中期中頃（大和第Ⅲ様式）を中心とするものであった。調査地周辺では中期後半に盛期を迎える法貴寺斎宮前遺跡があるが、中期中頃には集落が存在するものの、阪手東遺跡の周溝墓群の母体としうるかどうか問題がある。なお、小阪榎木遺跡でⅢ様式後半の方形周溝墓１基が検出されており、こちらは報告者の岡田氏も法貴寺斎宮前遺跡の集落に隣接する墓域と評価している。一方、北側約１ｋｍには奈良盆地最大の拠点集落である唐古・鍵遺跡があり、本遺跡の方形周溝墓群の母体として評価できる可能性がある。

唐古・鍵遺跡では、弥生時代中期に環濠帯部分で複数の方形周溝墓を確認している。第91次調査では集落南東部の環濠間で中期前葉の方形周溝墓２～３基を検出した。また、第115次調査では集落北西部の環濠間で大和第Ⅲ-1様式頃の方形周溝墓２基を検出した。唐古・鍵遺跡では、中期前葉～中葉はじめまで環濠帯の間に墓域を形成していたとみられるが、それ以降は後期後半に至るまで集落近辺で墓域を確認していない。例外として第50次調査で中期後半の小児用壷棺を確認している程度となる。

奈良盆地での弥生時代中期中頃の方形周溝墓群の確認事例は増加しつつあり、橿原市土橋遺跡で24基、橿原市曲川遺跡で30基、大和郡山市八条北遺跡周辺で101基、奈良市柏木遺跡で18基、橿原市観音寺本馬遺跡で35基以上などが確認されている。このうち、墓域に隣接して集落域を確認している事例はみられず、土橋遺跡は西側１ｋｍの中曽司遺跡の墓域と想定されている程度である。この時期の大規模方形周溝墓群は集落域から一定の距離をもって築造されることが多かったと考えられる。

唐古・鍵遺跡の周辺では、南側1.2ｋｍの阪手東遺跡（本書）で18基、北北西700ｍの清水風遺跡第１次調査で１基（中期前半)、南西1.2ｋｍの羽子田遺跡第20次調査で４基（大和第Ⅲ様式）の方形周溝墓を確認している。清水風遺跡の事例は若干古いものの、阪手東遺跡と羽子田遺跡の事例は唐古・鍵遺跡からの距離と時期が類似する。今後の調査により集落域が新たに確認される可能性も否定できないが、基本的に唐古･鍵遺跡から1.5ｋｍ程度離れた地点で確認された方形周溝墓群は、唐古・鍵遺跡に伴うものであると考えることができる。

※（３)・(４）は清水琢哉「阪手東遺跡第２次調査における方形周溝墓の土器供献」(『みずほ』第41号　2009年５月）を一部訂正したものである。

《参考文献》

※参考文献のうち、発掘調査報告書類については紙面の都合上省略させて頂いた。

辻本宗久1987「弥生時代の墳墓祭祀について－大阪湾沿岸地域の資料を中心として－」『花園史学』第８号

大庭重信2001「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会　研究紀要』第４号　大阪市文化財協会

清水琢哉2003「阪手東遺跡第２次調査検出の方形周溝墓」『みずほ』38号　大和弥生文化の会

川部浩司2004「大和地域の弥生時代墳墓－土橋遺跡の弥生時代中期・方形周溝墓群の検討－」『地域と古文化』安永周平・岡田憲一2007「法貴寺斎宮前遺跡第７次調査・小阪榎木遺跡第３次調査」『大和を掘る25』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館

奈良県立橿原考古学研究所2017『法貴寺斎宮前遺跡・小阪榎木遺跡』奈良県文化財調査報告書173

※本報告の方形周溝墓群については、大和弥生文化の会の会員の皆様にも検討いただき、多くの有益な助言を得た。会員諸氏および藤井整氏をはじめとした参加者の皆様には厚くお礼申し上げます。

※なお、令和４・５年度に東側隣接地で第３・４次調査を実施し、その結果第２次調査地の東側に落ち込み状の地形があり、その東で弥生時代中期後半～後期とみられる方形周溝墓１基を確認している（西岡加奈子2024「阪手東遺跡第３次調査」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会年報－令和５年度－』)。本報告とは時期が異なるため、墓域の理解については変更の必要はないと思われる。

附　阪手東遺跡第２次調査　花粉分析の成果について

一般社団法人　文化財科学研究センター

１．はじめに

阪手東遺跡は、唐古・鍵遺跡の南側 1.2 ㎞に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓群が確認されている。その内７号墓、13 号墓、14 号墓の周溝について花粉分析を行い植生と環境の復原を行う。

花粉分析は、第四紀学で多く扱われ、生層序によるゾーン解析で地層を区分し、ゾーン比較によって植生や環境の変化を復原する方法である。そのため普通は湖沼などの堆積物が対象となり、堆積盆単位など比較的広域な植生・環境の復原を行う方法として用いられる。遺跡調査においては遺構内の堆積物など局地的でかつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復原もデータ比較の中で行える場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物も対象となり、その分解性も環境の指標となる。また、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸域の堆積物が分析に適さないわけではない。

２．試料

分析試料は、７号墓の SD-107E、13 号墓の SD-113、14 号墓の SD-114S より採取された試料である。以下に試料の詳細を記載する。

方形周溝墓	周溝		層序	性状
７号墓	SD-107E	南東アゼ　北東壁	1層	暗灰褐色土
			2層	暗灰色粘質土
			3層	暗灰粘
			6層	暗灰色粘質土
			9層	黒褐色土(粗砂質)
13号墓	SD-113	東側周溝	1層	暗灰褐色土(砂多し)
			3層	淡灰色粘質土(炭灰多く含む)
			5層	灰色粘砂(細砂質)
			6層	暗灰色粘質土(青褐色シルトブロック)
14号墓	SD-114S	東壁	1層	暗灰褐色粘質土
			3層	暗灰色粘質土（砂多し）
			4層	暗灰色粘砂(粗砂質)
			5層	暗灰粘(炭混)
			6層	暗灰色砂質土(やや青みがかる)
			9層	暗灰褐色土（黄灰色粘砂ブロック）

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^3 を採量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎

３）水洗処理の後、0.25㎜ の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の

エルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
８）検鏡・計数
検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE *Ci*）によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973)、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉（AP）および非樹木花粉（NAP）となるが非樹木花粉（NAP）は草本花粉として示した。

４．結果
（１）分類群
出現した分類群は、樹木花粉 27、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉 24、シダ植物胞子３形態の計 57 分類群である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉数が 50 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、１分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。
〔樹木花粉〕
マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、クサギ属
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕
クワ科－イラクサ科、マメ科、ニワトコ属－ガマズミ属
〔草本花粉〕
ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オギノツメ、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕
単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子
〔寄生虫卵〕

鞭虫卵

以下にこれの特徴を示す。

・鞭虫　*Trichuris　trichiura*

卵の大きさは、50 × 30μm でレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

（２）花粉群集の特徴

それぞれの地点において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

１）７号墓 SD-107E：１層、２層、３層、６層、９層

下位の９層では、樹木花粉が 44%、草本花粉が 29%、樹木・草本花粉が１%、シダ植物胞子が 26%を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主にコナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属が出現する。草本花粉では、ヨモギ属の出現率が高く、イネ属を含むイネ科が伴われる。６層では、樹木花粉が 52%、草本花粉が 33%、樹木・草本花粉が１%、シダ植物胞子が 14%を占める。樹木花粉では、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、スギが増加し、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属の出現率が高い。草本花粉では、ヨモギ属の出現率が高く、イネ属を含むイネ科が伴われる。３層では、樹木花粉が 51%、草本花粉が 39%、樹木･草本花粉が５%、シダ植物胞子が５%を占める。樹木花粉では、出現率の高い種は継続するが、コナラ属アカガシ亜属が増加し、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、スギは減少する。草本花粉では、イネ属を含むイネ科が増加する。２層では、樹木花粉が 32%、草本花粉が 41%、樹木・草本花粉が１%、シダ植物胞子が 26%を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、スギ、シイ属が比較的多い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科の出現率が高く、カヤツリグサ科が伴われる。１層では、樹木花粉が 33%、草本花粉が 55%、シダ植物胞子が 12%を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の出現率が高く、クリが出現する。草本花粉では、イネ科、イネ属、ヨモギ属の出現率が高く、アブラナ科、セリ亜科が伴われる。また、９層、６層、３層からガマ属－ミクリ属が検出され、６層、３層からミズアオイ属、２層からオギノツメが検出される。

２）13 号墓 SD-113：１層、３層、５層、６層

６層では､樹木花粉が 28%､草本花粉が 61%､樹木･草本花粉が３%､シダ植物胞子が８%を占める。草本花粉のヨモギ属が高率に出現し、イネ科が伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、スギが出現する。５層では、密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、コナラ属アカガシ亜属などがわずかに出現する。３層では、樹木花粉が 67%、草本花粉が 26%、樹木・草本花粉が１%、シダ植物胞子が６%を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、スギの出現率が高い。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科が低率に出現する。１層では、密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、イネ科、ヨモギ属、シイ属などがわずかに出現する。６層からオモダカ属、３層から

ミズアオイ属が検出され、１層からミズワラビが検出される。

３）14 号墓 SD-114S：１層、３層、４層、５層、６層、９層

下位の９層、６層では、密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、コナラ属アカガシ亜属、ヨモギ属などがわずかに出現する。５層、４層では、類似した出現傾向を示し、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、樹木花粉が 59％～ 49％、草本花粉が 32％～ 39％を占める。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属の出現率が高い。草本花粉では、イネ属を含むイネ科の出現率が高く、ヨモギ属が伴われる。３層、１層では、密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、イネ科、ヨモギ属がわずかに出現する。５層、４層からガマ属－ミクリ属、４層からオモダカ属、５層からミズアオイ属、１層からミズワラビが検出され、４層から鞭虫卵がわずかに検出される。

５．花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において､下位より花粉群集の特徴から植生と環境の復原を行う。なお、より詳細な環境の復原を行うために以下の要領で珪藻分析を参考に追加分析した。試料採取後、過酸化水素水を加え、加温し、水洗、濃縮させプレパラートを作成する。結果を表２、図２に示した。

１）７号墓 SD-107E：１層、２層、３層、６層、９層

分析の結果、SD-107E 下位の９層の時期には、ヨモギ属が多く、乾燥した草本の多い、築造当初の二次植生化が示される。周辺には樹木ないし森林も多く、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要素としてコナラ属コナラ亜属を構成要素とする照葉樹を主とする森林が分布する。わずかだがイネ属が検出され、周囲に水田の分布も示唆される。６層の時期になると、草本ではイネ科が増加し、下位から継続して照葉樹林が分布するが、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が増加する｡イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の多くは､尖ったり半球形を示す形態に加えまばらに粒状物や粒状突起が認められ、二次林種であるイヌガヤとみられ、草本から遷移し二次林が増加する。３層から２層にかけては、照葉樹林を構成するシイ属が減少し、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が増加する。草本ではイネ科が増加し、SD-107E が埋まる時期の植生が反映されたと考えられる。２層では、ヨモギ属が増加しやや乾燥化する。１層では、イネ属の比率が高くなり周囲の水田が拡大する。またアブラナ科の比率が高く､アブラナ科にはナタネ､ダイコンなど栽培植物が多く含まれ、これらの畑作が行われた可能性が示唆される。概ね、方形周溝墓が造られ植生が二次遷移した様相が示されたとみられる。SD107E は、下部の９層の時期から６層、３層の時期まで抽水湿性植物のガマ属－ミクリ属や虫媒花で水生抽水植物のミズアオイ属が検出され、水草が生育する浅く滞水した環境であったとみなされ、花粉密度が比較的低いのは堆積速度が速かったと推定される。２層から水生植物のオギノツメが出現し、環境は下位より継続する。珪藻分析では、９層、６層では珪藻が検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境であったか堆積速度が速かったと考えられ、３層では、珪藻密度がやや高くなり好止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira　ambigua* が卓越する。*Aulacoseira　ambigua* は、湖

沼で浮遊生活をしたり沼沢湿地の付着藻類にみられ、有機汚濁については広適応性種で、３層の時期には水深のある安定した水域であったことが示唆される。２層、１層の時期には､珪藻密度は極めて低くなり､再び珪藻の生育できない乾燥した環境か堆積速度が速かったと考えられる。

２）13 号墓 SD-113：１層、３層、５層、６層

下位の６層の時期には、陽当たりのよい乾燥した環境を好む人里雑草のヨモギ属が高率に出現し、堆積地は乾燥した環境で、周辺にはコナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属を要素とする照葉樹林が分布していた。これは、方形周溝墓が造られた当時の植生が反映されたとみなされる。５層の時期には、花粉はほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く微遺体が集積出来なかったと考えられる。コナラ属アカガシ亜属などがわずかに出現し、照葉樹林は継続して分布していたとみなされる。３層の時期には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要素とし、コナラ属コナラ亜属を構成要素とする照葉樹林が優勢に分布し、近隣にはスギ林が分布する。SD113 の土手には、イネ科、ヨモギ属をはじめ陽当たりのよい乾燥した環境を好む人里雑草が生育し、溝内はミズアオイ属やカヤツリグサ科が生育する湿地ないし浅く滞水する。１層の時期には、花粉はほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く微遺体が集積出来なかったと考えられる。珪藻分析では、下位の６層、５層で珪藻は検出されず、３層で陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica* などがわずかに出現し、１層ではほとんど検出されない。SD-113 は、下位から通して珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。

３）14 号墓 SD-114S：１層、３層、４層、５層、６層、９層

下位の９層、６層の時期には、花粉はほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く微遺体が集積出来なかったと考えられる。５層、４層の時期には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要素とし、コナラ属コナラ亜属を構成要素とする照葉樹林が優勢に分布し、近隣にはスギ林が分布する。周囲には、イネ科、ヨモギ属の陽当たりのよい乾燥した環境を好む人里雑草が生育する。５層の時期には、イボクサ、ミズアオイ属、カヤツリグサ科が出現し、溝内は湿地から浅い滞水域が分布する。また、イネ属が検出され周辺に水田の分布も示唆される。４層から鞭虫卵がわずかに検出され、密度は生活汚染程度で、近接して生活域の分布が示唆される。３層、１層の時期には、花粉はほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く微遺体が集積出来なかったと考えられる。珪藻分析では、９層、６層で珪藻はほとんど検出されず、５層では、流水不定性種の *Eunotia praerupta*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica* などがわずかに出現し、上位の４層から１層では密度が低く珪藻はほとんど検出されない。SD-114S は、５層の時期は不安定な水域と湿った程度の土壌の環境であるが、他は珪藻の生育できない不安定な環境か堆積速度が速かった可能性が考えられる。

表１　花粉分析結果

Taxa（分類群）		７号墓-SD107E　南東アゼ北東壁					13号墓-SD113　アゼ北壁				14号墓-SD114S　西壁					
Scientific name（学名）	Japanese name（和名）	1層	2層	3層	6層	9層	1層	3層	5層	6層	1層	3層	4層	5層	6層	9層
Arboreal pollen	樹木花粉															
Podocarpus	マキ属			2		1		2					1	1		
Abies	モミ属		1	1	6	1		2					4	3		
Picea	トウヒ属													1		
Tsuga	ツガ属		1	5	6	1		2		1			3	1		
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属		1		3	9							7	6		
Cryptomeria japonica	スギ		10	23	33	5		46		12		1	30	44		
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			3				3		1			1			
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	1	1	18	49	4		9		4		1	11	10		1
Salix	ヤナギ属				1									1		
Juglans	クルミ属				1									2		
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			4				1								
Alnus	ハンノキ属				1									1		
Betula	カバノキ属			5		1								5		
Corylus	ハシバミ属			1												
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ			6		1		1		3	1					
Castanea crenata	クリ	3	2	6	10	6	2	15		2		1	9	5		
Castanopsis	シイ属		7	23	31	36	4	62	1	11	1	2	27	38	2	
Fagus	ブナ属		2	2				1		1						
Fagus japonica	イヌブナ			2	1											
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	6	12	14	21	11		41	1	13	3	4	22	23	2	
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	8	21	80	49	65	3	74	3	20	6	5	49	69	8	4
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ	1		6	4	1		1						6		1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属−ムクノキ		3	5	1						1		1		1	
Aesculus turbinata	トチノキ							1		1			2	3		
Vitis	ブドウ属			1									2	5		
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ				1								1			
Clerodendrum	クサギ属							2								
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉															
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科		1	17	7	5		1		7	1		4	4		
Leguminosae	マメ科		1	4	1											
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属−ガマズミ属							1								
Nonarboreal pollen	草本花粉															
Typha-Sparganium	ガマ属−ミクリ属			1	6	2							2	1		
Sagittaria	オモダカ属									1			1			
Gramineae	イネ科	9	27	78	35	14	11	30	1	21	5	7	59	68		1
Oryza	イネ属	4		5	3	2	3	1			2		5	6	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	6	6	1	6	4	3	16	1	4		2	6	7	1	
Aneilema keisak	イボクサ													1		
Monochoria	ミズアオイ属			3	1			1						1		
Polygonum	タデ属			1	1											
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1												
Rumex	ギシギシ属		2	3												
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科		1	2	2	1	1	1		5				1		
Caryophyllaceae	ナデシコ科							4		1			1			
Ranunculus	キンポウゲ属		1													
Thalictrum	カラマツソウ属									1						
Cruciferae	アブラナ科	2		3	5	2	2	12				1	3	4	1	
Impatiens	ツリフネソウ属		2	6									7	3		
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科													2		
Apioideae	セリ亜科	2	2	5	3	2		10					8	2		
Hygrophila lancea	オギノツメ		1													
Valerianaceae	オミナエシ科				1											
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1	1	2								1			
Asteroideae	キク亜科		1	1	2							1		1		
Xanthium	オナモミ属			1												
Artemisia	ヨモギ属	8	34	47	71	66	5	27	3	114	3	3	43	25	3	1
Arboreal pollen	樹木花粉	19	61	207	218	142	9	263	5	69	12	14	170	224	13	6
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	2	21	8	5	0	2	0	7	1	0	4	4	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	32	78	159	138	93	25	102	5	147	10	14	136	122	6	2
Total pollen	花粉総数	51	141	387	364	240	34	367	10	223	23	28	310	350	19	8
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	4.2 $\times10^2$	1.0 $\times10^3$	3.7 $\times10^4$	4.5 $\times10^3$	1.9 $\times10^3$	2.7 $\times10^2$	2.6 $\times10^4$	0.9 $\times10^2$	1.6 $\times10^3$	1.8 $\times10^2$	2.3 $\times10^2$	2.9 $\times10^3$	9.2 $\times10^3$	1.8 $\times10^2$	0.6 $\times10^2$
Unknown pollen	未同定花粉	2	2	2	6	2	0	3	1	3	0	1	8	4	3	0
Fern spore	シダ植物胞子															
Monolate type spore	単条溝胞子	4	14	4	14	19	1	10	2	10	8	7	20	12	10	6
Celatopteris	ミズワラビ						1				1					
Trilate type spore	三条溝胞子	3	37	18	46	65	4	12	2	9	5	6	19	15	10	2
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	7	51	22	60	84	6	22	4	19	14	13	39	27	20	8
Parasite eggs	寄生虫卵															
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵												1			
Total	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
Parasite eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	− −	− −	− −	− −	− −	− −	− −	− −	− −	− −	− −	0.9 ×10	− −	− −	− −
Stone cell	石細胞	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Digestion rimains	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	($\times10^5$)															
未分解遺体片				4.7				0.9						0.5		
分解質遺体片		2.5	10.6	18.3	11.7	10.0	2.5	19.7	3.3	4.4	7.1		10.3	18.8	7.1	2.2
炭化遺体片（微粒炭）			1.5	2.0		0.4		0.9	0.4	0.4			0.5	0.5		

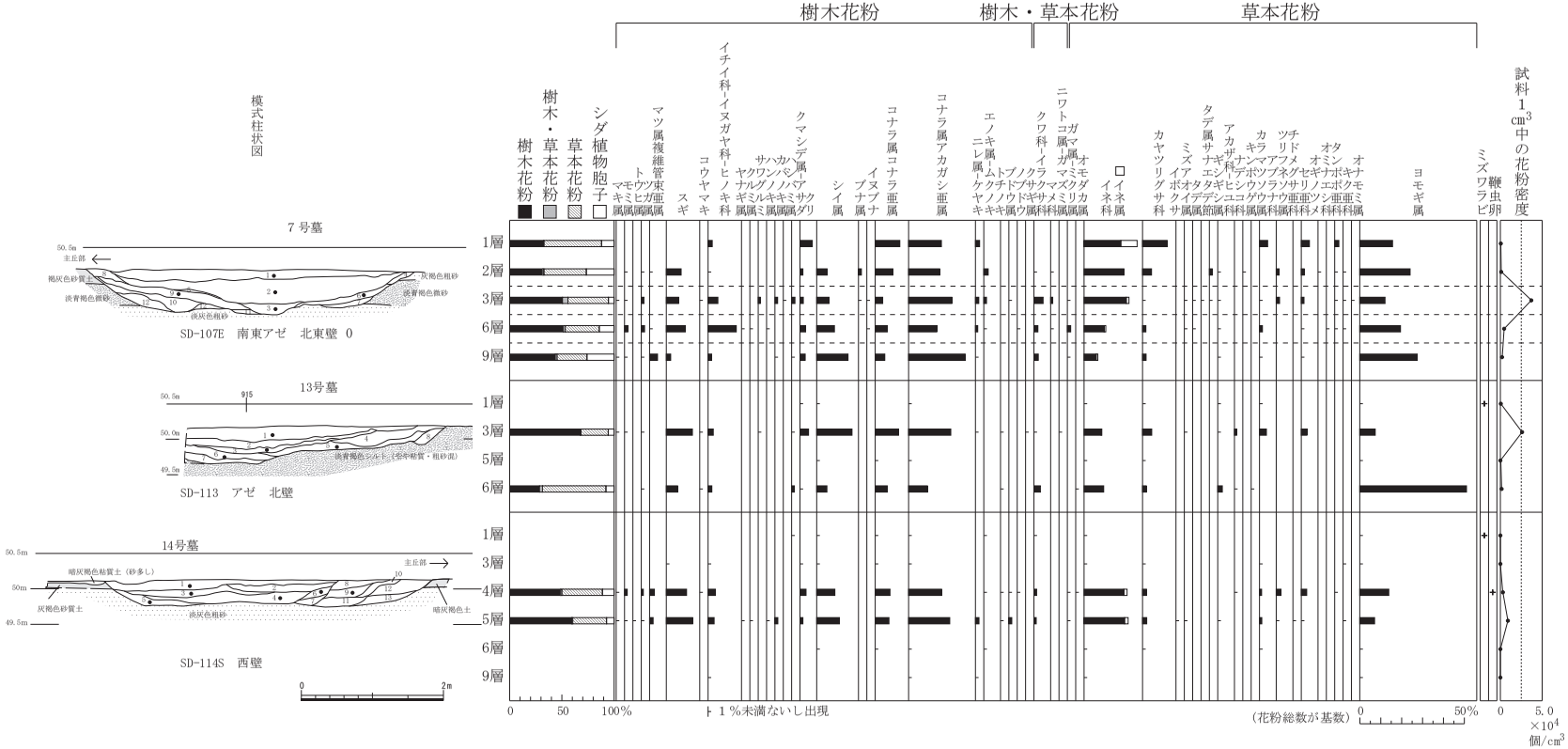

樹木花粉
樹木・草本花粉
草本花粉
模式柱状図
7号墓
SD-107E　南東アゼ　北東壁 0
13号墓
SD-113　アゼ　北壁
14号墓
SD-114S　西壁
樹木花粉
樹木・草本花粉
草本花粉
シダ植物胞子
マツ属複維管束亜属
スギ
コウヤマキ
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科
クマシデ属-カバノキ属
コナラ属コナラ亜属
コナラ属アカガシ亜属
エノキ属-ムクノキ
ニレ属-ケヤキ
クワ科-イラクサ科
ニワトコ属-ガマズミ属
ヨモギ属
ミズワラビ
試料1cm3中の花粉密度
1層
2層
3層
6層
9層
0
50
100%
1%未満ないし出現
(花粉総数が基数)
50%
5.0
×10^4
個/cm3

図1　花粉ダイアグラム

表２　珪藻分析結果

分類群	７号墓-SD107E　南東アゼ北東壁					13号墓-SD113　アゼ北壁				14号墓-SD114S　西壁					
	1層	2層	3層	6層	9層	1層	3層	5層	6層	1層	3層	4層	5層	6層	9層
貧塩性種（淡水生種）															
Achnanthes crenulata		3	1										1		
Achnanthes inflata													5		
Amphora copulata			5				1								
Aulacoseira ambigua		8	321										1		
Caloneis lauta		2	1												
Diploneis yatukaensis							1								
Encyonema silesiacum			2												
Eunotia minor													2		
Eunotia pectinalis			2										2		
Eunotia praerupta		1					1						22	1	
Gomphonema acuminatum			1												
Gomphonema gracile			1												
Gomphonema parvulum			1												
Hantzschia amphioxys		5					3					1	15	1	
Luticola goeppertiana													3		
Luticola mutica		2	2				3						15	2	
Navicula americana			1												
Navicula cuspidata			1			1									
Nitzschia dissipata		1					1								
Pinnularia microstauron			1												
Stauroneis phoenicenteron			1				1								
Staurosira construens			1												
Staurosira construens v. venter			1												
合　計	0	22	343	0	0	1	11	0	0	0	0	1	66	4	0
未同定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
破片	2	50	126	0	0	0	90	0	0	1	0	0	48	0	0
試料１cm^3中の殻数密度	－	4.4×10^3	6.4×10^5	－	－	0.2×10^3	2.2×10^3	－	－	－	－	0.2×10^3	1.3×10^4	0.8×10^3	－
完形殻保存率（％）	－	－	73.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	58.3	－	－

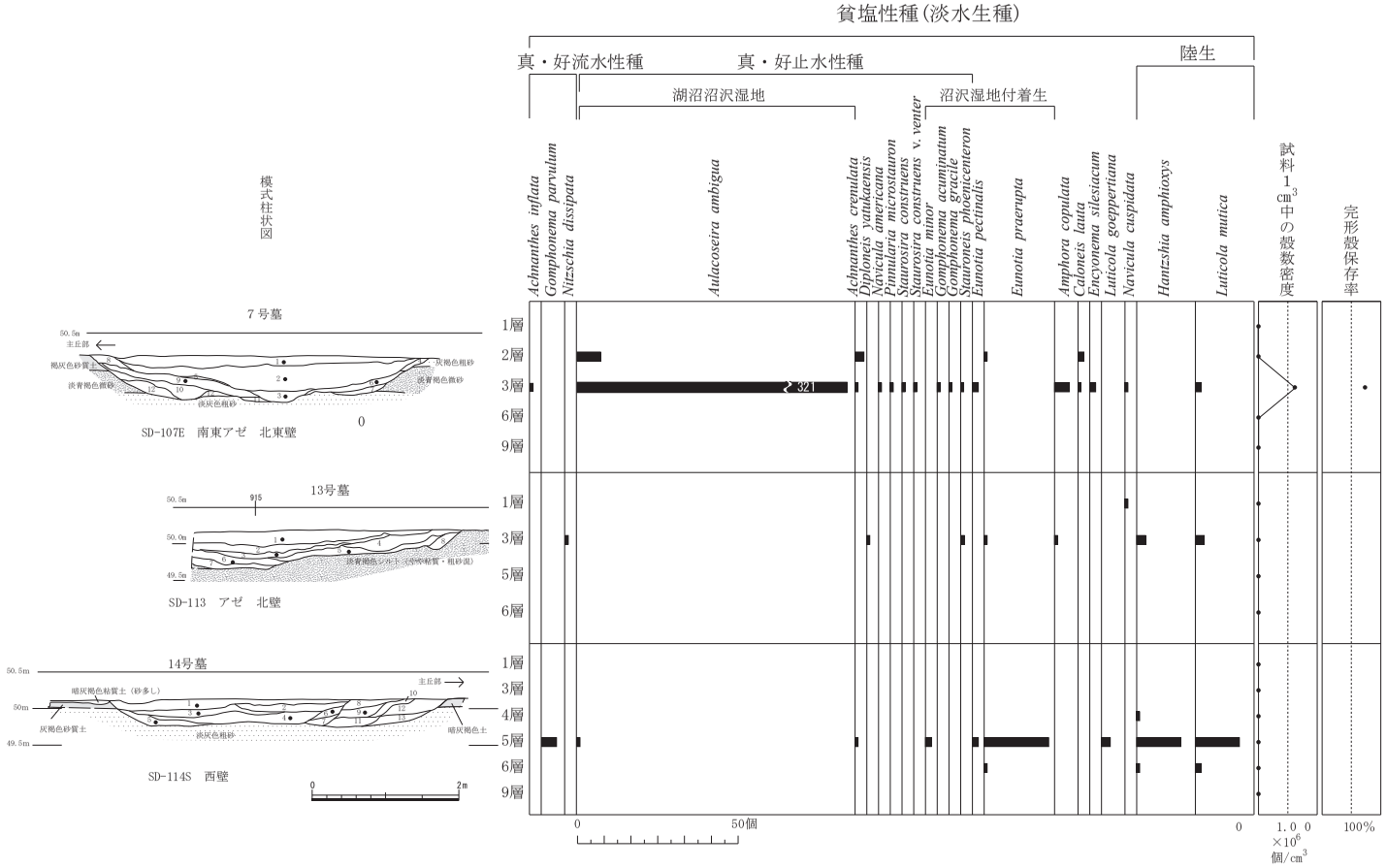

貧塩性種(淡水生種)
真・好流水性種
真・好止水性種
陸生
湖沼沼沢湿地
沼沢湿地付着生
模式柱状図
7号墓
SD-107E　南東アゼ　北東壁
13号墓
SD-113　アゼ　北壁
14号墓
SD-114S　西壁
Achnanthes inflata
Gomphonema parvulum
Nitzschia dissipata
Aulacoseira ambigua
Achnanthes crenulata
Diploneis yatukaensis
Navicula americana
Pinnularia microstauron
Staurosira construens
Staurosira construens v. venter
Eunotia minor
Gomphonema acuminatum
Gomphonema gracile
Stauroneis phoenicenteron
Eunotia pectinalis
Eunotia praerupta
Amphora copulata
Caloneis lauta
Encyonema silesiacum
Luticola goeppertiana
Navicula cuspidata
Hantzshia amphioxys
Luticola mutica
試料1cm3中の殻数密度
完形殻保存率
1層
2層
3層
6層
9層
5層
4層
≧321
50個
1.0 ×10^6 個/cm^3
100%

図２　珪藻ダイアグラム

６．まとめ

７号墓 SD-107E では、周辺にヨモギ属が生育し植生の二次遷移がみられ、上位で水田が拡大する。周辺はコナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要素とし、コナラ属コナラ亜属を構成要素とする照葉樹林が優勢に分布し、二次遷移としてイヌガヤとみられるイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が増加する。３層の時期には、比較的水深のある安定した滞水域が復原される。13 号墓 SD-113 では、下部でヨモギ属が多く二次遷移の初相が示され、周辺にはコナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属を要素とする照葉樹林が分布し、ヨモギ属、イネ科が生育する乾燥した環境で、堆積速度が速かった可能性があり、築造当初の環境を反映したとみなされる。14 号墓 SD-114S でも、イネ科を主とする草本域と照葉樹林とスギ林が分布し、5 層の時期には滞水が認められるが、総じて溝は堆積速度が速かったと考えられる。

参考文献

中村　純（1967）「花粉分析」．古今書院，232p.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録，5，60p.

中村　純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，no.10，p.21-30.

中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学「医動物学　付　実験用動物学　新版臨床検査講座，8」，医歯薬出版，p.9-134.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. １-20.

渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo，pH 耐性能．内田老鶴圃，666p.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae,vol.2,no.1-no.4

［作業従事者］

分析担当者：金原正子・金原美奈子・木寺きみ子

文責任者：金原正子

図版1　調査区全景1

調査地全景（南上空から　左上の池周辺は唐古・鍵遺跡）

図版2　調査区全景2

調査地全景（西上空から）

図版３　調査区全景３

調査地全景（上空から　上が北）

図版４　試掘調査区の成果１

調査前（南から）

第１トレンチ検出状況（北から）

第１トレンチ北端深掘り部（西から）

第１トレンチ深掘り部（北から）

第２トレンチ検出状況（北から）

第２トレンチ中世完掘状況（北から）

第２トレンチ中世完掘状況（南から）

２号墓周溝検出状況（西から）

第３トレンチ検出状況（北から）

第４トレンチ検出状況（北から）

ＳＫ−4001 完掘状況（北東から）

ＳＫ−4001 層序（南西から）

ＳＫ -6051 層序（南西から）

ＳＫ -6051 完掘状況（東から）

ＳＫ -6101 遺物出土状況（西から）

ＳＫ -6101 完掘状況（西から）

ＳＫ -4051 層序（西から）

第２トレンチＳＫ -102 完掘状況（西から）

第５トレンチ検出状況（北から）

ＳＤ -5102 検出状況（西から）

第５トレンチ古代～中世完掘状況（北から）

第６トレンチ検出状況（北から）

第７トレンチ検出状況（北から）

第７トレンチ中世完掘状況（北から）

図版8　本調査区　検出1

本調査区の表土掘削作業

本調査区の遺構検出作業

本調査区遺構検出状況（南から）

本調査区遺構検出状況（南東から）

第６トレンチ北部
ＳＤ-152と落ち込み
の検出状況（南から）

10号墓周辺検出状況
（西から）

14号墓検出状況
（西から）

図版10　本調査区　完掘全景

完掘状況（南東から）

完掘状況（東から）

西半完掘状況
（南東から）

1号墓完掘状況（南東から　手前は7号墓）

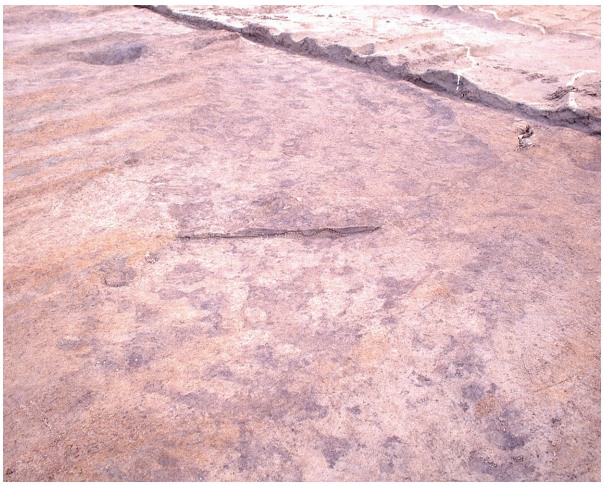
ＳＤ-101E 層序（南西から）

1号墓東周溝内土坑　出土状況

ＳＤ-101S 層序（南東から）

2号墓完掘状況（南東から）

ＳＤ-102N 層序（南東から）



ＳＤ-102E 層序（南西から）

３号墓完掘状況（南東から）

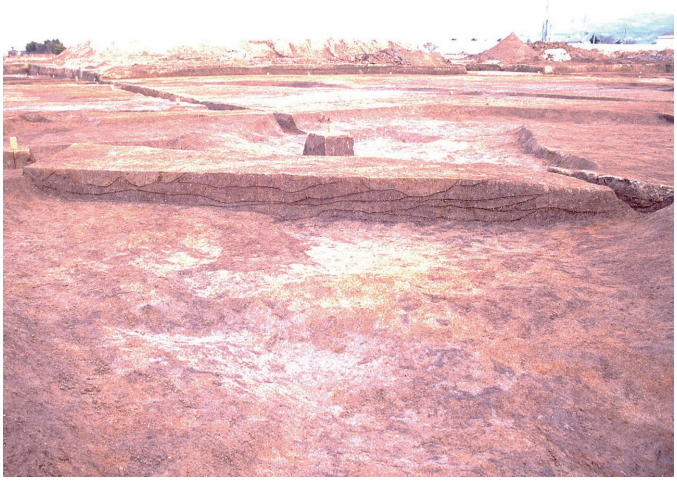
ＳＤ-103W 層序（南東から）

４号・９号墓完掘状況（南西から）

ＳＤ-104E 層序と出土状況（南西から）

ＳＤ-104S 層序（南東から　右はＳＤ-153）

７号墓（中央）・６号墓（左上）完掘状況（南から）



ＳＤ-106W 層序（南西から）

ＳＤ-106N 層序（南東から）

図版14　６号墓・７号墓の調査

ＳＤ－106S 層序
（南東から）

７号墓完掘状況
（南西から）

７号墓完掘状況
（南東から）

ＳＤ－107E 出土状況
（北西から）

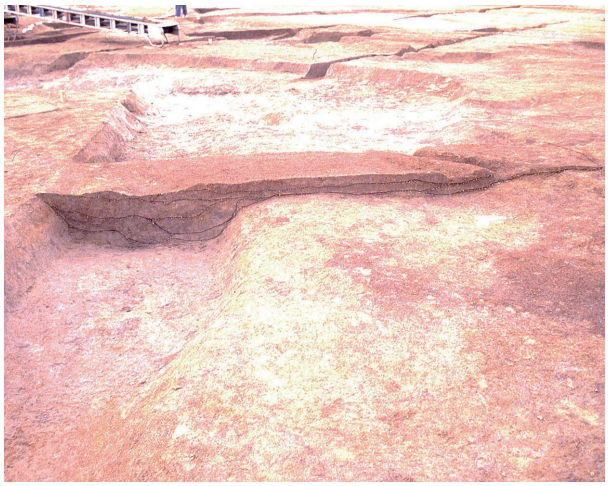
７号墓供献土器
設置状況（北東から）

ＳＤ－107E アゼ内土器出土状況（南東から）

ＳＤ－107E 広口長頸壷設置状況（北東から）

図版16　7号墓の調査

ＳＤ－107E 層序（南西から）



ＳＤ－107N 層序（南東から）

７号墓周溝内小土坑
出土状況および層序
（北から）

ＳＤ－107NB（当初の
北周溝）掘削状況
（北西から）

8号墓完掘状況
（南西から）

ＳＤ-108E・ＳＤ-103W 層序（南から）

ＳＤ-108N 層序（西から）

9号墓完掘状況
（西から）

ＳＤ -109E 層序（南から）

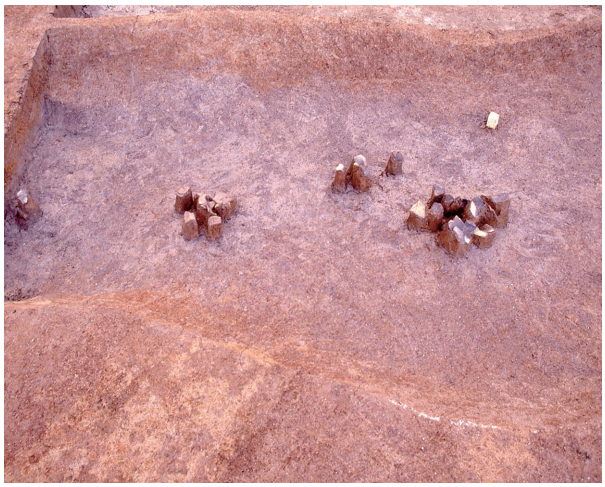
ＳＤ -109S 出土状況（西から）

14 号墓（手前）・10 号墓（右奥）完掘状況（南から）

ＳＤ -110S 出土状況（北から）

ＳＤ -110S 出土状況（西から）

ＳＤ－110N 層序および出土状況（東から）



ＳＤ－110E 北端出土状況（西から）

11 号墓完掘状況（南東から）

ＳＤ－111E 供献土器設置状況（北西から）

図版20　11～13号墓の調査

ＳＤ-111S・ＳＤ-116N
層序（北東から）

12号墓完掘状況（南から）

13号墓完掘状況（北西から）

ＳＤ-113E出土状況
（南から）

14 号墓完掘状況
（西から）

ＳＤ -114W 層序および出土状況（南から）

ＳＤ -114S 東アゼ　層序（西から）

14 号墓南東部
出土状況（南から）

ＳＤ－114 Ｅ南端出土状況（南から）

ＳＤ－114S 中央出土状況（西から）

15 号墓完掘状況
（南から）

17 号墓完掘状況
（東から）

ＳＤ -152 検出
（東から）

ＳＤ -152 第６トレンチ東壁層序（西から）

ＳＤ -152 中央付近層序（北西から）

ＳＤ -152 完掘状況（東から）

ＳＫ-151・ＳＤ-154 完掘状況（東から）

ＳＫ-151 完掘状況（北から）

ＳＫ-151 杭列断面（北から）

第４トレンチ南端の足跡群（西から）

ＳＫ-152 遺物出土状況（東から）

ＳＴ-107 東周溝　広口長頸壷（土-307）

ＳＴ-107 東周溝　細頸壷（土-302）

ＳＴ-107 東周溝　鉢（土-301）

ＳＴ -107 東周溝　大和型甕（土 -303）

ＳＴ -107 東周溝内小土坑出土高坏

ＳＴ -113 東周溝　大和型甕（土 -103）

ＳＴ -113 東周溝　大和型甕（土 -102）

ＳＴ-110 南周溝　広口長頸壷（土-202）

ＳＴ-110 東周溝　甕（土-103）

ＳＴ-110 南周溝　壷（土-201）

ＳＴ-110 北周溝　壷（土-101）

ＳＴ-111 東周溝　鉢（土-302）

図版28　出土した遺物4

ＳＴ-114 南周溝　広口長頸壷（土-301）

ＳＴ-114 西周溝　甕（土-204）

ＳＤ-118 出土　大和型甕

ＳＴ-114 東周溝　甕（土-201）

ＳＴ-114 南周溝　台付鉢（土-302・303）

ＳＤ -101 Ｅ出土　壷蓋（生駒山西麓産）

ＳＴ -102 東周溝　壷（土 -101）

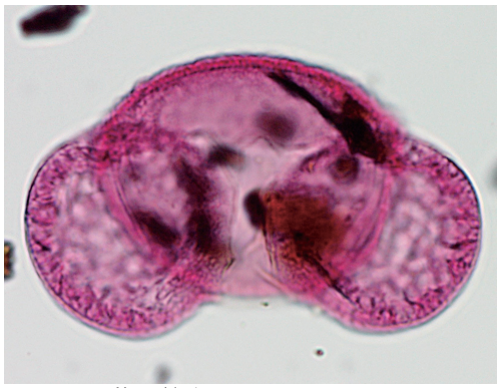
ＳＴ -104 南周溝　壷（土 -202）

ＳＤ -1114 Ｅ出土　縄文土器

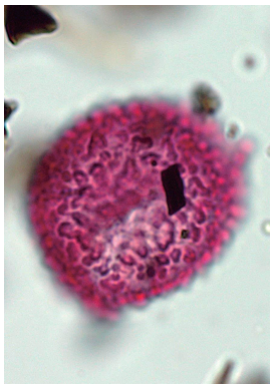
ＳＫ -6101 出土　須恵器壷

第９トレンチ小溝出土　土師器小皿

花粉写真


1　マツ属複維管束亜属

2　スギ


3　コウヤマキ

4　イチイ科
-イヌガヤ科-ヒノキ科

5　シイ属

6　コナラ属コナラ亜属

7　コナラ属アカガシ亜属

8　オモダカ属

9　イネ科

10　イネ属

11　カヤツリグサ科

12　アブラナ科

13　セリ亜科

14　ヨモギ属

15　シダ植物単条溝胞子

16　ミズワラビ

1-15 ━━ 10μm
16 ━ 10μm

※検出箇所
７号墓SD-107E 南東アゼ北東壁６層：6, 11, 14
７号墓SD-107E 南東アゼ北東壁９層：1
13号墓SD-113　アゼ北壁３層：7, 12, 15
14号墓SD-114S 西壁１層:16
14号墓SD-114S 西壁５層:2-5, 8-10, 13

報　告　書　抄　録

ふ り が な	さかてひがしいせき
書　　名	阪手東遺跡発掘調査報告　－第２次調査－
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	田原本町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	４
編 著 者 名	清水琢哉
編 集 機 関	田原本町教育委員会
所　在　地	〒636-0392　奈良県磯城郡田原本町 890-1
発行年月日	2024 年３月 26 日

ふりがな 遺　跡　名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺　跡					
さかてひがしいせき 阪手東遺跡	ならけんしきぐん 奈良県磯城郡 たわらもとちょう 田原本町 さかて 阪手	293636		34° 33′ 25.37″	135° 48′ 8.03″	2001.10.18 ～02.2.19	4,157 ㎡	生涯学習センター建築

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
阪手東遺跡	墓 生産遺跡	弥生時代中期 弥生時代後期 古代 中世	方形周溝墓 18 基 大溝１条 河跡・溝・土坑 溝・土坑 土坑	弥生土器・土師器・須恵器等	唐古・鍵遺跡の南 1.5ｋｍで弥生時代中期中頃の方形周溝墓群を確認。 弥生時代後期には水田に伴う可能性のある堰を伴う土坑と溝を確認。

田原本町埋蔵文化財調査報告書　第４集

阪手東遺跡発掘調査報告

－第２次調査－

発行年月日　令和６年３月 26 日
発行機関　田原本町教育委員会
印　　刷　株式会社アイプリコム